竜胆遥人の迷宮攻略
りんどうはると LABYRINTH BREAK

なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか

逢上央士
一魔太郎

K! 宝島社

なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか

電脳退人の迷宮攻略

逢上央士

このライト文庫

竜胆遥人の迷宮攻
りんどうはると JAIL BREA

なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか

逢上央士
[illust.] 庵太郎

フンオファプリ

チュートリアルをクリアするともっえる
プレイヤー諸元のアプリ

山吹瑠美 ID Ruby
装飾（デコレーション）
リア・サルビア ID LIA
炎矢（ファイアアロー）
胡桃沢ねね ID NaNe
接続（マルチアクセス）

――〈魔獄（ヘルズ）・クラック〉――
の中（なか）、大（だい）量（りょう）――ターゲットの構成要素が
認識として流れ込んでくる。
「……これが……？」

なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか

竜胆遥人の迷宮攻略
JAIL BREAK

このラノ文庫

逢上央士
魔太郎

Illustration 魔太郎
Design ATELIER GLOW

1

「――『LABYRINTH』？」

スマホのホーム画面に、ダウンロードした覚えのない謎のアプリを発見したのは、課外学習で訪れた国立図書館内で、僕が迷子になっている最中のことだった。

「ラビリンス、と読むのか？」

とすると、これはゲームアプリの類だろうか。新しく配信された無料アプリはとりあえずダウンロードする癖が付いているため、意識しないうちに入れていたのかもしれない。

「……まあ、いまはそれどころじゃないか」

ゆっくりと周囲を見回し、自身の現状を嘆いてみる。

「ここは、どこだ？」

見知らぬ廊下、見知らぬ天井。誰も見あたらない細長い回廊で、一人きり。まるで、世界に僕一人しか存在しないような。まるで、異世界へ迷い込んだような。そして――僕一人、いなくなったとしても、世界は何も変わらずそこに在り続けることを、まざまざと見せつけるような……。

「なんて、な」

他愛もないことを脳に描きながら、一人苦笑する。この図書館には、他にも課外学習で訪れた神奈木学園一年の生徒たちがいる。別に僕一人きりってわけじゃない。

「まあ、誰がいても、僕にはあまり関係ないけど」

誰に言うでもなくそうつぶやいた僕は、スマホに搭載されている地図アプリを立ち上げることで、とりあえずの現状打破を試みる。

「実際問題、ここはどこなんだ……？」

図書館が配信しているフロアマップと、GPSから得た位置情報を読み込んだアプリが、現在地を示す。結果、ここが書庫棟十二階に位置する場所であることが分かった。

「……おかしいな」

僕はこの自由行動時間を、本棟六階のカフェで遅い朝食でもとりながら一人満喫しようと考えていたはず。それがなぜ、建物すら違う書庫棟の最上階なぞにいるのだろうか。

……方向音痴にも、限度ってものがあるだろうに。

「？……？？」

地図を表示させたままスマホをクルクルと回転させてみるが、ここから本来の目的地までどうやって行けばいいのか、さっぱり見当も付かない。

「はぁ、仕方ない――コレの出番か」

溜息を吐いた僕は、アプリ画面の右下にある「道案内」と記されたボタンをタップする。

さらに、

「目的地を指定して……っと」

フロアマップからお目当てのカフェを探し出し、ロングタップする――その瞬間、スマホのディスプレイ上にコンパスのような大きな矢印が表示された。

「後は、これに従って行けばいい、と」

矢印はしっかりと廊下に沿って進むべき方向を示しており、表示に従っていけば、僕でも迷うことなく目的地に到達できる仕組みになっている。似た機能を持ったアプリもあるようだが、コレは随分と前に、僕が『ぼっち』の弱点をフォローするために標準アプリの機能を組み合わせてカスタマイズしたものだ。

「……ん？」

迷子の状況から解き放たれ一安心した僕は、ふと、廊下沿いに並ぶ無数の扉の一つが大きく開け放たれているのを発見する。何かに引かれるようにそちらへと足を向け、光が漏れ出す扉の向こうを覗き込むと……、

「へぇ……」

まだ新しい書棚が壁一面に並び、書籍保護用の特殊照明が全体を柔らかく照らす小空間。小窓の外からは、自由時間を満喫する同級生たちの声が聞こえまるでＢＧＭのように微かに聞こえており、その適度な『距離感』が僕を妙に安心させる。

「……ここでも、いいか」

考えてみれば、カフェは同じことを考えた学生たちでごった返していることだろう。朝食をとっていないのはいつものことなので、さほど腹を満たす必要も感じていない。無意識に人気のない場所を求め、ここに辿り着いたのだろう。そんなことを考えた僕は、意外に居心地良さげなその部屋で、集合時間までの暇を過ごすことに決めた。

「書籍、ね」

目の前に並ぶ背表紙を何とはなしに見やる。

文字コンテンツの多くが電子化されて久しい昨今。紙の書籍や図書館に対する需要は日に日に減少の一途を辿っている。いま僕がいるこの立派な建物すら例外ではなく、貸し切りでもないのに、館内にいるのは課外学習にやって来た僕らのみという有様だ。建物をリニューアルしたり、独自配信のフロアマップを用意するなど、図書館側も利用者を増やすためにあれこれ努力しているようだが……。

「これも時代の流れ、か……」

目まぐるしく変化する環境に、常に追いつき対応し続けることを、まるで当たり前であるかのように求める風潮――その象徴ともいえる、スマホ。うっかり紛失しようものなら生活が立ちゆかなくなるほど、ありとあらゆる情報や機能が日々追加・更新され続けているこの情報端末は、絶え間ない「変化」を否応なく意識させる存在だ。

しかし、その「変化」は、必ずしも僕の求めているものではない。義務感に取り憑かれたように就って情報を貪りつつも、どこか空虚で物足りない感覚を味わい続ける日々。

――望まぬ変化なんて、僕にとっては煩わしい害悪でしかないのに。

「なんて、な」

益体もないことをつらつらと考えつつ、手近な椅子に腰掛けた僕は、もてあました時間を浪費すべく、スマホへと目を向ける。

「……む」

そこにあるのは、先ほども気になった「LEVYRINTH」という謎のアプリ。シンプルなデザインながら、じっと見つめていると思わず吸い込まれそうに感じるアプリアイコン。その妙な存在感に引き寄せられるように、指が自然とアイコンへ重なる

――ブゥンッ……

瞬間、視界が大きくブレたような、どこか目眩に似た感覚を覚える。

「！　――何だ？　いまのは」

改めてスマホに目を向けるも、そこには変わらぬホーム画面が存在するだけだ。

「データが壊れているのか……？」

念のため、件のアプリをもう一度起動してみようと画面に指を向けた、そのとき、

「おーっす。こんなところにいたのか」

同じ制服を身に纏った男が、入り口から僕の姿を見てニカッと笑う。栗色のくせっ毛をゆらしながら、健康的に焼けた顔に笑みを浮かべるこの男は……、

「……誰だっけ」

「おいおい、竜胆遠人サンよ。この橘悠士の名を忘れちまったってのは、ちと薄情じゃないか？」

若干悲しそうな表情とともに溜息を吐く男。……ああ、そうだ。この男は橘悠士。別クラスにもかかわらず、僕みたいな無愛想な人間に何度も話しかけてくる希有な人物——学園で唯一「友人」と呼べる存在といっていいかもしれない。

「こんなところに一人でいるなんて相変わらずだな。何をやってるんだ？」

「別に、なんでもないよ」

「なんでもないってことはないだろ。隠さず教えてくれよ、なっ」

ぶっきらぼうな僕の返しに、橘は目を輝かせながら続きを促してくる。……大抵のやつは、こう返せばそれ以上深く関わってこようとしないんだけどな。

「……ちょっと、暇つぶしをね」

調子が狂う感覚に戸惑いながら、僕は短い返事とともに手にしたスマホを軽く振る。

「なんだなんだ？　ゲームでもしてたのか？」

「……違うよ」

橘が興味津々といった態でこちらに近づいてくる。作業を諦めた僕は彼に向き直りつつ、続く言葉を頭の中で模索する。

「ゲームを作る……正確に言うと、ゲームを作り替えて遊ぶつもりだったんだ」

「……へ？」

僕の言葉に目を丸くした橘は、スマホと僕の顔とを交互に覗き込んでくる。

「ゲームを作り替えるって……、スマホ一つでできるものなのか？」

「ああ、ええと……」

橘の当然の問いに、僕はどう答えたものか戸惑いながら、ゆっくりと口を開く。

「……このスマホは、『カスタムOSアプリ』が入れてあるんだ」

「カスタム……？　なんだ、それ？」

ますます好奇心を強くする橘に、僕は頭を悩ませながら言葉を続ける。

「スマホのシステムに侵入して、中身をカスタマイズするアプリだけど……」

「？　つまり、どういうことだってばよ？」

橘はあまりこの手のことに詳しくないらしい。……まいったな

「あー……」

慎重に言葉を選ぶ癖のためか、僕は自然と発音がぶっきらぼうになったり、返事が遅くなることが多い。しかし、ニコニコと笑う橘は気にした様子もない。しばしの思案の後、僕は言葉での説明を諦める。

「橘、スマホを貸してくれないか？」

「ん？　ほらよ」

ポンと手渡されたそれを見て、僕は驚く。

「……随分と古いモデルのスマホだな」

「え？　そうか？」

数ヶ月ごとに新しい機種が次から次へと出るこの時代に、三年以上前のモデルを使い続けているとは、随分と物持ちがいい。そもそも、禅奈木学園の生徒には一台ずつ最新のスマホが配布されているはずだが……かくいう僕も、カスタマイズのために自分で購入したものをメインで使っているし、橘にも何か理由があるのだろう。

「……まあ、僕がとやかく言うことじゃない。余計なことは口にしないに限る

「普段、橘がカメラを使うとき、このシャッターボタンをタップするだろ。……ところが僕のスマホは、ほら」

「？　これがどうかしたのか？」

ぽんっと手渡されたスマホに何か仕掛けでもあるのかと、上から下からジロジロと覗き込む橋　そのとき、

「――撮影」

僕が指をパチンと鳴らすと、スマホのシャッターが小さくカシャッと鳴る。

「！　な、なんだいまのは？　タイマーでもなかった……よな？」

「スマホのカメラとマイクを連動させて、僕の声と指を鳴らす音が同時に入力されたときだけ、自動でシャッターが切れるように改造してあるんだ」

標準にある機能を繋げただけ。地図アプリをカスタマイズしたのと同じ要領だ。

「す、すげえ、そんなことができるのか……。もしかして、他にも色々できるのか？」

スマホを僕に返しながら素直に感心した様子を表してくれる橋に、僕も肩の力が抜けたのか、先ほどよりも淀みなく言葉が口から飛び出す。

「いまのはいわゆる機能追加ってやつだけど、特定の機能を無効にしたりもできるよ。例えば、面倒なパスコード入力をオフにしたり、カメラのシャッター音を消したり……」

続けようとした言葉を遮るように、興奮した様子の橋が詰め寄ってくる。

「何い!?　いますぐっー　いますぐ。俺のスマホにもその「カスタムなんたら」を入れてくれ！　シャッター音を消したカメラが、いまみたいに遠隔操作できれば――むふっ」

だらしない笑みを浮かべる橘に、おおよその考えを悟る。

「……残念だけど、橘のスマホは僕のと違い過ぎてカスタムＯＳアプリが入らないよ」

「えー、そんなぁ……」

調べればできないことはないと思うが、知り合いの名前をネットニュースで見かける事態にならないよう、伏せておくのがいいだろう。

「こんな感じで、このカスタムＯＳアプリを使って入れたプログラムソールを使えば、既製のゲームの中身を解析したり、改造したりして遊べるんだよ」

ゲームをやっていて「ここはこうだったらいいのに」とか「こんな機能があればいいのに」と思うことは誰にでもあるだろう。そういった要素を後付けして、ゲームを自分の理想とする世界へ改変できるのが、このソールの特徴だ。

「へえ、そんなことまでできるのか。よくわからんがちょっと面白そうだな」

「……橘は、スマホでゲームをやったりしないのか？」

先ほど見せてもらったスマホには、標準搭載のアプリ以外何も入っていなかった。少し気になり、思わず尋ねてみる。

「電子機器の類はどうも苦手でな　電話以外はもっぱらカメラとして使っているだけだ」

そう言いながら、橘は手慣れた操作で僕の呆けた顔を撮影する。カシャッという思いのほか大きな音が、静寂に包まれた室内に響く。

「いきなり撮るなって…、苦手なわりには随分とカメラアプリの扱いが上手いな」

「これだけは必死になって覚えたんだよ。将来に向けて色々と修業しておきたいしな」

「将来？」

「前に言わなかったか？　俺、カメラマンになりたいんだよ」

そう言われて、おぼろげに記憶がよみがえってくる。

「冒険カメラマン……だったか？」

秘境や絶景の写真を撮って大金を稼ぐのが夢だと、いつだったか聞かされた気がする。

「その通り！　……まあ、俺も昔はやんちゃして、家族に随分と迷惑掛けちまったから、その罪滅ぼし……っつーか恩返しみたいなもんだけどな」

「っ」

照れくさそうにする橘から飛び出した「家族」という単語に、身体が強張るのを感じる。

……調子に乗って、少し踏み込みすぎたかもしれない。

「どうかしたのか？」

「……いや、なんでもない」

「？」

日ごもる僕に、橘は首をかしげつつも、それほど気にした様子もなく入り口近くの書棚に近づき、本を一冊手に取る。

「まぁカメラにしても、画面一の操作だけで動かすのはどうも慣れなくてなぁ。やっぱり、モノも人付き合いも、実際に感触を確かめられるものが一番だぜ」

僕とは理由が違うようだが、いまどき珍しくコミュニケーションアプリの類をほとんど使っていないという橘に、妙な親近感を抱く。

――世界中の人々や情報と繋がることができるスマホだが、同時に、使用中は周囲に対する適度な「壁」の役割を果たしてくれるツールでもある。

アプリ改造は、家や学園で周りと距離を置けるようにと、なんとなく始めたものだったが、思い通りに世界を作り替える感覚にすっかりハマってしまい、いまでは立派な趣味となっている。

「外と繋がらず、自分の世界造りに勤しむ、ってか」

スマホを見つめながらぽつりとつぶやいた僕が、ふと顔を上げると、

「？　……橘？」

目を離した数秒の間に、書棚の前にあった橘の姿が消えていた。

窓の外で遠く聞こえていた喧噪もいつのまにか、切が止み、辺り一帯を包むのは不気味なまでの静寂――何かがおかしいと感じた、その瞬間、

――世界が、光に包まれた。

「っ!?」

思わず目を閉じた僕は、手に持つスマホを強く握りしめる。真っ白な光に全身を包まれながら、自身の存在すら曖昧になっていく感覚の中で、掌の中にある固い感触だけが、かろうじて僕をこの場に繋ぎ止めてくれる。

しばらくの後、目蓋を覆うまばゆさが弱まったのを感じた僕は、ゆっくりと目を開ける。

「な……っ!?」

夢でも見ているのかと思った。それほどまでに、目の前の光景は荒唐無稽に過ぎた。

「ここは……どこ、だ？」

モダンな本棚に照明の光が煌々と降り注ぐ、図書館の小部屋であるべき場所は――ゲーム世界の迷宮のような、薄暗く不気味な洞窟へと様変わりしていた。

II

「な、何が起こったんだ……」

呆然と、手近な壁へ掌を伸ばす。ひんやりとした固い感触が、夢幻でないことを嫌でも実感させる。

「これは……」

よく見ると、それはただの壁ではなく「書棚」だった。原始的な、岩を掘って作られたような硬質の書棚。中の書籍は、まるで接着剤で貼り付けたか、はたまた書棚と一続きに彫られた彫刻であるかのように、どれも取り出すことができない。

「どうなっているんだ……？」

おそるおそる辺りを見回す。天井全体が薄ぼんやりと光る広間のような空間。周囲の壁は、どこもかしこも同じように書物でできているようだ。しかし、

「扉……？」

広間の両側には一つずつ扉が設置されていた。僕は、すぐ背後にある大片までそびえる巨大な扉を見上げる。空想の怪物を模した彫刻が精緻に施されたその扉にも触れてみるが、押しても引いてもピタリとも動かない。念のため、向こう側にある小さな扉も調べてみようと、一歩踏み出した瞬間、

――ピピッ――

「!?」

突然スマホが発した通知音に、思わず身体がビクリと震える。吸い寄せられるようにディスプレイを覗き込むと、

【同期が完了しました】

「同期……？　なんのことだ？」

困惑したまま、スリープ状態からホーム画面を呼び出す

「……え？」

そこに表示されていたのは、大幅にデザインが変更されたホーム画面　いままであったはずのアプリはどこかへと消え去り、代わりに〈撮影〉と〈情報〉と名の付いた二つのアプリアイコンだけが存在を主張している。

「ん？」

〈情報〉に未読メッセージの通知を発見し、訝しみつつもアプリを起動してみる。

【LaY・HALサマ・ダンション探索ゲーム『LaYYRINTH』の世界へようこソ！】

直後、画面一杯にバーチャルペットじみたキャラクターが表示され、いかにもといった合成音声で語りかけてきた。

『Lv.YRNTTT』というと、あの謎アプリのことか。壊れていたんじゃ……？

【Lv.：ワタシはナビゲーターのLv.デス。これからこのゲームについてご説明させていただきマス！】

ナビゲーター……。いや、ゲームって何のことだ？

【Lv.：アナタの目的はズバリ！　このダンジョン――全六層を攻略することデス！】

「このダンジョン？　……まさか」

僕はスマホと周囲とを交互に見比べる。

【Lv.：もうお気づきかと思いますガ、ダンジョンを探索するプレイヤーはアナタ自身デス。その足でフロアを踏み進ミ、手持ちの道具を駆使シ、数々の障害を乗り越エ、ダンジョンの地下層――第六階層・最終フロアまで辿り着いてくださイ！】

「……マジか」

没入型の体感ゲームは僕もプレイしたことがあるが、ヘッドマウントディスプレイの網を被った覚えはないし、そもそもここまで現実と比較しても遜色ないリアルな感覚を味わえるものは聞いたことがない。……というか、現実そのものとしか思えない。

【Lv.1 正直面倒臭いと思ったそこのアナタ　そう判断するのは早計ですヨ？】

次の説明を聞いた瞬間、あまりに突拍子もないその内容に頭の中が真っ白になる。

【Lv.1 「LABYRINTH」はただのゲームではありませンー　トップでゲームをクリアしたプレイヤーに八、報酬として「望む願い」を何でも一つだけ叶えてさし上げマス！】

「願いが……叶う、だって？」

不可思議な体験が妙なリアリティを持っているせいだろうか。常なら一笑に付すような戯言が、妙な説得力をもって胸の内にスッと落ちてくる。無理矢理にでも納得しないと、頭がどうにかなってしまいそうだったのかもしれない

【LuV】まずは、「チュートリアルフロア」の謎を解いてみましょう。特別に体力消費はありませんのデ、じっくりとダンジョン攻略の基本をマスターしてくださイ。アナタのご健闘をお祈りしマス！】

メッセージ終了とともに、LuVとやらのアバターが消える。

「ははは……。何だってんだ、これは」

スマホを握りしめながら、乾いた笑いがこぼれる。

「……とりあえず、先へ進んでみるか」

何やらおかしなゲームに強制的に巻き込まれてしまったようだ。僕は、ナビゲーターの指示に促されるように、奥にあった小さな扉に手を掛ける。抵抗なく開かれたその向こう――薄暗く細い回廊へ歩を進めながら、僕は先ほどのメッセージを頭の中で振り返る。

「謎を解く……って言ってたよな。ひょっとして、リアル脱出ゲームみたいなものか？」

そういえば、国立図書館でもそういったイベントが開かれたことがあると案内に書いてあった。もしやこれは、来館者に対するサプライズイベントのようなものだろうか？

「でも、一瞬にして建物の造りが変わるなんて、常識的にありえるのか……？」

地に足が付かない感覚はそのままに、僕は首を捻りながら曲がり角を右へと進む。

――目の前には、身の丈二メートルはあるオオトカゲが立ち塞がっていた。

「な、な、なっ……!?」

鋭い眼光でこちらをギロリと睨み、薄く開いた口元から鋭い牙とうめき声とを漏らす怪物。そのとき、スマホから短い電子音とともに【LEV：ダンジョン内でハ、この『バジリスク』をはじめとした厳モンスターが多数登場しマス。チュートリアルですから、見た目ほど強くないですヨ？】

「つ、強くないって言われても……」

奇妙な単語を連発した、トカゲともニワトリともつかない伝説上の生物――バジリスク。ゲーム世界でしばしば見かける有名な怪物が、CGやハリボテでは決してあり得ない圧倒的な存在感によって、僕の身体を硬直させる。

【LEV：アナタハ、決して丸腰ではありませンノ、いまアナタが握っているソレハ、ただのお飾りではないのですヨ？】

「に、握っている――って」

手の中にあるのは、スマホだけ。先ほども『手持ちの道具を駆使しろ』などと言われていた気がするが……、

「情報アプリとカメラアプリしか使えないスマホで、一体何をしろって言うんだ……」

次の瞬間、突然の咆哮とともに、鱗を纏った尻尾が鞭のごとく振るわれる。

「う、うわぁっ!?」

鼻先をかすめたそれは真横の書棚を激しく抉り取り、耳をつんざく破壊音と細かな破片とが、僕の身体に降り注ぐ。

「っ」

たまらず頭を抱えながら足元に目をやる。すると、いまの攻撃で本棚から零れ落ちたのだろうか、一冊の手帳のようなものを左膝の中に発見する。

「これ、は……」

無意識にそちらへと手を伸ばした瞬間、バジリスクは人音叉の咆哮を放ち、フロア全体をビリビリと震わせた。

「ひっ……」

一瞬で頭の中が真っ白になる。身に迫る危険にもかかわらず、両足はまったく言うことを聞いてくれない。ぐるぐると回る思考とは裏腹に、僕の意識は身体から乖離していく。

「あ、あ……」

ゆっくりとこちらに近づいてくる怪物に追い詰められていく自身の姿を、まるで他人事のように見つめるだけの僕。呆然と、この理不尽な状況を生み出した何者かに恨み節を吐く暇もなく、短いゲームの幕を下ろそうとした、そのとき、

「――〈炎球（ファイア・ボール）〉！」

どこからか飛んできた甲高い声とともに、何かが怪物の背中に激突する。爆風に包まれ弾け飛ぶ異形の身体。やがて、細かな光の粒子へと変化していった怪物は、キラキラと輝きながらゆっくりと消失していく。

「いまのは……」

呆けた顔でその様子を見つめていた僕の前に、光の背後から一つの影が現れる。

――爆風の余波でひらひらと舞い上がり、光の反射でキラキラと色彩を変える美しい髪。まるで大輪の薔薇のようなその中心で、翠玉（エメラルド）のごとく輝く瞳は真っ直ぐこちらを見据え、牡丹の蕾のように薄い朱を帯びた唇からは、透き通った声が凛と響く。

「私の他にも、ヒトがいたのね……ねえ、大丈夫だった？」

そこに立っていたのは、風変わりな衣装を身に纏い、手に短い杖を持った、一人の少女だった。

*

「――私は、リア・サルビアよ。アナタは？」

精緻な刺繍を施されたローブを身に纏い、薄紺のようなリボンを巻いたロッドを扱う少女　コスプレとは思えない妙にしっくりとくるその姿をぼんやり眺めていた僕に、意志の強そうな瞳から訝しむような視線が注がれる。

「？　ねえ、聞いてる？」

「あ、ああ。竜胆。通人……だ」

「リンドウ・ハルト？　変わった名前ね。その服も見たことないつくりだし……」

ごく一般的なブレザー制服を物珍しそうに見やる少女。――そちらも負けていないが。

「ほら、立てる？」

尻餅をついたままだった僕は、柔らかく小さな手に触れドギマギしつつ、思いのほか力強い彼女の助けを借りて立ち上がる。

「あ、ありがとう、サルビア……さん」

「リアでいいわ、私もハルトって呼ばせてもらうから、そっちが名前でいいのよね？」

「あ、ああ……」

こちらの戸惑いを無視するように、マイペースに話を進める少女――リア。

――ピー、ピー、ピー

突如、先ほどモンスターがいたあたりから、アラート音が鳴り響く

音の発信源は、いつの間にかその場に落としていた僕のスマホだった。急いで拾い上げると、アラート音がピクリと止む。どうやら所有者がスマホから離れると、自動的にアラートが鳴る仕組みになっているらしい。僕自身が設定した覚えはないので、これもおそらく【LOVERING】に備わった機能の一つなのだろう。

「ねえねえ、それって何？」

無言でスマホを見つめていた僕に、興味深げに顔を寄せながらリアが尋ねてくる。こんなに間近で人と話す機会など皆無に等しい僕は、その距離感に戸惑いながら口を開く。

「す、スマホだけど……」

「すまほ？　聞いたことないアイテムね。もしかして、ここで見つけたの？」

「いや、僕の私物だけど」

「ふうん……」

何事か考えながらスマホと僕とを見比べていたリアの瞳が突然輝き出す。

「――もしかしてアナタ……現世界の人？」

「プレゼンス？」

「ええ。図書館に伝わるお伽噺に出てくる、もう一つの世界のことよ」

「……ビブリス？」

聞き慣れない単語の連続に面食らう僕に対し、リアは語るように言葉を紡ぎ出す。

「――最も近くて、最も遠い隣人にして神なる幹。決して交わることのない、交わってはならない、異なる理に生きる世界……。それが、現世界よ」

つまり『異世界』ということか？　ファンタジーダンジョンの次は異世界人ときたか。

「！　……ここって、現世界なの？」

「い、いや、どうだろう。僕も気がついたらここにいて、まだよく分かっていないんだ」

「そっか……。実は、私もなのよね。こんな洞窟、図書館で見たこともないし」

この非現実的な光景に、むしろここはリアの言う『図書館』とやらなのでは、と思ったのだが、彼女の様子からすると、それとも少し違うようだ。

「はぁ……、一体何がどうなっているのかしら」

「……」

小さく肩を落とすリアを、気づかれないように観察する。彼女はゲームでいうところのNPC……これが仮想世界でないとしたらキャストになるのか？　それにしては、彼女に芝居じみたものは感じられない。これが演技なのだとしたら、大した役者ぶりだ。

「？　どうしたの？」

「……いや、なんでもないよ」

色々推測ばかり立てていても仕方ない。ただでさえ信じられない出来事の連続で頭が整理しきれていないのだ。

「スマホ……だっけ？　どんな効果があるマジックアイテムなの？」
「マジックアイテム？　いや、別にこれはそんな大層な物じゃなくて……」
戸惑いながらスマホのボタンを操作し、スリープ状態を解除する。
「わっ、何これ！　いま何をしたの？」
「いや、普通にホーム画面を立ち上げただけで……」
「ほーむがめん？　よくわからないけど、やっぱりこれマジックアイテムじゃない！　それで？　一体どんな効果があるの？」
効果っていっても、まともに使えそうなアプリは二つしかないからな……。
「ああ、さっきのメッセージは表示できるか」
〈情報〉アプリを立ち上げ、LINEからのメッセージを画面に表示させる。
「なびげーたー？　ちゅーとりある？　これ、何かの呪文なの？」
「ええとだな……」
立て続けに投げかけられる質問に面食らうが、リアの纏う不思議な雰囲気のせいか、会ったばかりの彼女と話すことにさほど抵抗を感じない自分に内心驚く。
「つまり、私たちはこの『らびりんす』っていうげーむ？　に巻き込まれたってこと？」
いきなりそんなことを言われて、さぞかし腹でも立てているかと思いきや、
「……面白そう！」

リアは目をキラキラと輝かせながら、興奮した様子で声を上げた。
「まるでお伽噺の冒険譚みたいじゃない！　こんな体験ができるなんて、やっぱり外に出て正解だったわ！」
「外に出る？」
「要するに、このだんじょんの一番下まで行けばいいのね。ふふっ、楽しみだわ」
僕の言葉が耳に入らない様子で、リアは手に持つロッドをギュッと握りしめる。
「よしっ、そうと決まれば早速行くわよ！　ハルト！」
「は？」
リアは当たり前のようにこちらを振り返り告げる。
「さっきみたいな魔物が出てきたら、ハルト一人じゃ対処できないでしょ。特別に私に付き添うことを許可してあげるわ。ありがたく思いなさい！」
「いや、あのな……」
勝手に話を決められても困ると口を開こうとしたが、いまの僕では彼女の言う通り、先ほどのような怪物に遭遇した時点でアウトだ。
「……よろしく」
「うんっ、よろしくしてあげるわ！」
小さく溜息を吐きながらつぶやく僕に、リアは力強い笑顔を浮かべたのだった。

III

「――〈炎矢（フレア・アロー）〉！」

リアのロッドから生まれた無数の炎の矢が、翼を持つ蛇に襲いかかる。[1]その説明通り、チュートリアルフロアの敵の強さは大したことないらしく、リアが次々と放つ魔法によっていとも簡単に消滅してしまう。

しかし、戦う術を持たない僕では、そんな雑魚敵（ザコ）すらも相手にできず、やれることといったら彼女の戦いを見守ることのみ。そんな現状に、次第に歯がゆさが募ってくる。

「それにしても……」

こうして間近で見る度に、彼女が放つ「魔法」としか表現しようのない不思議な力が、よくできたVFXの類では決してないことがわかる。彼女が「魔物」と呼ぶ怪物たちといい、本当に異世界が実在するのではないかと思ってしまう。

「ふう、お待たせ　ハルト」

息を整えながらこちらに戻ってくるリアを迎える。

「さっきの魔物、マジックアイテムを落としていったわ。……これは前の魔導書ね」

「あ、ああ。預かるよ」

バシリスクとの戦闘でも見かけた手帳型アイテムをリアから受け取る。ダンジョン内で

はこうして手帳サイズの魔導書をドロップすることが度々あった。
「これも使わないのか？」
「ええ。元々私のロッドには、炎系魔法が内蔵されているしね」
魔導書に込められた魔法は、リアのロッドを媒介とすることで一回限り使用可能な仕組みになっているらしい。それに対し、ロッドに元来備わっている機能だという炎魔法には使用制限がないため、リアはほとんどの戦いをこれら内蔵魔法だけでこなしていた。
「魔力…だっけ？　それはどちらの魔法を使う場合でも消費するんだろう？」
「そのはずなのだけど、不思議なことにいくら使っても減る気配がないのよね…」
チュートリアルフロアでは体力消費がない、ということが言っていたことを思い出す。魔力が減らないというのは、そのあたりと関係があったりするのだろうか。
「よっと」
リアから預かった魔導書を片手でまとめて抱え、先へと歩き始めたリアに続く。
「ふふん。自分で荷物持ちを買って出るなんて、殊勝な準度じゃない」
「…まあね」
ロッドも魔力も持たない僕では、魔導書を使用することができないため、どうしても戦いをリア任せにせざるを得ない。ただの役立たずでいたくないなら、自分のできることで少しでも彼女をサポートする道を模索するしかないのだ。

「？」

先ほどの戦いを思い出しながらリアをジッと見つめていると、視線に気づいた彼女が訝しげに首をかしげる。

「何よ、気になることでもあるの？」

「……いや、なんでもないよ」

そう言って首を振ると、リアは小さな溜息を吐き出す

「あのねぇ……、言いたいことがあるなら、はっきりと口にしないと伝わらないわよ」

「だから、大したことじゃないって」

「ならいいけど」

不満顔のリアはそうつぶやき歩き出す。……余計なことは言わないほうがいいよな

「……はぁ。また、行き止まりね」

正面には巨大な書棚が行く手を遮るように鎮座していた。周囲の壁と同様、押しても引いてもびくともせず、中の本を取り出せないため強引に道を作ることもできない

「これで四度目の行き止まりか。他に行ってない場所は……」

「ないわね」

「……よく断言できるね」

「ふふん。頭の中に地図を描いておけば、このくらいのフロアで迷ったりしないわ」

さらりと言ってのけるリアに、図立図書館内で迷子になったばかりの僕は感心するしかない。女性は地図が読めないというが、あれは迷信だな

「これで一通り回ったってことか」

スマホの時計を見ると、リアと出会ってから二十分ほどが経過していた。

「敵もあらかたリアが倒してくれた、ということは……」

そのとき、以前も耳にした嫌な通知音がスマホから鳴り出す。

【Lv.：ダンジョン内でハ、モンスターとのバトル以外にモ、様々な謎や仕掛けが隠されていマス。肉体だけでなク、頭も駆使しなければ、クリアはできませんヨ？】

「ー　か、可愛いっ……！　何これっ、何これっ」

画面一杯に表示されたLv.の姿を目にしたリアが、声をあげる。

「何って……、ナビゲーターのアバターだけど」

「あばたー？」

【ゲームの世界では、キャラクターの見た目を好きなように変更できたりするんだよ】

「へー、面白いわね」

正確には、ゲーム内のプログラムキャラは『アバター』と呼ばないのだが、やけにタイミング良く送られてくるメッセージや、妙にこちらの感情を煽ってくる内容など、まるで僕たちを監視する誰かがいるような錯覚すら覚えてしまう。

最初のゲーム説明にもあった「謎解き」というキーワードが気になる。僕たちが見落としている何かが、いままで歩いたフロアのどこかに隠されていたのだろうか……。

「ハルト？　どうかしたの？」

「……」

「……ちょっと、聞いてる？」

リアの呼びかけにも応えず、僕はじっと正面の書棚を見つめる。他の二箇所の行き止まりでも見かけた書棚、よく思い返してみると、背表紙のデザインも厚みも異なる様々な蔵書が、並べ方にするまで四つともまったく同じだった気がする。

「同じ？　いや……」

微かな違和感を覚えて、必死に記憶を呼び起こす。

「……もしかして、どこかに違いがあったのか？」

これだけそっくりな蔵書の種類や並べ方に何か違いがあるとしたら、それこそ怪しい。

「間違い探しみたいなものか？　でも……」

本棚の内容を全て覚えて四つを比べるなど、完全記憶能力者でもない僕には不可能だ。

「ん？」

まんべんなく書棚を見回していたそのとき、場にそぐわないものを発見する

「……QRコード？」

書棚の意匠に隠れるように、見覚えのある人工的なマーカーを発見する。
「もしかして……」
ホーム画面に〈撮影〉という名のアプリがあったことを思い出し、スマホを取り出す。コードにカメラレンズをかざすようにスマホの位置を調整すると……、
――ピッ
聞き慣れない電子音とともに、画面上で何かの画像がスマホに取り込まれる。さらに、
【〈撮影〉の機能『コードスキャナ』が解放されました】
〈情報〉アプリに新しい通知が届く。再び〈撮影〉を起動すると、右下にアルバムらしきボタンが追加されており、たったいま取り込まれた一枚の画像が保存されていた。
「ねえハルトってば、一体何をやっているのよ」
意味不明の行動を始めた僕を訝しむように、リアが後ろからスマホの画面を覗き込む。
「わっ、なんでここに書棚が写ってるの？」
リアの質問に応える余裕もなく、僕は取り込まれた画像を確認する。高解像度で保存された書棚の全容写真は、一冊一冊の蔵書の種類までも正確に把握することができる。
「なるほど。ってことは、次は……」

「ちょ、ちょっと！　勝手に行かないで、少しは説明しなさいよっ」
ブツブツとつぶやきながら来た道を引き返し始めた僕を、不満顔のリアが慌てた様子で追いかけてきた。

「――これで四枚目、と」
他の三箇所の行き止まりをまわり、書棚の画像を取り込んだ僕は、保存された四枚をじっくりと確認していく。
「っー　……やっぱりか」
目的のものを発見した僕は、予想が的中したことに心の中でガッツポーズをとる。
「ね、ねえ、そろそろ何をやってるのか教えてよっ！」
「……分かった。ほら、コレを見てくれ」
「う、うん……」
棒れを切らせたように迫るリアに、四枚の写真を順番に見せていく。構図もまったく同じで、その内容に至るまで寸分の違いもないように思えたそれぞれの書棚だったが……、
「あっ！」
リアが四枚目……いまさっき取り込んだ画像を見て、声を上げる。

「――この中央にある分厚い本だけ、他の二つの本棚には存在しないだろ？」

そう。蔵書や並べ方までまったく同じに見えた中、目の前の書棚にだけ、他の三つにはない本が隠されていたのだ。

「ということは、つまり……」

僕は書棚の正面まで近づくと、該当する本へと手を伸ばす。他の本と同様、手前に引き出せなかったその本は――なんと、奥へ押し込むことができた

――ガコンッ　ギィ……

「ビンゴ、だ」

書棚が、まるでドアのようにゆっくりと開く。どうやら奥に部屋があるようだ。

「どうだ？　僕も少しは役に立つだろう？」

ダンジョン探索を開始して初の活躍に、僕は得意顔でリアのほうを見やる。しかし、

「!?　ハルトー　後ろっ！」

リアが指さす背後を振り返った僕は、思わずすに持つ魔導書を取り落としてしまう

「え……」

――そこには、蛇の鬣と尻尾を持つ双頭の黒犬が五体、いまにもこちらに襲いかからんと唸り声を上げていた。

「ハルト！　下がって！」

身体が瞬時に僕に代わって前へと踊り出たリアが、ロッドを構え叫ぶ。

「――〈炎球〉！」

炎の球が瞬時に出現し、黒犬たちに襲いかかる。群れの一体に直撃し消滅させることに成功するも、難を逃れた残り四体が驚くべき速さで四方からリアへと襲いかかる。

「きゃっ！　――〈炎陣〉！」

リアは咄嗟にロッドを振り、自らの周囲に炎を出現させる。

「くっ……！」

周囲を四体のモンスターに囲まれ、必死にロッドを握りしめるリアは防戦一方だ。

「リア……！」

獣を威嚇するように怪しくうごめかせ、牙をむき出しにした黒犬たちは、近くにいる僕にまったく目もくれず、リアを睨み、唸り声を上げ続ける。敵からも無視された形となった僕の全身を、無力感が駆け巡る。

「何か、何かできないのか……っ」

足元には、スマホと魔導書が散らばっている。カメラとメッセージの確認にしか使えないスマホとリアしか扱えない魔導書では、何の役にも立たない。――そのはずが、

「……え？」

地面に転がった魔導書の裏表紙に、見覚えのあるＱＲコードを発見する。
「まさか……っ！」
先ほどの仕掛けを思い出し、咄嗟にスマホのカメラをＱＲコードに合わせる。すると、
――ピッ
【アイテムをアプリ化しますか？　Ｙ／Ｎ】
「！　アプリ化……！」
反射的に「Ｙｅｓ」を選ぶと、瞬時に魔導書が光の粒へと変わり、スマホへと吸い込まれていった。再び目を向けたホーム画面には、本を模した見慣れないアプリアイコンが。
「これは……」
《雷魔法》と名付けられたそのアプリを起動すると、
【対象をフレームに入れ、タップorスワイプしてください】
目の前で掲げたスマホの画面には、カメラの向こうにいるモンスターの姿が映っている。
「まさか……っ」
指が無意識に動き、画面にいる全ての敵をなぞっていく。
【発動――〈雷雨〉】

たちまちディスプレイから飛び出した光が、リアを取り囲むモンスターらの頭上で弾け、無数の雷となって襲いかかる。激しい火花が辺りに弾け飛ぶ中、雷はあっという間に全ての黒犬たちを消滅させ、ほどなく辺りは静寂を取り戻した。

「な、何……？　いまの」

リアの戸惑う声に返事もできず、呆然と手元のスマホを見つめる。ホーム画面には、先ほどまであった《雷魔法》のアイコンがなくなっていた。

「アプリ化……。スマホを使えば、僕でも魔導書が使えるってことか？」

僕のつぶやきに呼応するように、《情報》アプリにてからのメッセージが届く。

【Luv：おめでとうございマス！　チュートリアルフロアをクリアしました】

メッセージを確認した瞬間、僕らの足元に巨大な魔方陣が出現　溢れ出た光に包まれた僕とリアは、一瞬の浮遊感の後、どこか別の場所に降り立つ。

「ー　ここは・・・」

見覚えのある広間。背後には、探索開始前に見かけた巨大な扉もある。

「やっぱり開かない・・・か」

どうやら僕たちは、スタート地点に戻されてしまったらしい。……これからがダンジョ

ン攻略の本番、というわけか。

続けざまにスマホから通知音が鳴り響く。

【〈地図〉の機能が解放されました】

【〈羅針盤〉の機能が解放されました】

【〈掲示板〉の機能が解放されました】

ホーム画面を確認すると、〈情報〉〈撮影〉に加え、新たな三つのアプリが起動可能な状態になっていた　続けざまに、【ニャビ】から新たなメッセージが届く。

【ニャビ・チュートリアルフロア・クリア報酬としテ、『ワンオフアプリ』が付与されマス】

「ワンオフアプリ？」

見ると、何かのアプリが自動でスマホにダウンロードされている　その名前は、

「――〈脱獄〉」

檻に閉じこめられた囚人にも似たこの状況を、的確に表すようなアプリ　それは、これから待ち受ける試練の数々を、僕に予感させたのだった

IV

「ちょ、ちょっとハルト。一体何がどうなってるの？」
「あ、ああ……」
戸惑った様子のリアに、チュートリアルフロアをクリアした旨を伝える。
「つまり、ここからが本当の冒険の始まりってわけね……！」
興奮した様子で周囲をリアを見回すリアをよそに、僕は再びスマホに目を落とす。
「〈地図〉と〈羅針盤〉、それに〈掲示板〉だったな」
早速、アンロックされたアプリを立ち上げてみる。〈地図〉を開くと、真っ暗な画面の中央に小さく点滅する光が表示された。通常の地図アプリと異なり、このダンジョン専用のマップが位置情報と同期しているようだ。

【Tips：〈地図〉には、歩いた道を自動で記録する機能が、搭載されていマス】

「オートマッピング機能ってやつか」
方向音痴な僕にとっては、地獄に下りてきた蜘蛛の糸のようなアプリだ。
「で、こっちが〈羅針盤〉だな」

アプリを切り替えると、画面上に大きな矢印が表示される

【Lv：〈羅針盤〉の矢印ハ、フロア出口の方角を指し示していマス】

なるほど。〈地図〉と組み合わせて使えば、かなり心強い味方となるだろう。

「それで、〈掲示板〉…と」

アプリを終了し、残る〈掲示板〉を立ち上げる。

【Lv：〈掲示板〉ハ、他プレイヤーと情報交換などを行うためのツールデス】

画面いっぱいに、メッセンジャーアプリのようなタイムラインが表示される。

【Aggy：1げと。チュートリアルフロアをクリアしましたよっと】

【nami：2番でーす。→って、もしかして森田君？】

【Aggy：そっちは白谷原か？　いまどこにいる？】

【nami：スタート地点の大広間だよ】

【Aggy：こっちは先へ進んでるな。合流できるかもしれないから一旦戻ってみるか】

【naomi：おっけー。待ってるよ】
【Ban：お二人さん、二人でばっか話さないで俺も話に入れてくれよ】
【Assy：お前、空木か？】
【Ban：ああ　お前ら随分と順染んでるけど、　体なんなんだ？　このダンジョン】
【Assy：さあな……　あまりに訳が分からんことばかりで、正直考えるのも億劫だ】
【naomi：あたしもー。まあ、細かいことは気にしないで、楽しんだもの勝ちでしょ】
【Ban：そんなもんかねえ……】
【Ruby：あのー、このメッセ見てる人が他にもいたら何か書き込んでくれないかな？】
【naomi：あっ、ルミちゃんやっほ。ちょうどいま、菊池君と合流したよー】
【KYY：図書館にいたのってウチの一年と先生だけだよな。全員こっちに来てるのか？】
【Ruby：うん。それを確認しようと思って】
【Assy：まだチュートリアルフロアで手こずっているヤツが多いかもな】
【KYY：確かにな。アプリ化の機能に気づかないと、なかなかクリアできないだろうし】
【naomi：Luvちゃんも、あらかじめ教えてくれればいいのにね】
【Ban：そのうち他もやってくるだろ。とりあえず俺は一足先に進めさせてもらうぞ】

書き込みはこの後も長々と続いていた。この様子だと、あのとき国立図書館にいた生徒

たちの一部……もしかしたら全員が、このダンジョンに来ているのかもしれない。これだけ特異な状況にもかかわらず、ほとんどのプレイヤーはあれこれ考えずに一種のアトラクション感覚でゲームを楽しもうと考えているようだ。その順応性の高さは感心するが、はたしてそれで済ませていいものなのか……？

妙な違和感を微かに感じつつも〈掲示板〉を閉じる。

「……ん？」

ホーム画面のバッテリーメーターがふと目に入る。よく見ると、チュートリアルフロアでは常にフル充電状態だったメーター表示が、わずかにその目盛りを減らしていた。

【ピコ：スマホのバッテリー＝体力デス。ゼロになると『実格』となりマス】

「なるほど……」

つまり、アプリを使用した分も体力消費としてカウントされるということだ。『実格』とやらがどういったものか分からないが、なるべく無駄使いはしないほうがいいだろう。

「スマホがダンジョン攻略に役立つなんてな……」

続いて、先ほど偶然発見した魔導書のアプリ化についての説明が表示される。

【Lv：ドロップアイテムハ、スマホに取り込むことデ、一度限り使用可能デス】

カメラでターゲット指定する際、タップ・スワイプの仕方や範囲によって異なる魔法が発動するらしい。あのとき発動した〈雷（ライトニング）撃（ボルト）〉は、複数攻撃型雷魔法というわけだ。

最後に、『アンオフアプリ』とやらの説明が届く。

【Lv：ワンオフアプリハ、プレイヤーごとに異なる機能を持つ特殊アプリデス】

〈脱獄（ジェイルブレイク）〉の簡易的な説明もあったので、ついでに確認する。

【〈脱獄〉――対象に干渉・改変するアプリ】

【機能1「カスタム」――アプリ同士を合成し、新しいアイテムを作り出す】

【機能2「クラック」――対象の弱点（ウィークポイント）に侵入し、内部破壊を行う】

「合成（マージ）」

早速〈脱獄・カスタム〉を起動してみる。すると、ホーム画面の整理を行うときのように、画面上のアイコンが移動可能な状態に変化する。

「――まさか」

試しに〈羅針盤〉のアイコンをロングタップし、〈地図〉の上にドラッグしてみると――二つのアプリが融合し、まったく新しい〈誘導図〉というアプリに変化した。起動すると、まるで僕が以前自作したナビアプリのように、〈地図〉の上に重なって表示される〈羅針盤〉の矢印が目に入る。

「！　体力が……」

バッテリーメーターを見ると、明らかに通常消費とは別の作用で目盛りが減っている。

「……もう一つの機能は、別の機会に試すか」

どういった基準でプレイヤーごとのワンオフアプリが定められているのかは分からないが、この〈脱獄〉というアプリは、使いようによっては強力な武器になり得るようだ。

「――ねえっ、ハルトってば！」

スマホに集中して、リアの声が耳に入っていなかったらしい　頬をふくらませた彼女の顔が目に飛び込んでくる

「さっき魔導書を使ってたわよね。ロッドもないのにどうやったの？」

「ああ、それは――」

僕はスマホを使って魔導書をアプリ化し、使用できるようになったことを伝える

「あぶり？　よくわからないけど、私のロッドみたいなものがその「スマホ」ってこと？」

「どうやらそうらしい」
「そっか、そうなんだぁ……」
僕の話を聞いて、スマホに対する興味が一層湧いたらしいリアが目をキラキラさせる。
「ね、ねぇ、ちょっとでいいから私にも触らせてくれない……かな？」
「スマホを、か？」
「うんっ、……だめ？」
「……慎重に扱ってくれよ」
真正面から意志の強い瞳で見つめられ、僕は観念したようにロック解除したスマホをリアに手渡す。
「ありがとっ　えっと、どうやって使うの？」
「ええとだな……、ん？」
リアが画面に触れた途端、スマホがスリープモードになってしまう。再びロックを解除してみるも、何度やっても同じ具合だ。
「……もしかして、所有者以外は使えない仕組みになっているのか？」
先ほどのアラート機能と同様、これも『Lv.∞RENTH』の仕様なのだろうか。
「えー、そんなぁ……」
目の前で玩具を取り上げられた子供のように頬を膨らませるリア。

「う～……」

「そんな日で見られてもな。……あ」

涙目のリアに見つめられ戸惑う僕は、ふと、いままで忘れていたある存在を思い出す。

「……あった」

ポケットから取り出したのは、普段ほとんど使っていない、学園配布の標準スマホ

「あれ。　スマホがもう一つ……？」

不思議そうに二台を見比べるリアをよそに、電源を切ってあったスマホを起動させる。

こちらのホーム画面にも『LaVYRINTH』のアイコンが存在しており、ディスプレイ全体を覆うように『PLAYER UNKNOWN』の文字が表示されている　これはもしや……。

「リア、ちょっとここを押してみてくれないか？」

「え？　……こ、これでいいの？」

リアがおそるおそる『LaVYRINTH』のアイコンに指で触れる。すると、

――ピピッ

【同期が完了しました】

「――　やっぱり……」

ホーム画面には、チュートリアルフロア攻略報酬である〈地図〉や〈掲示板〉といったアプリが表示されている。僕の〈記録〉のようなワンオフアプリはないようだが、それ以外はほぼ同じように思えた。さらに、

【Lv.1：図書界よりお越しのLvサマ。【LOVERMATCH】の世界へようこソ！】

「Lv1、か」

僕の場合は、スマホに関連づけられたIDから自動的に名前が決められていた。元々スマホを持っていなかったリアのIDは、システム側で勝手に名付けたのだろうか……。

「え、え？　これって、どうなったの？」

戸惑うリアに、僕は浮かんだ疑問をひとまず置いておいて、彼女への説明を優先する。

「いまので、リアがこのスマホのユーザーとして登録されたんだよ」

「ゆーざー？　登録？」

いまいち理解できない様子のリアに、要するに……と前置きしてスマホを手渡す。

「そいつはしばらく貸しておくよ。ロッドだけじゃ色々と不便だろ？　なるべく大事に使ってやってくれ」

「？」

すると、大きく目を見開いたリアの顔がみるみるうちに赤くなっていく。
「え？　え？　そ、それって……」
「？　どうした？」
「そ、そんな、いきなり困るわよっ。ま、まだ知り合って間もないのに……！」
「……何のことだ？」
「だ、だって……」
意味が分からず首をかしげる僕に、リアがぽつりぽつりと語ったところによると、異世界では親しい間柄でもロッドを触らせることが稀らしく、ましてや自分のロッドを貸すなんて、それこそ家族か恋人でもない限り滅多にないことなんだとか。
つまり、現世界でのロッドのようなものらしいスマホをリアに貸すということは……、
「そこまで深い意味で貸したわけでもなかったんだけど……」
「……え？」
確かに、個人情報の塊であるスマホも貸し借りには気をつかうべきだが、リアが言うほど特別なことではない点やそもそも使っていないスマホである旨を彼女に説明する。
「う、うう……」
自身の勘違いを悟ったリアは、ますます頬を赤く染めていく。涙目でこちらを睨まれても、こういったときにどう対処すべきか分からない僕は、戸惑うことしかできない。

「あ、あのな……」

「……はいっ、これ！」

何か言おうと口を開いた瞬間、明後日の方向を向いたリアが自身のロッドを差し出す。

「代わりに、私のロッドも……見て、いいわよ」

「……いいのか？」

「い、いいから、早くっ」

「あ、ああ……」

押しつけられるようにして渡されたそれを丁重に受け取り、ゆっくりと眺める。——納[4]と先端に不思議な輝きをした結晶がはめ込まれた短いロッドは、僕が思っていた以上に軽く、まるで身体の一部のように自在に振ることができる。

「——図書界、か」

この世ならざるその行[ふる]まいに、『異世界』という感覚がぴったりとはまる。それにしては、違和感なく言葉が通じるなど、疑問点も多いのだが

【Lv：コミュニケーションに支障ないよう、『そういった世界』を選びましたのデ】

「……はぁ」

僕の心を読んだようなタイミングで届くメッセージや、色々とツッコミどころの多いその内容といい、まったく分からないことだらけだ。

「ねぇねぇっ、これってどうやって使うの？」

スマホを手に興奮冷めやらぬ様子のリアに呼ばれ、僕はひとまず頭にかかった靄を払い、彼女へと視線を向ける

「そうだな……、リアの場合〈地図〉はそれほど必要じゃなさそうだし」

大抵の道なら、頭の中に地図が描けるというリア。より複雑な迷路に出くわした際には世話になるかもしれないが、いまは必要最小限の機能だけ覚えておけばいいだろう。

「〈掲示板〉……は、やめておくか」

他にもリアのようなプレイヤーがいるのかは分からないが、神奈木学園の生徒ではない彼女がうっかりに〈掲示板〉に何か書き込めば、無用な混乱を招く恐れもある

……決して、僕自身がこういったメッセージアプリに慣れておらず、上手くレクチャーできないからでは、ない

「とりあえず、〈撮影〉の使い方だけ覚えるか？」

「うんっ、お願い」

リアにカメラを使った写真の撮り方を教える。

「わわっ、ホントにハルトが写ってる！」

試しにと僕の顔を撮影したリアが、スマホを覗き込みながら悔しそうに声を上げる。よほど気に入ったのか、続けざまに周囲の木棚をパシャパシャと撮影したリアは、今度は自分を撮ってみようと慣れぬ仕草で試行錯誤している。

「……はは」

その姿がなんとも微笑ましかったので、思わず僕は自分のスマホのシャッターを切る。

「ー　ちょ、ちょっと、撮るなら撮るって言ってよ！」

気づいたリアが恥ずかしそうにこちらへ近づいてくる。

「ごめんごめん。それよりも、あまり無闇にスマホを使わないほうがいいぞ」

「えー」

スマホのバッテリーメーターが体力と連動しているらしい旨をリアに伝える。

「……ってことで、なるべく無駄遣いはしないようにな」

「……はーい」

小さく頬を膨らませながらそう答えたリアは、何かに気づいたようにぶっと噴き出す。

「ふふっ、なんだかハルト、ウチの先生みたい」

「先生？」

「昔からウチに仕え……お世話になってる家庭教師の先生よ。八十を超えたおじいちゃんだけどね」

「……おじいちゃんはないだろ」
「どちらかといえば、お兄様って感じかしら。ふふっ、私、昔から年上の兄姉って憧れてたのよね」
「リアは一人っ子なのか？」
口にして、余計なことを聞いたかと少し後悔する。
「年の離れた弟が一人いるわ。全然手のかからない良い子だから、ちょっと寂しいくらいだけどね。そう言うハルトは、どうなの？」
当然返ってくるその質問に、リアからわずかに視線を逸らしつつ答える
「……妹が一人いるよ」
「へー、じゃあホントのお兄ちゃんなんだ」
「……」
「？　ハルト？」
急に押し黙った僕に、何かを察した様子のリアが慌てて話題を変えてくれる。
「す、スマホって凄いわよね。現世界には色々と面白そうなものがあっていいなー」
「リアの世界に、そういった電子機器はないのか？」
「でんし？　う、うん……」
遠くを見るようにして、大きな溜息を吐き出すリア。

「代々伝えられてきたものだけを頑なに守り続ける、それが図書界ってトコなのよ」

「変化」というものを極端に嫌うらしい図書界の人々。たとえそれが自分たちの生活を向上させるものであっても、いままで繰り返されてきた日常が少しでも変容するものは断固として受け入れようとしないのだとか。科学技術などもってのほかで、魔法でさえも従来から存在するものしか認められておらず、その使用も厳しく管理されているそうだ。

「私がスマホを持って帰ったりしたら図書界は大混乱ね　ハルトの世界が羨ましいわ」

リアの言う印象通りの世界だとしたら、新しい物への興味を隠さず、「変化」を肯定する彼女の考え方は、図書界で相当異端な部類なのだろう。

「……そんなにいいものでもないけどな」

ぼそりと漏れ出た僕のつぶやきは、リアには聞こえなかったようだ。

――リアが「現世界」と呼ぶこちらの世界は、常に「変化」を求め、古くなった価値観や技術は次々と切り捨てていくのが当然のようで、僕には感じられる。そんな世の中に少々辟易している身としては、リアの語る図書界人の気質が少し羨ましく思う

「？　どうしたの？」

「いや、なんでもないさ」

そう言って首を振ると、リアがこれまでも何度か見かけた不満顔を浮かべる。

「……ねえ、さっきも言ったけど、言いたいことがあるならはっきり口にして。何かにつ

けて『なんでもない』だけだと気になるじゃない、ねっ」
「……」
パッが悪くなり口を閉ざす僕に、大きな溜息を吐くリア
「ほらその顔　そんなムスッとした顔で黙ってちゃ、怖くて誰も話しかけられないわよ」
呆れたようにつぶやくリアに、僕は憮然としながら言葉を返す
「……別に、それで構わないさ」
「構わないって……、それじゃあ変な誤解を受けたりするかもしれないじゃない」
なおも踏み込んでくるリア　反射的に『嫌』となる言葉が口から飛び出る
「そうだとしても、リアに迷惑かけるわけじゃないだろ」
「っ！　何よっ、その言い方！　私はハルトのためを思って……！」
「なっ！」
投げやり気味にぼそりとつぶやいた僕に、リアの身体がわなわなと震え出す
「……ハルトのこと、さっきは『お兄様』なんて言ったけど、訂正するわ、――アナタみたいな分からず屋の妹になんか、頼まれてもなりたくないもの！」
「っ……！」
その言葉に、瞬間的に頭が沸騰する

「――リアみたいに考えなしな妹なんて、こっちだって願い下げだ」
「なっ……！　私のどこが考えなしなのよ！　勝手なこと言わないで！」
卵えが利かなくなった僕の口から、低い声が漏れ出る。
「…そんなに聞きたいなら、言わせてもらうけどな」
「な、なによ……」
「リアの戦い方には無駄が多すぎるんだよ。範囲攻撃系の魔法を一体の敵に使ったりするから、ほとんどの矢がムダ撃ちになっていたじゃないか」
「う……」
「さっきのバトルなんて、目の前の敵だけに気を取られて隙が大きい大火力の魔法を使うもんだから、あっという間に敵に取り囲まれていただろ」
「で、でも、結局ハルトの魔法でなんとかなったじゃない」
「それは結果論だ。後先考えず思いつきで行動するのはやめたほうがいいぞ」
「っ……――思ってることを表に出してくれないハルトみたいな人よりはマシでしょ！」
「何でも思ったことを次から次へと口にすればいいってものじゃない。それが相手の負担になったり、傷つけたりすることだってあるじゃないか」
「そ、それでも、嘘を吐いたり隠し事をするよりよっぽどいいわよ！　相手を傷つけないようにって、本当はハルトが傷付きたくないだけじゃないの！」

「っ」

再び口をつぐむ僕に、耐えきれなくなったように視線を背けるリア。

「……」

気味が悪いほどの静寂が戻る中、なんともいえない嫌な空気が僕らの間に横たわる。

「……だから、余計なことは言いたくなかったんだ」

思わずこぼれた小さなつぶやきはリアに届かず、見えない霧の中へと消えていった。

V

「「……」」

互いに微妙な距離を取りながら、無言で回廊を進む僕とリア。――しばらくすると、先が三方向に分かれた地点に到達する。

「……ふんっ」

僕のほうをちらりと見たリアが顔をぷいっと背け、左側の通路へ消えていく。仕方なく、逆側――一番右の通路へ進むことにした僕は、何度目かになる溜息を吐く。

リアに言ったことが間違っていたとは思わないが、自分の価値観を押しつけるつもりなんてなかった。考えが異なる者が意見をぶつけ合えば、こういった事態になることは分かっていたはず。それを避けるために他人と距離を置くようにしていたのに……。

「くそっ……」

リアに対する苛立ち以上に、自身に対する腹立たしさで頭の中がゴチャゴチャになる。僕を助けるためにとったリアの行動にさえケチを付けるなんて、どう考えても最低だ。

「……ん？」

頭を掻きむしりながら歩を早めていくと、行き止まりに辿り着いてしまう。しかも、壁には謎の文字列が書き記されていた。

急がば回れを選んだとしても罠かもしれない。一番ラクをしたければ、正面を真っ直ぐ進め。先を確認するため上下左右しらべ、二番か一番で辿り着けたら、最後には見事、鍵が手に入ることだろう。

【急がば回れを選んだとしても良かもしれない。一番ラクをしたければ、正面を真っ直ぐ進め。先をあらため上下左右を確認し、二番か一番で辿り続けたら、最後には見事、鍵が手に入ることだろう。】

「どういう意味だ？」

胸のわだかまりから逃避するように、目の前の『謎』へと意識を集中させる　……正面を真っ直ぐ進め、ってことは、先ほどの分かれ道は真ん中の通路が正解だったのだろうか。

「！　これは……」

文字列の隅に、見覚えのあるコードを発見する。早速スマホで読み取ると、チュートリアルフロアのときと同様に、〈撮影〉のアルバム内に文字列の画像が保存された。

「……？」

しばしあれこれと考えを巡らせるが、暗号めいた文の意図を読み取ることはできない。

「仕方ない、別の道を確認してみるか」

スマホに画像保存できたからには、ここに居座っている意味もない。僕はひとまず『正面』の通路を確認するため、来た道を引き返す。

「あ」

分岐点に戻ると、ちょうど反対側の通路から戻ってきたリアと出くわしてしまう。
「……ちょっと、邪魔しないでよ」
ぼっの重さを誤魔化すため、そそくさと正面の通路へ進もうとすると、リアが割り込むようにして狭い通路に身体を入れてくる。
「そっちこそ、向こうの道に行けばいいだろ」
「仕方ないでしょ、『正面を真っ直ぐ進め』って書いてあったんだから」
……もしかして、左側の通路にも同じような落書きがあったのか？
「奇遇だな。僕も同じ理由だ」
「……ふんっ」
それきり口をつぐむりアとともにしばらく通路を進むと、開けた空間に辿り着くが、またしてもそこは行き止まりだった。……しかし、
「……なんだ、これは」
正面の壁一面に、これまでも見かけたQRコードが並んでいた。
「これ……百個以上はあるわよ」
なんと、そこには縦横十列以上にわたりQRコードがまるで碁盤の目のように無数に配置されていた。しかも、どうやらその一つ一つが異なるコードになっているらしい。
「まさか、これを全部読み取れとか言うんじゃないだろうな……」

考えたくもない想像に身体を震わせた僕をよそに、スマホを取り出したリアが早速〈撮影〉でコードの一つを読み取ろうとする。

「お、おいっ、しっかり調べてから……」

「実際に試してみないと分からないこともあるでしょ！　ハルトは慎重すぎるのよっ」

コードを正確に読み取るのにいくらか苦戦した様子だったリアだが、数秒後、ピッという電子音がスマホから鳴る。

「やった！　……あれ？　何も変わらないわよ」

画面を見ながら首をかしげるリア。そのとき、

――ビー！　ビー！　ビー！

突然、辺りにけたたましいアラート音が鳴り響く、さらに、

「なっ……！」

何もなかった部屋に二体の狼が出現。それぞれ僕とリアに分かれて襲いかかってきた。

「っ！」

咽嗟のことに反応が遅れた僕に、狼の牙が襲いかかる

「ハルト!?　――〈炎球〉！」

リアが咽嗟に炎球を作り出し、こちらに向かって放つ。死角から行われた攻撃がまともに僕へヒットし、小さな爆発とともに狼の身体が弾け飛ぶ。

「!?」

次の瞬間、光の粒子へと変化したそれは、リアに迫るもう一体の身体に吸い込まれ、巨大な灰色狼へと姿を変えた

「きゃっ！」

僕のフォローを優先したためか、今度はリアが自身に襲いかかる敵への対応に遅れる。

「リア！」

体勢を立て直した僕は、反射的にスマホを取り出す。アプリ化できる魔導書を一つも持っていないいま、行使できる力はひとつしかない。一度も試したことがないアプリをいきなり実戦で起動することに一瞬躊躇するも、迷っている暇はない。僕は意を決して叫ぶ。

「――〈展開：狼・クラノク〉！」

起動の瞬間、ディスプレイが文字で埋め尽くされ、頭の中に膨大な情報――ターゲットの構成要素が知識として流れ込んでくる。

――世界すら呑み込むと言われた凄まじい灰色狼。ダンジョン内の各所で罠にかかる獲物を待ち構えているのは、分かたれたその一部。通常、フェンリルを捕縛するにはグレイプニル――猫の足音・女の髭・山の根・熊の腱・魚の息・鳥の唾液によって作られた魔法の縄が必要とされるが、コイツらはフェンリルの分割体にグレイプニルの各要素が融合して形成された、矛盾の塊ともいえる存在だ。

「くっ……！」

次から次へと押し寄せてくる情報の洪水に頭がパンクしそうになる中、対象へ侵入するための起点――弱点を探す。

「！　ここかっ……！」

一つの解に辿り着いた僕は、こちらに気づき咆哮する灰色狼に向かって駆け出す

――自らを捕縛する要素すら取り込み、つけいる隙がないように見えるゴイツが抱える最大の矛盾。それは……、

「こっ……のおおっ！」

迫り来る狼が大きく開けた両顎の中心。鋭い牙をかいくぐり突き入れた僕の左手が、軟体動物のようにうねる舌を掴んだ。

――舌に絡みつく大量の涎「希望」とも呼ばれるソレを絶望の内に抱えている事実こそ、ゴイソが抱える最大の矛盾――弱点だ

その瞬間、スマホから飛び出したエネルギーが光の鎖となり、僕の左手を通してヤソの体中に巻き付く。鎖からターゲットへと領域の力が流れ込んでいき、巨大な負荷となった「現実」の力が、弱点を起点に狼の構成要素を次々と分解――あっという間にその身体を目に見えぬほどの微粒子へ変え、消滅させた。

「っ」

脅威を避けたことで気が抜けたのか、軽い立ちくらみに思わずその場で膝をつく。
「ハルト！　大丈夫！」
倒れそうになる僕の身体をリアが支えてくれる。彼女の手を借りて立ち上がりながら、僕は手元のスマホに目を向ける。
「……ハルトの体力が……」
すると、自分の一つも減っていなかったバッテリーメーターが、一気に三分の一近く減少していることに気づく。
「……大きな力には、それ相応の代償が必要ってことか」
構成要素の解析、セキュリティホールへの侵入、そして内部破壊と、それぞれに莫大な体力消費を伴う〈脱獄・クラック〉。このアプリは切り札として、無闇な使用は控えておいたほうがいいのかもしれない。
「は、ハルト……」
リアがおずおずと札を掲げ一振りすると、結晶から放たれた光が僕の身体を包み込む。
「これは……」
全身を優しく抱擁する柔らかな光　スマホを見ると、バッテリーメーターが少しずつ回復しているのが分かる。
「さ、さっき、通路の途中で〈回復〉の魔導書を見つけたの」

「……おかげで全快したみたいだ。さっきは危ないところを助けてくれてありがとな」
「わ、私こそ……ごめん、なさい」
気落ちした様子でうつむくリア。どうやら僕の忠告を無視してトラップを発動させてしまったことを悔やんでいるらしい。
「それと、これ。返すの忘れてて」
リアはそう言ってスマホをこちらに差し出してくる。こちらの顔色を窺うように、勝ちな態度を見せるリア。慎重に行動すべきという僕の主張の正しさが図らずも証明された形となったが、心は晴れないばかりか逆に陰鬱さが増す。
「……ふう」
小さく息を吐いた僕は、伸ばした手をリアの持つスマホに重ね、ゆっくり押しやる。
「いまはリアがユーザー登録されているスマホだ。返してもらっても意味がないよ」
「っ……！」
顔を強張らせるリア。……違う、言うべき言葉はこんなことじゃない。
――ごめん、さっきは言い過ぎた。お詫びのつもりじゃないけど、これはリアに持っていて欲しいんだ」
「で、でも……」
「やってみないと分からないことがある、っていうリアの考えも一理ある。今回は運が悪

かっただけだ」

「ハルト……」

行動することを躊躇していては、人事なものを失う可能性がある。先ほどの（脱獄・クラノク）の使用を一瞬躊躇いかけた僕は、いまなら分かる。

「まあ、もう少しだけ慎重になってくれるとありがたいけど」

「う、うるさいわねっ。さっきのことは反省してるわよ！」

元気が戻ってきたリアを見て、僕の胸の内が少し軽くなる。

「……お互い悪かったってことで、これからはまた二人で協力していかないか？」

「う、うん。本当にいいの……？」

「ああ」

少し照れくさくなった僕は、QRコードがある壁のほうへと顔をそらす。

「……ありがと」

「んっ」

「な、なんでもないわよっ」

――思わず口から漏れ出たらしいリアのつぶやきは、聞こえていなかったことにした。

VI

僕は改めてQRコードが並べられた壁に向き直りながら考える。
「もしかすると、これは正解のコードを探し出す謎解きなのか？」
この中に正解となるコードが隠されており、ハズレをスキャンすると先ほどのようにトラップが発動する。そう考えた方がよさそうだ。
「どうするの？　まさか、当たりが出るまでしらみつぶしに探すわけじゃないわよね？」
「……それは勘弁したいな」
チュートリアルフロアと比べて、モンスターの強さもにがっているようだ。下手をすると百回以上もああいった戦闘を繰り返すことになるなど、考えたくもない。
「そういえば、ハルトが行った右側の道ってどうなってたの？」
「ああ、まずはそっちの確認をしておくか」
僕らは別々に行動していた間の情報を交換する。
「……やっぱり、リアのほうにも同じ文字列があったのか」
「う、うん。一応、なんとかスマホに保存しておいたけど……」
そう言ってリアが取り出したスマホの画面には、僕が確認したのとまったく同じ文字列の画像が表示されていた。

急がば回れを選んだとしても罠かもしれない。一番ラクをしたければ、正面を真っ直ぐ進め。先をあらため上下左右確認し、二番か一番で辿り着けたら、最後には見事、鍵が手に入ることだろう。

急がば回れを選んだとしても罠かもしれない。一番ラクをしたければ、正面を真っ直ぐ進め。先をあらため上下左右確認し、二番か一番で辿り着けたら、最後には見事、鍵が手に入ることだろう。

一言一句違いの見当たらない二つの文字列。チュートリアルフロアのような間違い探しではないようだが、だとすると同じものを一箇所に配置する意味は一体……。

「あっ！　ハルト、ここを見て！」

何かに気づいた様子のリアが、スマホの画面を指さす。

「この『』の部分がどうかしたのか？」

「ここ、よく見ると微妙にズレてない？」

言われて初めて、『辿り着けたら』の『ら』と『て』の間隔が、両画像でわずかに異なることに気づく。

「……ここにもあるな」

他にも何カ所か同じようなズレがあるようだ。どうやら、右側の通路にあった文字列はいくつかの文字のレイアウトに微妙なズレが存在するらしい

「――もしかして……」

以前どこかのサイトで目にした情報を思い出し、二つ並べたスマホをジッと見つめる

――そして、隠された暗号を発見した。

「ね、ねぇっ、何か分かったの？」

眉を揺するリアに向き直った僕は、大きくうなずき返げる

「ああ。これは――ステレオグラムだ」

「ステレオグラム？」

「ステレオグラム」とは、左右の目の見え方が違うことを利用し、微妙に「ずれ」を施した二枚の画像を立体的に見せる手法だ。この場合、実際の立体画像を見るには少々特殊な見方をする必要がある

「ええと……、ちょっとこの指を見てくれるか？」

リアの前に一本の指を立ててみせる。

「う、うん」

戸惑いながらも、素直に指先を見つめるリア。改めて間近で彼女と向き合った僕は、気品すら漂わせる美しい顔立ちとその奥で光る力強い双眸に、思わず息を呑む。

「？　どうしたの？」

「い、いや　なんでもない」

小さく首をかしげたリアに、僕は慌てて指先に意識を戻す。

「この指先を、じっと見つめてくれよー

指を前後に動かし、リアが良い具合に寄り目になったことを確認した僕は、二台並べたスマホを指の後ろに並べる。

「いま、リアの目にはスマホが三台並んで映っていないか？」

「う、うん。ちょっと真ん中がぼんやりとしてるけど」

「その真ん中に見えるスマホに意識を集中して、徐々に焦点を合わせていってみてくれ。両側は気にしなくていい」

「わ、分かった」

しばらくうーんと唸りながら眉をひそめていたリアの表情が、驚きのものに変わる

「ひ　わわっ、何これ！」

おそらく彼女の目には、いくつかの文字が立体的に浮かび上がった文字列が映っていることだろう。

「浮かび上がった文字を、右から縦に読んでみてくれ」

「う、うん」

【右・か・ラ・一・番・め・下・か・ら・も・一・番・め】

「一　これって……」

「ああ　おそらくこういうことだ」

僕は、無数に並ぶＱＲコードの中から、一番右下にあるコードにスマホをかざす。

――ピッ、ピッ、ピーッ

電子音とともに、画が中心から左右に分かれ、その向こうに大きな空間が出現する。

「……宝箱か」

入り口付近に並べられていた宝箱には、魔導書が収められていた。

「あっちにも宝箱があるわよ！」

僕が魔導書をアプリ化している間に、部屋の奥へ進んだリアは、その先で輝いた光を放ちながら宙に浮かぶ宝箱を発見していた。

「あそこに『鍵』があるんだわ！　やったわねっ」

喜び勇んで駆け出すリア。僕はほっと息を吐きながら、自身のスマホに目を向ける

「ん？」

立体的に浮かび上がる文字は少しだけずれて配置されている。それさえ分かっていれば先ほどのような『変差法』など使わなくても対象の文字を抜き出すことができる。そのとき僕は、飛び出した文字列が形を成していることに気づく。

「『門』と『↓』……？」

しかも、矢印の部分はちょうど『鍵』という文字を指している……もしや、まだ謎は全て解けていなかったのか？

「『箱』の『下』に『鍵』……」

目の前には、宙に浮かび上がる宝箱へと手を伸ばそうとしているリアの姿。『鍵』がその下に隠されているのだとしたら、『箱』の中にあるのは……。

驚愕の事実に気づいた僕は、たまらず叫ぶ。
「待てっ、リアー　――その箱は、『罠』だ！」
「――え？」
時既に遅し　宝箱にリアが触れた、その瞬間
――ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！
今までにないほど大音量で鳴り響くアラート音。背後では、扉が閉ざされたゴォンという音と地響き。さらに、
「「!?」」
閉じこめられた部屋に、突如としてモンスターが出現する。圧倒的なのは、その数。
「うそ……だ、ろ」
部屋を埋め尽くすほどのモンスターの総数は一や二十どころではない。その中にはこれまで戦ったバジリスクや翼蛇、双頭の黒犬なども混じっている。これは……。
「――モンスター、ハウス……っ！」
部屋をモンスターで埋め尽くす、典型的なダンジョン・トラップの一つ。――僕らは突如、その罠に嵌められた。

「あ、あ、あ……っ」

「……くそっ！　――〈水球（アクア・ボール）〉！」

アプリ化したばかり氷魔法を起動。リアと僕の間を塞ぐモンスターの集団にカメラフレームを合わせ、その中心をタップする。

「！　よしっ！」

スマホから飛び出した直径数十センチほどの氷塊（つぶて）が集団に激突。直線上の敵を吹き飛ばし、細い道を作り出す。

「いまだっ！　こっちに来い！」

「――う、うんっ！」

僕の声に正気を取り戻したリアが、こちらへと駆け出す。

――〈水流波（ウォーター・カッター）〉！」

彼女と入れ替わるようにモンスターの前へ躍り出た僕は、続けざまに氷魔法アプリを実行する。今度はフレーム内を横一文字にスワイプすることで、こちらに接近しようとしている前衛集団を足止めする。

「ふ、――〈炎矢（ファイア・アロー）〉！」

*

後方では幾分か冷静さを取り戻したリアが魔法を振るう声が聞こえる。
「――数が多すぎる……！」
リアのほうを見やる暇もなく次々と襲いかかってくる敵に、僕はストックした魔導書を次々と消費していく。
「きゃあっ――」
「リアっ……！」
咄嗟に振り返ると、部屋の隅に追い詰められたリアの姿が目に飛び込んでくる。
「――しまった……っ――」
僕の視線に釣られるようにして、周囲にいたモンスターの一部までもが、リアのほうへとターゲットを移してしまう。
「は、ハルト……っ――」
悲痛な叫びとともに、リアが無我夢中でこちらへと手を伸ばす。
「っ――」
その縋るような瞳に思考が瞬時に冷え、――すぐさま、激しく燃えたがる。
「……いま、行くぞ」
僕はスマホを取り出し、叫ぶ。

「――〈脱・獄・クラック〉！」

僕はリアへと襲いかかろうとしているモンスター――自らの倍はどもある大剣を振るう骸骨へとカメラを向ける　同時に、対象に関する膨大な情報が脳内に流れ込んでくる

――装れを知らず動き続ける骸骨剣士　その歩みは身体の一部が破壊されたとしても止まることはない　予にする〈幅広剣〉は本体同様その鋭さを違か昔に失っているが、その大きさと重量を利用して敵を叩きつぶす破壊力を持っている　自らの意志を持たず、ただ目の前の敵を破壊することのみを目的に動く人形。ただの傀儡でしかない本体と融合することで、肉体を操っている核は――

「……ここかっ」

対象の構成要素を解析し、〈弱　点〉を見つけ出す　その瞬間、スマホから飛び出した光の鎖が左手を伝わって〈幅広剣〉へと吸い込まれ、あっという間に対象全てを分解せしめる

「はあああああああああああ――――――っっっ!!!」

間髪入れず、リアに近い敵から次々と対象を移し、解析・分解を行っていく。強烈な目眩に襲われながらも、僕は必死に攻撃を続ける

――ピー！　ピー！　ピー！

体力が残りわずかであることを知らせる通知音をスマホが奏で始める。

「――ダメよハルトっ！　その力は……！」

鬼気迫る表情で〈解放〉を行使し続ける僕に、リアの悲痛な叫びが重なる。

「――これで、最後……だっ！」

またたく間に、部屋にいた全てのモンスターを光の粒へと変えた僕は、満身創痍でその場に膝をつく。

「ハルトー！」

慌てて駆け寄ってくるリア。彼女の背後では、固く閉ざされていた扉がゆっくりと開いていくのが目に入る。

「……よかった」

「ハルトっ、ハルトっ！」

力の入らない僕の身体を必死に支えながら、目を潤ませるリア。

「……っ！」

僕のスマホを見てリアは言葉を失う。――バッテリーメーターは、既にゼロだった。

「リア、宝箱があった場所のドに『鍵』が隠されているはずだ。……後は、頼んだ」

「何を言ってるのよー　ね、ねえ、嘘でしょ……？」

スマホから光が溢れ、僕の身体を包み込んでいく。

「ハルトっ！　ハルトーーーーーーーーーっっっ!!」

――徐々に濃くなっていく霧に遮られた視界の向こうで、瞳から大粒の涙をこぼすリアの姿だけが、なぜだかはっきりと見えた。

VII

「――ん」

ぼんやりとした頭が徐々に晴れていき、焦点が合った視界いっぱいに映るのは、こちらを覗き込む男の顔　彼は……、

「……誰だ？」

「おいおい　まだ寝ぼけてんのか？　同じボケは勘弁してくれよ」

栗色のくせっ毛、色黒の肌に、人懐っこい笑い顔――ああ、悟か。

「ごめんごめん。……ここは？」

身体を起こし周囲を見回す。背後には、見覚えのある大きな扉があった。

「第一階層の入り口、ダンジョンのスタート地点だな」

「スタート地点……」

未だ回転が鈍い頭でなんとか現状を把握しようと試みる。

「僕は、〈脱獄〉を使って体力がゼロになったんだよな……」

ふと思い出し、スマホを確認してみる。尽きたはずのバッテリーはいつの間にか全快していた

「ここに飛ばされたってことは、竜胆も『天橙』になったんだろ？」

「『失格』？　それって……」

ちょうどそのとき、LINEからのメッセージが届く

【LINE：『失格』になったプレイヤーハ、これまでダンジョンで得たアイテムや地図データ等がリセットされ、スタート地点まで戻されてしまいマス】

「……文字通り『リセット』されてしまうのか」

スマホをよく見ると、アンテナバーが一本減っている。アンテナバーは合計四本。つまり、全四機でダンジョンをクリアしなければいけないということになる。

「まあ、もう第一階層の仕掛けは分かったから、前よりは楽か」

「どうだろうな。この先のフロアが、失格になる前に竜胆がいたフロアとは限らないぞ」

「え？　どういうことだ？」

タイミングを見計らったように、LINEからの追加メッセージが届く。

【LINE：『失格』してしまったアナタにヒントデス。どうしてもフロア攻略が困難と判断した場合ハ、スタート地点に戻ってフロアをシャッフルしてみましょウ！】

「フロアをシャッフル？」

LINEの説明によると、第一階層から第五階層までの各フロアごとに、それぞれ内容が異なる20のパターンが存在し、スタート地点の扉を入り直す度にいずれかのフロアへランダムに飛ばされる仕組みになっているそうだ。……橘が言っていたのは、このことか。

「第六階層が1パターンだけだとすると、全部で101のフロアが存在するってことか。……こういう大事なことは、先に言ってほしいな」

フロアを切り替えるためには、各階層のスタート地点まで戻らなければならないので、どちらにせよあのモンスターハウスから脱出することは不可能だったのだが……。

「……」

失格間際に見た、リアの悲しげな表情を思い出す。彼女はいま、どうしているだろうか。

「……行くか」

とりあえず、もう一度リアと合流することを第一目的に定め、僕は歩き出す。

「ちょ、ちょっと待てって」

慌てた様子で追いかけてくる橘。

「せっかく会えたんだ　どうせなら一緒に行こうぜ！」

「……」

リアと出会った頃と違い、いまの僕はモンスターに対抗できる術もある。いつもの僕なら、冒いに迷惑にならないように、どうにか理由を付けて断っていた申し出だ。

「いいだろ、な？」

僕が断ることなど微塵も想定していない満面の笑顔。「壁」をするりと抜けながら、どこか安心感をも感じさせる空気は、先ほどまで共に歩んできた少女を思い起こさせる。

「……わかった、一緒に行こう」
「よっしゃ！　よろしく頼むぜ、相棒！」
橘は笑みを一層強くしながら、意気揚々と未知なるフロアへ続く小さな扉を開け放った。

*

――〈炎拳（フレイム）〉！
炎魔法を起動した橘は、インカメラを使い自らの拳をターゲットに指定。すると、出現した炎はそのまま彼の拳へと移る。
「オラオラァッ！」
鋭い牙で橘に襲いかからんとしていたモンスター――全身の毛が氷でできた狼は、炎を纏った拳によるガウンターを喰らい大きく背後へと吹っ飛ぶ。
「――〈連写（フォーカス）〉！」
スマホを顔の前で構えた橘は、すかさずシャッターを切る。すると、スマホから光の矢が飛び出し、氷狼の左目に突き刺さる。氷狼は悲鳴を上げながら、たちまち光の粒となって消滅する。そのまま矢はブーメランのように橘の持つスマホへと吸い込まれていく。
「――〈炎球（ファイアボール）〉！」

後方からその様子を観察しながら、僕は炎魔法を起動。橘の死角に移動したもう一体の氷狼へとスマホをかざし、ピンポイントで攻撃を加える。

「……ふう」

敵を残らず撃破したことを確認した僕は、大きく息を吐く。

「よっしゃっ！　ナイスタイミングだぜ！」

こちらへ近づいてきた橘が、ホクホク顔でスマホの画面を見せてくる。そこには、先ほど撮影した氷狼の写真が収められていた。

「これが、そのまま回復アイテムとして使えるのか？」

「その通り！　構図もバッチリだから、かなりの効果が期待できそうだぜ」

橘のワンオフアビリティ『連写』は、カメラで撮影することで対象の体力を奪い取る『フォーカス』と、奪取した体力を回復アイテムとして保存・使用することができる『アルバム』という二つの機能を持っていた。

「確かに便利な能力だけど、かなり相手に接近しなきゃならないのが難点だな」

「まあ、元々他は前衛なスマホ操作は苦手だからな。近づいて、拳で殴って、撮影！　シンプルでいいじゃないか」

奪い取る体力量は、撮影時の構図に左右されるらしく、一定以上相手に接近しなければ、大した効果は期待できないそうだ。そのため、橘はアプリ化した魔導書を自身に使用し、

近接格闘の補助として活用する方法を独自に編み出していた。
「意地が悪くて助かったぜ。俺一人だと、複数の敵相手が難しくてな」
「僕は、橘みたいに敵と直接戦えないから、これくらいのフォローしかできないけどな」
「そうか。さっきの身のこなしを見る限り、なかなか素質はあると思うけどな」
身体を鍛えるのが趣味だという橘は、どうも僕に格闘の才能があると勘違いしているらしく、先ほどから体捌きの基本や鍛練方法などをあれこれ指導してくる。
「――僕はいままでろくに運動すらしたことないんだって。今後もそのつもりはないし、身体を鍛える必要はないよ」
「それでその動きができるなら、なおさらスゴいじゃないか――必要になってからじゃあ、遅いかもしれないぜ」
「？」
声のトーンを落としてぼつりとつぶやいた橘のひと言が、妙に引っかかった
「まあ、気が向いたらってことで覚えていてくれればいいさ！　な！」
「あ、ああ。分かったよ」
おどけた声を出した橘は、気を取り直すように下ドロップしたアイテムを取り出す
「これが『キーアイテム』ってことでいいんだよな？」
「ああ　予定通り、こっちのアイテムと対になるようだ」

中央から二つに引き裂かれるように前半部分が無くなっている魔導書を橘から受け取った僕は、懐から別の魔導書を取り出す。

「おっ」

後半部分が失われている魔導書と先ほどの魔導書、それぞれのQRコードをスキャンすし、アプリ化した二つのアイコンを重ねるようにドラッグすると、スマホの画面上で両者が合わさり、一冊のアプリ化した魔導書――〈解錠〉へと変化した。

「――これで、第二階層クリアだ」

アプリを実行すると、部屋の中央に扉が出現する。

「この先が第三階層ってわけか。よしっ、早く行こうぜ！」

「お、おい、ちょっと待てって」

呼び止める間もなく扉の向こうへと消えてしまった橘に、僕はもう一度周囲を見回しながら、小さく溜息を吐いた。

「おっ、遅かったじゃないか」

数分後、ようやく扉を通り合流した僕に、橘が待ちくたびれたといった表情を向ける。

「……念のために、部屋の中を調べてたんだよ。ほら、その成果だ」

そう言って、僕は先ほどの部屋で見つけた〈回復〉の魔導書を橘に手渡す。
「さっきの戦闘で体力が減ってるだろ　二つあったから、一つ使いなよ」
橘には〈速写〉で撃破した分の回復アイテムもあるだろうが、これからも油断で戦うからにはなるべくストックしておいたほうがいいだろう。
「おー、そりゃ助かったぜ。それならここで少し休憩といくか」
橘はそう言って手近な岩に腰を下ろす　魔導書を手渡した僕も、彼に倣って適当な場所を見つけて身体を休める
「……」
「んぅ　どうした？」
手渡す際にちらりと見えた橘のスマホ画面。予想以上に減っていたバッテリーメーターについて考えていると、気になった様子の橘が覗ねてくる
「いや、なんでも……」
いつものように軽く流そうとして、ふいにリアの言葉を思い出す
「なんだ？　気になることがあるなら、遠慮せずに言ってくれていいんだぜ」
気持ちの良い笑顔でそう促され、僕はおそるおそる口を開く
「多分、橘はバッテリー消費の効率があまり良くないんだと思う　スマホの設定をいくつか変えれば、無駄な体力を減らさずに済むはずだ」

「へー、マジか」

小さくうなずきを返した僕は、不必要な通知設定をオフにしたり、バックライトの輝度を弱めたりといったバッテリー節約術のいくつかを橘に教える

「あとは、使い終わったらすぐにスリープモードに切り替える癖を付けておいたほうがいい。復帰時のパスコード入力をオフにすれば、戦闘時もすぐに使えるようになる」

僕のアドバイス一つ一つに感心したようにうなずきを返していた橘は、嬉々とした表情で唸を鳴かせる。

「なんだよー、こんな便利な方法知ってたなら、もっと早く教えてくれよっ」

「……いや、余計なお世話かなと思ってさ」

「竜胆が良かれと思って助言してくれたんだ　感謝こそすれ、迷惑に思うわけないだろ」

「そうかな……」

自分の言葉を相手がどう受け取るかなんて、人によって分からない　良かれと思ったアドバイスが、相手にとってはいらぬお節介なんてことは、往往にしてある。

「……よしっ、分かった！」

そんな僕の心情を悟ったのか、橘は何かを思いついたように顔を上げる。

「相手のことをよく知っていれば、竜胆も余計なことを考えずに済むだろ　せっかくだから、休憩がてら友情を深めようぜ！」

「友情って……」

突然の提案に僕が戸惑っていると、

「まあまあ、とりあえず俺の話を聞いてくれるだけでもいいからさ。自分で言うのも何だが、結構ネタに困らない人生を歩んできた自信があるぜ」

進んで自らのことを話したがる橘に、僕は困惑を強めながら言葉を返す。

「……仲、家族に迷惑をかけたとか、言ってたよな」

「いまも真面目とは お世辞でも言えないが、昔はもっとやんちゃでな。外で喧嘩していない日は皆無だったくらいだ ……ったく、何がそんなに腹立たしかったのかねぇ」

「……いわゆる典型的な不良ってヤツか」

戦闘慣れした様子からして納得できる部分もないわけではないが、現在の明るい性格を見ると、荒れていたという話は俄に信じがたい。

「親父やお袋はもちろんだが、妹には昔からろくに構ってやれず迷惑掛けっぱなしでな いまでも俺のことを怖がって口も聞いてくれないんだよなぁ……」

「……妹さんがいるのか？」

「これが俺に似ず素直な良い子でな！　来年は陣希木学園の中等部に入る予定なんだぜ！」

「！」

思わず目を見開くと、橘が小さく首をかしげる。

「ん？　どうかしたのか？」

いつものように「なんでもない」と誤魔化すこともできたが、僕はなぜか観念したようにつぶやいていた。

「――僕の妹も、神奈木の中等部なんだ」

「！　マジか！　すっげえ偶然だな！」

驚いた表情の橘は、複雑な表情を見せる僕に何か感じたのか、おそるおそる口を開く。

「……もしかして、妹さんと上手くいってないのか？」

「う」

図星を突かれて頭が強張る僕に、慌ててフォローするような橘の言葉が重なる。

「ウチも似たようなもんだが、粘り強くいけばいつかは伸び及くなれるって、な？」

「……」

喉まで出かかった「橘と僕は事情が違う」という言葉だけは、なんとか呑み込んだ。

――僕は、三歳のときに竜胆家に引き取られた養子だ。中等部に上がる直前、何の心構えのないまま唐突にその事実は、僕を取り巻く世界への認識を大きく変えた。竜胆家の皆は、変わらず僕を本当の家族同様に扱ってくれたが、それまでは意識しなかった本当の血筋――必要以上に気をつかう様子を、言葉や行動の端々に感じ取るようになった僕自身が耐えられなくなり、徐々に距離を置くようになってしまった。いまでは家族間の

会話は皆無に等しいが、不必要な軋轢を起こすくらいなら、適度な距離を保っていたほうが、安心して自身の「居場所」を保つことができる。

「……竜胆？」

「……」

目の前で屈託のない笑顔を浮かべる橘を見ながら、ぼんやりと思考を続ける。

いつしか僕は、人と距離を置くことが処世術となっていた。しかし、このダンジョンに迷い込んでからというもの、こちらの懐にスルリと入ってくる人物――リアや橘の存在が、僕を妙に戸惑わせる。彼らとのやり取りをどこか心地よく感じている自分がいることも、そんな戸惑いに拍車を掛けている。

「……ふう」

眉をしかめうつむく僕に、苦笑しながら小さく息を吐いた橘が、優しい声色で尋ねる。

「なあ、竜胆には何か『夢』ってあるか？」

「は？」

突然何を言い出すのだろうと呆けた表情になる僕に、橘はニカッと笑いながら続ける。

「夢だよ、ゆ、め！　何回も言わせんな、恥ずかしい」

「……別に、ないよ」

照れる橘に、こちらも苦笑しながら小さく言葉を返す。

「なんでもいいんだぜ。小さい頃になりたかったものとか、なかったのか？」
「どうだったかな……」
昔は何かを夢見ていた頃もあったような気がするが、覚えていない。
「そういえば、ダンジョンを一番に攻略したプレイヤーは、何でも願いが叶うんだろ？」
「……いまになって考えてみれば、あからさまに胡散臭い話だけどな」
「まあそう言うなって。もし竜胆がトップになったとしたら、何を願うんだ？」
言われて、自身を顧みる。――日まぐるしく変化する世界で、自分の「居場所」を保ち続けることに必死な僕は、一体どんな未来を望んでいるのだろうか……、
「……そう言う橘はどうなんだ？　やっぱりカメラマンになる夢を実現させるのか？」
答えの出ない問いに、とりあえず質問返しで応じる
「いや。何を願うか具体的に考えてないが、少なくともそれだけはないな」
「？」
意外な返事に僕が首をかしげると、笑いながら橘が続ける。
「『家族が健康でいられますように』とか、そんなありきたりのものになるんじゃないか？――俺自身の夢は、俺自身の力で叶えるもんだしな」
「！」
意外と言ったら失礼かもしれないが、しっかりとした考えを持つ橘に、自分中心でしか

なかった己に気づかされ、呆然とする。……神社で『家内安全』を願うようなもの、か。

「……橘は凄いな　僕なんかよりもずっと大人だ」

自らの夢はあくまで己の力で達成すると宣言する姿は貫禄すら感じさせ、とても同年輩とは思えない。対する僕は、己の弱さや情けなさをまざまざと見せつけられた思いだ。

「なはは、よせやい。不良が急にいいことをしたり言い出したりしたからって、あまり褒めるもんじゃないぞ」

「いや、僕は橘の不良時代を知らないし」

普段から人と深く関わらないように過ごしてきたせいだろうか、僕はそもそも現在の橘自身のことすらほとんど知らなかった。リアと一緒にいたときにも感じたが、人との関わりは面倒も多い反面、そうでないと思い至らない気づきが得られることを強く実感する。

「あー、やめやめ。そろそろ休憩を終えて、ダンジョン攻略の話に戻そうぜ」

照れくさそうにそうつぶやく橘。

「はは……、そうだな」

たまにならこうやって人と付き合うのも悪くないのかも、などと柄にもないことを考えつつ、僕は改めてダンジョン内を見回すのだった。

VIII

「第□階層か……。一体どんな仕掛けが待っているのやら。
とりあえず癖のようになっているマップ確認を行う　初めて来たフロアでは確認したところで大した意味がない……と思いきや、
「え？」
何かの間違いかと、思わず地図アプリを起動し直す
「どうした？」
「……ちょっと〈地図〉を見てくれ」
念のため、「橘」にも確認してもらうが、どうやら間違いないらしい。
「――地図が、完全表示されてる」
これまでのフロアと違い、このフロアは全ての道がマッピング済みとなっていた。
「ん？　……なんだこれ」
地図の上部に、いままでなかった謎の数字が表示されている。右上には「4」左上には「1　00」といった具合だ。
「左のは、時間か……？」
一分なのか一時間なのか知らないが、これが意味するところは、一体何だろうか

「ここであれこれ考えるよりも、とりあえず先へ行ってみようぜ」
「……そうだな」
橘の言う通り、色々と推測を立てるにも、もう少し情報が必要だ。
「迷ったりしないように、端から回っていくか？」
「そうしてもらえると、ありがたいな」
「よしっ、行くか」
気合を入れ直し威勢よく歩き出した橘に続いて、僕はゆっくりと歩を進めた。

「――おっ、あったあった」
数分後、とある部屋で壁を調べていた僕と橘は、ようやく目的の仕掛けを発見する。
「よし、これで……」
橘が見つけた小さなコードに向けて、スマホをかざす。すると、小さな電子音とともに、閉ざされていた二つの扉がゆっくりと開く音が響く。
「ふぅ、初めて閉じこめられたときは焦ったけど、こんな単純な仕掛けだったとはな。竜胆がいてくれて助かったぜ」
「はは――、あれだけ橘が慌ててくれたおかげで、逆にこっちが冷静になれたんだよ」

このフロアは、30平米ほどの正方形の部屋が縦横24マスに連なって構成されていた。最初に入った部屋でいきなり扉が閉まったときは、あのモンスターハウスを思い出して正直肝を冷やしたが、この部屋のように敵が出現せず、部屋に隠されたコードを見つけるだけという仕掛けがほとんどだった。

「これで四つ目か　この勢いに乗って、早速次の部屋へ行くぞ！」

勢いよく開け放たれた扉の向こうへ飛び込む橘に続いて、僕も次の部屋へと向かう

「ー　おい、竜郎　あれは……」

「モンスター！……か　見たところ一体だけのようだな」

続く部屋では、三つ首の黒犬――ケルベロスが待ち構えていた。背後の扉がゆっくりと閉まっていくが、モンスターハウスのように部屋中に敵が溢れているわけではない。

「先手必勝！　――（連　写　フォーカス）ー」

あっという間に敵へ接近した橘が、すかさずスマホのカメラでケルベロスを撮影する。

「なっ……!?」

カシャカシャッと連続でシャッターが切られるが、敵が消滅する気配はない　後方からその様子を注視していた僕は、敵が身体を前方に傾けるのを見て、反射的に叫ぶ。

「橘！　伏せ引け！」

重固地になったようにシャッターを切り続けていた橘が後ろを振り返ったそのとき、驚

くべき瞬発力で跳躍したケルベロスが鋭い爪を橘に振りかざす。

「――〈氷、球〉！」

僕は咄嗟に、残っていた魔法アプリを起動し、敵の攻撃を防ぐ。

「！　このやろうっ！　――〈炎、拳〉！」

すかさず自身も拳に炎を纏わせた橘が、至近距離から無防備な相手の身体に渾身のストレートを叩き込む。

「――橘、着地のタイミングに合わせてシャッターを切るんだ！」

〈おうよっ、――〈連写・フォーカス〉！」

大きく吹っ飛んだ敵が着く場所であらかじめスマホを構えていた橘により、ベストショットに近い形で〈連写〉が発動。ようやく敵の姿が光の粒となり消滅する。

「おっしゃ！」

ガッツポーズをとる橘。こちらも安心して息を吐くと、背後と左側の扉とが同時にゆっくりと開き始めるのが目に入る。

「……一体だけのわりには、随分と手こずったな」

いままでの戦いでは、あの程度の体力をしたモンスター・他なら、ノーダメージの状態でも〈連写〉が通用していた。チュートリアルフロアや第一階層よりも敵が強くなっているのは、ある意味当然とも言えるが……。

「俺たちは、別にレベルアップしたりしてないよな？　なんか不公平じゃね？」

　このゲームにはプレイヤーレベルの概念がないらしく、あくまで僕たち自身が戦闘やダンジョンの仕掛けに慣れていくことでしか、敵が強くなっても対抗する手立てがない。いまはまだなんとかなっているが、この先辛くなる場面が出てくるかもしれない。

「ま、そのときはそのときか。いまはとにかく先へ進むことを考えようぜ」

「……そうだな」

　僕は改めて地図アプリを立ち上げ、現在地を再確認する。

「ん？」

　マップが表示された瞬間、何か違和感を感じる。現在地を表すアイコンが点滅しているのは、確かにこの部屋に間違いないが……。

「おーい、何してるんだ？　次へ行くぞ」

「あ、ああ」

　違和感の正体を摑めないまま、首を捻りながら橘と合流する。そして開け放たれた扉の向こうへと二人同時に進むと、

「……え？」

　部屋を見回し、同時に呆けた声を上げる僕たち

「これ、さっきの部屋と同じじゃないか？」

「あ、ああ」

橘の言う通り　いまいるこの部屋は、先ほどしらみつぶしに二人で壁を調査した部屋とまったく同じつくりをしていた。

「ほら、コードの場所も同じだ。随分手抜きな仕掛けだな」

壁を確認した橘がスマホをかざすと、閉ざされた扉がゆっくりと開く。

「手抜き？　本当にそうなのか……？」

僕はつぶやきながら再度地図アプリを立ち上げる。すると、

「……あれ？」

先ほどよりも違和感が強くなる　いま、誰かに部屋を移動したはずなのに、マップ上の位置が変わっていないような……。

「まさか……ループ構造か？」

行けども行けども同じ道が続く。トラップの一つ　これなら一度通ったはずの部屋に辿り着いてしまったことも、地図上の現在地が変化しなかったことも理由が付く。

「どうした？　次へ行かないのか？」

「ちょっと待ってくれ！　これを見て……」

橘にも確認してもらおうとしたそのとき、

「……え？」

スマホを注視していた僕の目の前で、信じられないことが起こった。

「――部屋が、入れ替わっ……た」

現在僕たちがいる部屋から一区画ほど離れた、隣り合う二つの部屋が、確かにいまマップ上で入れ替わったのだ。

「まさか……」

ある思いつきとともに、ゆっくりと指先をスマホの画面へと伸ばす。

「P」

――マス目状に配置された部屋の一つを指でフリックすると、地図上で隣の部屋と入れ替わった。

「もしかして、これを使って自分で道を繋げていくのか？」

自分が現在いる部屋は動かせないが、それ以外の部屋は隣接した部屋と自由に入れ替えることができるようだ。……つまり、それぞれ扉の位置が異なる部屋同士を入れ替えていけば、好きな方向へ道を作っていくことができる。このフロアは、スライドパズルの要領で出口までの道を作るのがクリア条件ということか？

「と、なると、出口のある部屋は……」

パズルのルールから考えて、目的となる部屋は最も入りづらい構造…つまり、扉がひとつしか存在しない袋小路部屋の中にある可能性が高い。

「……これか！」

フロア端に存在する一つの部屋だけが、フリックできず固定状態になっている。

「！」

そのとき、地図の上部にあった謎の数字のうち、「1：00」の表示が「0：35」「0：34」と一秒ごとに減り続けていたことに気づく。

「もしかして、制限時間……か？」

しかも、いつの間にか「3」となっていた右一の数字は、時間表示が「0：00」となった瞬間、さらに「2」まで減ってしまった。

――ピピッ

タイミング良く、スマホにLINEからのメッセージが届く。

【LINE：謎解きに五回失敗すると、体力が残っていても『失格』になりますヨ】

「な……っ!?」

体力が残った状態で「失格」になると残機は減らないらしいが、これまでの実績を白紙に戻され、第一階層スタート地点からやり直さなければならない仕様はそのままらしい。

「おいおい、いまのメッセージはなんだ？」

「あ、ああ　実はな・・」

疑問符を浮かべる橋に、たったいま気づいたフロアの仕組みについて説明する。

「へー。俺はパズルとか苦手でよく分からんから、意思に任せてもいいか？」

「ああ、それは構わないが・・・」

一分以内に計576マスのパネルを操作してゴールまでの道を作る。これだけでも充分以上に骨が折れる作業だが、謎を解く上で大きな障害となる問題が、もう一つあった。

「――このフロアには、僕たち以外にもプレイヤーがいるんだ」

五回制限のはずが、探索開始時に既に「4」となっていた回数表示。そして、まったく地図に触れていない状態で勝手に動いた部屋　これは、フロア内に僕ら以外のプレイヤーが存在していることを意味している。しかも、どうやら謎解きの回数制限は、フロア内の全プレイヤーで共有しなければならないようだ

「チャンスは残り一回。もう一人のプレイヤーが仕組みを知らずに無闇に操作すれば、あっという間に僕らまで「失格」だ」

「・・・マジか」

どうにかして他プレイヤーと連絡が取れないか考えた僕は、あるアプリを思い出す。

「（掲示板）・・か」

スマホ片手にピタリと静止する僕・・・こういうオープンメッセージアプリで特定の誰

かにメッセージ送るのって、初めてなんだよな。

「……仕方ない」

操作に不慣れな橘に任せるのも酷だと、覚悟した僕はあれこれと頭を悩ませながらメッセージを作成する。

【Hal：スマホでマップが操作できるフロアにいるプレイヤー。謎が解けていないなら、ひとまず操作をやめてくれ】

「［　　］」

実際に文字で目にすると、あまりにも素っ気ないメッセージに、さすがに反省したくなる　内心頭を抱えている内に、タイムライン一に返信が届く

【Ruby：@HAL　違かなっ　たぶんそれアタシのことだと思うけど】

Rubyというと、最初の頃から（掲示板）に書き込んでいた一人だったな。

【HAL：@Ruby　必要なら仕掛けについて説明する　とりあえず操作は控えてくれ】

【Ruby：@HAL　だから誰ー？　それなら一つお願いがあるんだけど】
【HAL：@Ruby　……何だ？】
【Ruby：@HAL　ちょっち助けてくんない？　身動き取れないんだよねー】

「……行くしかないだろうな」
「……だよな」
スマホを睨めながら橘とうなずき合う。急いでスタート地点にまで戻って挑戦フロアを切り替える、という案もあったのだが、ここにきてそれは薄情すぎるだろう
【HAL：@Ruby　分かった。場所を教えてくれ、すぐ向かう】
【Ruby：@HAL　さんきゅっ！　ってか、誰？】
「……まあ、会ってから名乗ればいいか」
「よっしゃ、早いとこ行こうぜ」
アプリを閉じた俺は、橘とともにRubyが指定した部屋を目指し歩き出した。

――ようやく辿り着いた小部屋で僕たちを待っていたのは、明るく染めた髪を派手な髪飾りで二つに分け濃いめの化粧をした、いかにもイマドキといった感じの女子生徒だった。
「おっ、IIAIクンってのは、竜胆クンのことだったのか！」
僕の顔を見るなり、そう言って目を丸くする女子生徒
「……ゴメン、どこかで会ったか？」
記憶にないため、少し警戒しながら尋ねる。
「アハハっ、コッチが勝手に知ってるだけだからさ」
手を左右に大きく振りながら屈託なく笑う女子生徒。
「アタシはI―Bの山吹瑠美と、竜胆クンは確かI―Aだったよね」
「あ、ああ」
「えーと……、そっちは誰、だっけ？」
山吹は忘れていた何かを思い出すように眉をひそめて僕を見やる。
「同じI―Bの橘っす」
「あっ、あー、そういえばそうだったよねっ」
「ひでぇ」
ポンと拳を打ち何度もうなずく山吹に、がっくりと肩を落とす橘。
「ごめんごめんっ、ちょっとど忘れしてただけだってば」

「……まあ、いいけどよ」

それほど気にした様子もなく苦笑した橘は、小さく首をかしげる。

「助けてってことだったが、何かあったのか？」

この部屋は既にクリア済みのようなので、山吹が「身動きが取れない」と言っていた意味が分からない

「あはは……、えーと実は……」

バツが悪そうに山吹が話すところによると、彼女はこれまで、スタート時に偶然居合わせたクラスメイトとずっと一緒に探索を進めていたらしい。しかし、戦闘を一手に引き受けてくれていたその女子生徒が、この部屋でついに力尽きてしまい、山吹だけが一人取り残されてしまったというわけだ。

「アタシは、あまり身体を動かすのが得意じゃないからさ　誰か来てくれるのをずっと待ってたんだよねー」

活発そうな見た目とは裏腹に、バトルの類は苦手だという山吹　時間つぶしがてらスマホを弄っていたら、意図せずフロアを操作してしまったということらしい　……しかし、

「？　アタシ、一度しか操作してないよ」

「え？」

回数制限は五回　僕と山吹が一回ずつ使って表示が「2」になったということは……、

「俺たちの他に、もう一人プレイヤーがいるってことだな」
橘の言う通り、このフロアには少なくともあと一人プレイヤーがいることになる。……面倒なことになったな。
「それでそれでっ、このフロアの仕掛けって何なの？」
「っ」
うきうきした様子でそう尋ねてくる山吹に気圧され、自然と彼女と離れた位置にいた僕は、さらに後ずさる。
「……ふむ。山吹、ちょっといいか？」
「ん？　何？」
そんな僕の様子を見てとった橘は、山吹を呼び寄せ耳元でぼそぼそと何事かつぶやく。
「……でな、……って感じで……」
「え？　いいの？」
よく分からないやり取りに僕が首をかしげていると、橘がこちらを振り返り口を開く。
「竜胆、山吹を仲間に加えようと思うんだが、いいよな？」
「あ、ああ」
一人では身動きが取れないというなら、仕方ないだろう。
「それで、だ　ここからは二手に分かれて他のプレイヤーを探そうぜ」

「構わないけど……」
「よしっ、じゃあ二人仲良くな」
「……はぅ」
「あはは……」
呆然とする僕と呆笑する山吹を尻目に、橘はニカッと笑いその場を去ってしまう。
「――童貞クンっ、アタシたちも早く行こっ！」
突然、僕の右腕に飛び込むようにして抱きついてきた山吹。
「お、おいっ、何を……」
「いいからいいからっ、ほらほらっ、早く！」
そのままグイグイと腕を引っ張りながら、先へ進もうとする山吹。ボリュームのある胸から伝わってくるリアルな感触に僕の顔は真っ白になる。
「くっ……」
他のことに神経を集中させようと、スマホを取り出し地図アプリを開こうとする。
「あれ？　そのスマホ、先週出た新型じゃん！　童貞クンって二台持ちなの？」
学園配布のスマホとの違いをめざとく見つけた山吹が、さらに身を乗り出すようにしてスマホを覗き込んでくる。
「や、山吹、ちょっと……」

「へー、カバーはわざわざ学園スマホと同じにしてるんだ。どうせならもっとオシャレなカバーにすればいいのに。アタシがコーディネートしてあげよっか？」

「あ、ああ……機会があれば、な」

幾分か冷静さが戻ってきた僕が、さすがに急接近過ぎる山吹の様子を見やると、

「――り、童胆クン、何かな？」

間近で視線を向けられた山吹が、突然動揺した表情を浮かべる。よく見ると、頬も薄く染まっている。……照れている、のか？

「……ん？」

その様子に違和感を覚えていると、どこからかこちらを見つめる熱い視線を感じる。

「ど、どうしたの、童胆クン。こっちこっち」

少し慌てた様子の山吹が、注意を逸らそうと腕を引っ張る。……これは、もしや、

「――橘、これはお前の差し金か」

溜息とともに声を掛けると、出入り口に隠れていた橘が笑いながら姿を現す。

「なははっ、よく分かったな」

一気に体中の力が抜ける感覚とともに、続けざまに溜息が漏れ出す。

「いくらなんでも山吹の行動が唐突すぎだ。さっき何事か入れ知恵していたようだしな」

「ちぇっ、童胆がオロオロする貴重なシーンをもう少し収めておきたかったんだがな！」

スマホを確認しながらそんなことをつぶやく橋［＝＝］あとで、データは削除させよう
「まあ、そっちは半分冗談として、……山吹、どうだった？」
「うんうん、橋クンの言った通りだったねー」
憤を見やると、ニヤリと笑みを浮かべた山吹が。
「童貞クンって、学園でも誰とも喋らずにいつも一人でいるイメージだったから、もっとおっかないヒトだと思ってたんだけど……」
「そうそう、コイツはクールを気取ってるけど、中身は純情なシャイボーイってこった」
「……シャイボーイ、て」
その言には人いに反論したいところだが、いままさに山吹に抱きつかれながら顔をかくしている僕が言っても説得力がない。
「よく見るとカワイイ顔してるし、こりゃあお姉さんにはたまりませんなー」
「お、おい……、もういいだろ」
密着することに慣れたのか、調子に乗ってギュッと抱きつく力を強くする山吹。……お姉さんというより、オッサンみたいだが。
「なははっ、せっかくだから思う存分役得を楽しんだらどうだ」
「［＝＝］勘弁してくれ」
結局、耐えきれなくなった僕が強引に身体を離すまでからかわれ続けたのだった

IX

「さて、お遊びはここまでにして、そろそろ残るプレイヤーを探しに行くか」
「そだねー、アタシ自身もたっぷり充電ができて元気一杯だしっ」
「……はぁ」
好き勝手に言う二人に再度大きな溜息を吐く。荒療治のおかげか、初対面の山吹に対する抵抗感が薄れてきた僕は、頭を切り換えに口を開く。
「山吹って、結構（掲示板）に書き込んでたよな？　他にこのフロアにいそうなプレイヤーの書き込みとか、なかったか？」
「んー、アタシの知る限りではなかったと思うよ」
「そうか……」
手がかりなしかと溜息を吐いた僕に、山吹は「ちょい待ち」とスマホをせわしなく、弄り始める　残像が見えるほどの高速操作に度肝を抜かれながら、おそるおそる尋ねる。
「……何してるんだ？」
「んー、〈掲示板〉のDM機能を使って、心当たりがありそうなPCに直接連絡を取ってるとこ　新しくこのフロアにやってきた子がいないとも限らないし」
「DM機能？」

山吹によると、《掲示板》には全員が閲覧できるオープンメッセージの他に、特定のプレイヤーだけに送れるダイレクトメッセージ機能が付いているらしい。現在のスマホには通話アプリやメールアプリが存在しないため、これはその代替機能なのだろう。

「送れる相手は、元々のメッセアプリのアドレス帳に登録してあったヒトだけみたい」

「……」

無言で固まる僕に、事情を察した山吹がおそるおそる尋ねてくる

「……竜胆クンって、ぼっち？」

「……違う、と思う」

人と深く関わらないようにしている僕だが、なぜだかぼっち呼ばわりは抵抗がある

ちなみに、アドレス帳に入ってるのは？」

「……妹と、母親だけ、だが」

そのニ人でさえ、滅多なことではメッセージを送りあったりしない。

「なはは、俺も似たようなもんだから気にするな」

……橘の場合は、単に操作が苦手で使っていないだけだろうが

「アタシがトモダチになったげるから、そう落ち込みなさんなって」

「……サンキュ」

人ごとのように（人ごとだが）笑う山吹が、僕のスマホに自身のスマホを近づける

「オッケー、これでアタシと連絡が取れるよー」

スマホを見ると、〈掲示板〉の中にDM機能らしきボタンが追加されている。どうやら後からでもリストへの追加は行えるらしい。

「それで、心当たりがあるヤツはいたのか？」

「んー、アタシのアドレス帳に登録している子の中にはいないみたいだねー」

「それって、どのくらいいるんだ？」

「えっと、ウチの学年の三分の二くらい？　もうちょっといるかな？」

「……本当か？」

「知り合いの知り合いも含めたら、九割方は行動を把握できるはずなんだけどねー。おっかしーなー」

「……バネぇっすね」

橘もさすがに度肝を抜かれた様子だ。

聞くと、山吹はその圧倒的な人脈と〈掲示板〉とを組み合わせ、ダンジョンに関する様々な情報を集めながらパートナーの女生徒をサポートしていたらしい。僕ではまず思い至らない攻略法に、こういったスマホの使い方もあったのかと感心する。

「いま一番進んでるのは、第三階層にいる倉田クンや百合原チャンたちのチームかな」

「トップでもまだ第三階層までなのか……」

「なんか男女三人ずつのチームだったせいか、痴情のもつれが発生して攻略がストップしちゃってるみたいだけどねー」

痴情のもつれって……。一体、何をやってるんだか　兼山と百合原って、確か同じクラスだったような……。

「で、その情報網でも、このフロアにいるらしいもう一人の正体は分からない、と」

「残り一組の中にいるってコトだねー。アハハっ、竜胆クンみたいなぼっちサンかも？」

「……泣くぞ」

ゴメンゴメンと笑う山吹に溜息を返すと、僕は再度地図アプリを確認する。先ほど山吹に確認して分かったことだが、件のブレイヤーが操作したのは、どうやら僕らや山吹がこのフロアに来る前のことだったらしい。

「この部屋……怪しいな」

よく見ると、フロアのちょうど角にある部屋を守るように、何重にも部屋の『壁』ができていることに気づく。ランダムに部屋を入れ替えただけでは、こう部合良く外からの侵入を妨害するように扉が配置されないだろう。

「もしかして……」

「竜胆、どうかしたのか？」

「ええとだな……」

たったいま思いついた推測を二人に話す。
「つまり、この部屋に誰かが隠れてるってこと？」
「多分、な。理由は分からないが、周囲に誰も入って来られないように、わざと扉の位置を計算した部屋で囲っているようだ」
「さしずめ、天照大神ってところか」
「ああ　とりあえず行ってみよう」
僕は橘にうなずき返し、滝爽と歩き出す。
「おーい、天岩戸はこっちだよー」
「……」
まったく違の方向を指さす山吹に、僕は無言で踵を返したのだった。

「――さて、どうしたものか……」
山吹に先導してもらい、なんとか目的の部屋近くまで辿り着いたが、これ以上は例の「壁」が行く手を阻んで先へ進むことができない。
「ん？」
すると、行き止まりの壁に、張り紙のようなものがあることに気づく。

【もう余計なことはしませんので、一人にしてください　胡桃沢】

……この張り紙、一体どうやって用意したんだ？

「胡桃沢って、確か……」

「あー、あの子だったかー　そりゃあ、アタシも分からないはずだ」

「？　誰のことだ？」

納得したようにうなずき合う僕と山吹に、一人首をかしげる橘

「――胡桃沢ねね　学園始まって以来と評判の、いわゆる天才児だよ」

「定期テストはいつもオール満点っ、専門の機械工学の分野じゃ、飛び級で博士号も楽勝って子なのに、神奈木学園のほうが色んな設備が揃ってるからって、喚さえあれば研究室に籠もってるらしいねー」

さすが情報通、どこから仕入れたのか、知らない情報がポンポン飛び出す

「この張り紙――どういう意味なんだ？」

「ダンジョン探索中に、何かイヤなことでもあったのかねぇ」

橘と二人、張り紙の前で首をかしげていると、

「……ふむふむ」

再びもの凄い速さでスマホを弄っていた山吹が、何か納得したようにうなずく。

「どうかしたのか？」

〈掲示板〉を使って、胡桃沢チャンの情報を集めてたんだけどね――……」

微妙な節つきの山吹がぽつりぽつりと語った内容は、こんなものだった。

――元来、あまり他の生徒と接点がなかった胡桃沢。しかし、彼女のワンオフアプリを数名の女子生徒らが偶然目にしたことがキッカケで、彼女たちチームの一員に招き入れられたのだという。

「胡桃沢チャンのワンオフアプリは〈接続〉っていうらしいんだけど……」

ダンジョン内の仕掛けや敵モンスター、ドロップアイテムに関する情報を読み取る「スキャン」という機能を持つ胡桃沢のワンオフアプリ。トラップを事前に察知することができたり、戦闘を有利に進めることができる彼女の力は大いに役立ち、チームは順調に攻略を進めていったのだという。

「同じチームだった子の話だと、〈接続〉の力はそれだけじゃなかったらしいんだよね」

胡桃沢のワンオフアプリはもう一つ、スマホ同士を直接接続し、情報のやり取りが行える「リンク」という力を持っていたそうだ。〈掲示板〉に書き込まれた情報によると、胡桃沢はその力を使って厄介な「悪さ」をしたのだという。

〈接続・リンク〉でスマホ同士が繋がれると、相手の画面を見たり操作したりできるようになるみたいなんだけど……」

あるとき、二人の女子生徒が、突然口喧嘩を始めたらしい。どうやら〈接続〉で繋がれ

た相手のスマホを見た子が、DMで自分の悪口が書かれているのを発見したそうだ。
「あれよあれよという間に、他の子も同じような理由で揉め始めたみたいで……」
当然、チームワークはバラバラ。簡単なトラップに引っ掛かってしまい、数名が「失格」そのままグループは解散してしまった、という顛末らしい。
「書き込みを見る限りだと、いまでも胡桃沢チャンを恨んでいる子が多いみたいだね」
「っ」
山吹のつぶやきに、諦観にも似た溜息とともに脱力する。
――〈掲示板〉に書かれた情報が全てとは限らない　起こった出来事は事実かもしれないが、ここには書かれていない事情が隠されている可能性だってある　しかし、書き込みを見た他のプレイヤーたちは、そんな事情など考えもせず、胡桃沢を「加害者」として認識するのだろう。
「……本人の望み通り、そっとしておかないか？」
僕は張り紙を見つめながら、声を絞り出すようにしてつぶやく。
「なんでだ？　こんな所に引きこもってるより、俺たちの仲間になってもらったほうが楽しいんじゃないか？」
「そうそう。アタシも、前から一度胡桃沢チャンとお話してみたかったんだよねっ」
異論を唱える二人に、僕は小さく首を横に振る。

「……朝桃沢がそれを望んでないなら、無理にこちらの考えを押しつけるのは、大きなお世話になるんじゃないか？」

あまり人付き合いがなかったという朝桃沢。チームメイトたちに振り回された挙げ句の手酷い扱いにさぞかし傷付いているだろう彼女は、人と触れ合うことすら恐怖している可能性だってある。こちらの都合で強引に引き出すのは、いらぬ節介というものだろう

「ま、確かに竜胆の言う通りかもな」そんなことは承知とばかりに、橘が続ける「でも、俺はその『大きなお世話』ってヤツが好きなんだよ」

「そうは言ってもな……」

なおも難色を示す僕に、山吹が橘の言葉を引き継ぐ。

「アタシだって〈掲示板〉の情報が全部なんて思ってないよ。こういったトコだとどうしても悪口が多くなるもんだし。だから朝桃沢チャンの話も聞いてみたいんだよね」

「……本人が、もういい、と諦めているとしてもか？」

「どんな事情があるのか分からないけど、思ってることはちゃんと言わないとみんなに伝わらないじゃん。全て諦めたみたいにだんまり決め込むなんて、アタシは嫌、かな」

「っ」

山吹のつぶやきに、いつかリアに言われた言葉を思い出す。

『実際に会ってやりとりしないと、分からないことだってあるしな。竜胆だって、俺が強

引に付いてくって決めたときは渋い顔してたけど、いまはそんなに悪くないだろ？」

「む……」

確かに、橘の仕組んだ荒療治のおかげで、初対面の山吹ともいつの間にか抵抗なく話せるようになっているし、二人とのやりとりをどこか心地よく感じている自分がいることも事実だ。……素直に認めるのは、少し癪だが。

「たとえ相手が望んでなかったとしても、俺は自分がやるべきだと思ったことをやるぜ。迷惑がられたり恨まれたりしたとしても、やらずに後悔するよりよっぽどいいからな」

言いようによっては迷惑きわまりない宣言だが、こうも悪意のない笑みを向けられては厳しない。僕は、小さく溜息を吐きながらつぶやく。

「……分かった。とりあえず一度、胡桃沢の話を聞いてみよう」

「おっ、さすが親友！」

いつの間に親友にまでランクアップしたのだろうか　僕はスマホに目を向け考える。

「そうなると……、どうやってこの『壁』を突破するか、だな」

試しに〈掲示板〉から呼びかけてみたが、胡桃沢からの反応はなし。山吹の話だといまま一度も書き込んでいなかったというし、確認すらしていないのかもしれない。こちらでフロアを操作して道を作るという手もあるが、当然胡桃沢からの妨害があるだろう。操作回数の制限は残り二回。できる限り確実な方法を採りたいが……。

「――……そうか、そのTがあったか」
「おっ、何か良いアイデアがあるのか？」
待ってましたとばかりに声を上げる橘に、僕は大きなうなずきを返した。

「――二人とも、準備はオッケー？」
「ああ」
「こっちも問題ないぜ」
手順を再度確認した山吹が、僕らのうなずきに応えてスマホを構える
「よーしー　パズルゲームの無課金女王と呼ばれたアタシの本気を見せてあげるわっ！」
……何だ、その取ずかしい二つ名は
「ほらほらっ、竜胆クンも早くー」
「あ、ああ」
出足から調子が狂ったが、気を取り直しスマホ片手に大きく深呼吸する。
「いまだよっ！」
山吹の合図で、目の前に出現した扉の向こうへ、橘とともに身体を滑り込ませる。
「！」

部屋の中央に小型のモンスターが一体のみ　……よかった、これならいけるっ！

「――〈氷雨〉！」

敵の動作よりも　構築く、起動した魔法アプリによる氷の礫が降り注ぐ。

「――〈炎拳〉！」

続けざまに橘の攻撃が叩き込まれ、あっけなく光と消えるモンスター。

「……来たっ！」

タイミング良く、続く部屋への道が山吹のパネル操作により繋がり、ピッタリのタイミングで正面の扉が開く。

――山吹にはその驚異的なスマホ操作速度を見込んで、別の部屋を動かしながら胡桃沢の気を逸らしつつ、それを隠れ蓑に少しずつ僕らが進む道を作るという大変な作業を任せている。胡桃沢にその意図を気づかれないように、部屋を繋げる時間はあらかじめ決めておいたタイミングに数秒だけという状態なため。それまでに部屋ごとのクリア条件を満たしておく必要があるのだ。

「橘も急げっ！」

「お、おうっ！」

すかさず次の部屋へと飛び込むが、その部屋に敵モンスターの姿は見当たらない。

「――コード探索タイプか」

ぐるりと周囲を見回し、怪しい壁にあたりをつけた後、橘と手分けして大急ぎでそれらを確認して回る。

「ここも違う…！っ！」

しかし、一向に目的のコードを発見することはできない。

「マズいな…時間がない」

時計を再確認した僕は、もう、四方の壁をしらみつぶしに調査する　それでもコードを発見することができない

「もしかして、壁じゃないのか……？」

しかし、床は磨き上げた大理石のように曇りなく輝いており、コードなどあろうものなら遠くからでも瞬時に発見できる状態だ。床でないとすると……、

「――天井か！」

反射的に空を見上げる。床と同様、汚れ一つ見当たらない天井の中央に、見覚えのあるコードが。しかし、もう時間がない

「竜胆！　とにかく走れ！」

「！」

橘の叫びに、彼の意図を悟った僕は、コードを無視して一目散に扉へと駆け出す。

――ピッ

背後から、橘がコードを読み取る音が聞こえた瞬間、目の前の扉が開く
「くっ……！」
開ききると同時に、瞬く間に溜まり出す扉の向こうへ、間一髪身体を滑り込ませる
「後は頼んだぞ！　竜胆！」
橘の声に応える間もなく、扉が固く閉ざされる。
「……は、はっ、はぁ……、なんとかゴールできた……な」
何で息をしながら大きく崩した体勢を立て直す　先ほどまでいた場所からここまでは、あと数部屋分は離れていたのだが、山吹が機転を利かせゴールの部屋自体を動かしてくれたのか、最短ルートでここまで辿り着くことができたようだ。
そして……。

「ど、どなたでございますか……？」

部屋の隅で丸くなり、頭を抱え震える姿が一つ。彼女こそ、この部屋に引きこもっていた張本人――胡桃沢ねねその人だった。

*

「わ、わたしを食べても美味しくないですよ……！　見ての通りのちんちくりんですしっ」
「いや、あのな……」
「ファストフードばかり食べてますから栄養も偏ってますですっ！　食べるならもっとぼんきゅっぼんで、ばいんばいんのおねーさんにしたほうが――！」
ガタガタと震えながら、こちらを見ることなくまくしたてる胡桃沢……食べるって、僕を何だと思っているんだ？
「あー、ちょっと落ち着いてもらえるか？」
「……え？」
胡桃沢の言葉が途切れたタイミングで声を掛けると、震えていた身体がピタリと止まり、おずおずと上げた瞳がこちらの姿を捕らえる。
「り、竜胆くん……ですか？」
「あ、ああ。よく知ってるな」
山吹もそうだったが、なぜひと言も話したことない別クラスの女子生徒が、僕のことを知っているのだろう。
「う、うう……」
怯えるようにして身体を縮こませる胡桃沢。
「あー……、怖がらないでもらえるとありがたいんだが――」

「ひっ…」

おずおずと顔を上げた胡桃沢が、僕の顔を見て固まる。……表情も血色もぎこちないことは自覚していたが、そこまでか。

「も、もう、放っておいてください…。わたしなんかに関わっても、ご迷惑をおかけするだけですから…」

再び頭を抱えながら震える胡桃沢。

「……大体の事情は把握してる。前にいたチームで揉め事があったんだってな」

僕は〈指示板〉で由次が晒た情報を伝える。

「もちろん、胡桃沢にも事情があっただろうことは分かる　できればその辺りを聞かせてもらえればと思ったんだが……」

「り、竜胆くん…」

必死に言葉を探しながら、なんとか彼女を傷つけないよう続ける。いっぱいいっぱいな僕の様子で逆に気持ちが落ち着いたのか、胡桃沢はおずおずと口を開く。

「わ、わたしは…」

――彼女のワンオフアプリ〈接続〉の機能『リンク』は、互いのスマホを閲覧・操作することが主目的ではないらしい。繋がったスマホ同士がアイテムやアプリを共有できるようになる、これこそが胡桃沢がチームメイトたちに力を使用した理由だったのだという。

「通常は自分にしか効果を発揮しないワンオフアプリも、〈接続・リンク〉で繋げば、他の方に力を及ぼせるようになるのですが……」

胡桃沢の意図に反して、チームメイトたちは可いのスマホを覗き見、知るべきでない情報を得たことで衝突した、というわけだ。

「み、皆さんに褒められて舞子に乗ったわたしが、余計なことをしなければ……、やっぱりわたしは、一人で研究室に閉じこもっているのがお似合いなんですぅ……」

自分を非難する元チームメイトたちに憤ることもなく、自らの非を詫び続ける胡桃沢。

「っ」

そんな彼女の姿に、周囲に責任を擦り付けるばかりで己を省みることがなかった自身に気づかされる。人と深く関わることを避け、自分からは何もしなかった僕と違い、胡桃沢は自ら真かれと思って行動を起こした。そんな彼女がこんなところに閉じこもり、悲しく怯えていていいはずがない。

「――そんなこと、ない」

「えぅ」

ぽつりとつぶやいた僕に、顔を上げた胡桃沢の瞳がぶつかる。

「仲間のためにとった行動なら、『やらなければよかった』なんて後悔するもんじゃない」

橘の言葉を思い出す。胡桃沢の気持ちも分かるが、勝手に他人のスマホを覗き見た彼女

たちにだって責任がある。仲間を思ってした、その気持ちを無下に否定すべきじゃない。
「で、でも、それが皆さんのためにならなかったのなら、わたしは……」
「……ほら」
自身のスマホを胡桃沢の前に差し出す。
「そのワンオフアプリ、僕にも使ってみてくれ」
「え……、い、いいのですか……？」
僕が大きくうなずくと、胡桃沢はおそるおそるといった様子で自身のスマホを掲げる。
「――〈接続・リンク〉」
胡桃沢のスマホから細い光の糸が飛び出し、僕のスマホと接続される　すると、ホーム画面に「ンンンン」という名前のフォルダアイコンが表示される
「そ、そのアイコンをタップすれば、わたしのスマホのホーム画面に切り替わります」
他にも、アイコン移動の要領でアイテムの交換などができるらしい。
「繋いでいる間、胡桃沢の体力は消費するのか？」
「い、いいえ　ただし、わたしから離れてしまったり、一定時間が経過するとリンクが切れてしまいますが……」
「……そうか。じゃあ、このままでいいな」
「え？」

ぽかんとした表情を浮かべる胡桃沢。僕がどう説明したものか、戸惑っていると、

「おいおい、亀胆。ちゃんと言わなきゃ分からないぜ？」

「黙って行動で示す、ってのもカッコイイけどねー」

突然現れた橘と山吹が、おどけた様子でからかいの声を上げる。

「……いつから見てた」

「なはは、実はほぼ最初からだ。胡桃沢ちゃんが亀胆に気を取られてるうちに、なんとか道が作れたからな」

自分の迂闊さに気まずさが増す僕をよそに、山吹は明るい調子で胡桃沢に話しかける。

「ねえねえっ、胡桃沢チャン！　アタシとも繋がろっ！」

「え、ええと、〈接続〉でリンクできるのは一台ずつまでで……」

胡桃沢はオロオロしながら、僕のスマホと繋がる為を見やりそう答えると、

「それなら、だいじょーぶっ」

自信満々でそう言い放った山吹は、一度僕と胡桃沢のリンクを切らせ、代わりに自分のスマホを彼女のものと接続する。

「いくよー、――〈装　飾（アクセサリー）、ロング〉！」

彼女のスマホから飛び出した光が花弁のように舞い散り、二人のスマホを繋ぐ扉へ吸い込まれていく。すると、光の蔓はみるみるうちに生長し、無数に分かれたそれぞれが、僕や橘のスマホをも接続していく。

「す、すごいです……！」

「どう？　これがアタシのワンオフアプリだよっ！」

山吹のワンオフアプリ〈装飾〉は、対象のアプリ効果を強化する『アップ』と、効果範囲を拡大する『ロング』の二種の機能を持っているらしい。通常は、自身のスマホに入っているアプリにしか効果を及ぼせないそうなのだが、胡桃沢の〈接続〉と組み合わせることで、自分以外のプレイヤーにもその力を発揮させたというわけだ。

「これでアタシたちは友達だねっ」

「え……？」

山吹の言葉に続いて、橘が笑いながら僕の肩を叩く。

「俺たちは、その元・チームメイトみたいに胡桃沢ちゃんを裏切ったりしない。……竜胆はそう言いたかったんだろ、な？」

「あ……」

こちらをジッと見つめる胡桃沢に、らしくない行動を自覚している僕は照れくさくなり、かすかに視線を逸らしながらつぶやく。

「……胡桃沢がよければ、僕たちと　緒に来ないか？」
胡桃沢は四人の繋がったスマホをじっと見比べ、諦めの笑みでうなずいた
「――はいっ、よろしくお願いしますです……」

＊

数分後　〈地図〉をジッと見つめていた胡桃沢が、ぱっと顔を上げる。
「　解けましたです！」
「ほ、本当か？」
「すげぇ……」
僕と橘は、呆然とつぶやく
〈地図〉を操作できるのは残り　回きり　絶対に失敗できないこの状況に活路を開いてくれたのが胡桃沢だ　彼女は５７６マスのパネルが並べられた地図を見て、制限時間内にゴールまでの道を作り出すための解法を、まるで詰め将棋のように算出してくれたのだ。
「操作は、山吹さんお・人で大丈夫ですか？」
「パズルゲームの無課金女王に任せときなってっ。あと、アタシのことはルミでいーよ」

：気に入ってるのか？　その二つ名

「は、はい。ええと、る、瑠美さん。全部で１０７回の操作が必要なのですが……」

「記憶力だけは自信あるから、そっちも問題なしっ！　なにせそれだけで定期試験を乗り切ってるくらいだからねー」

その事実も驚きだが……橘のことは忘れていたような気が

「いっくよー！」

胡桃沢から操作手順を一から教わった山吹が、大きく深呼吸し叫ぶ。次の瞬間、彼女の指が目にも留まらぬ速さでディスプレイ上を駆け回り、次々とフロアを動かしていく。

「ありゃ、間違えちゃった。……これくらいなら、問題なしっ」

蝸気にそうつぶやきながらも、指の速さは変わらないばかりか勢いを増していく。

「――よしっ、完成！」

結果、残り時間を10秒以上残し、胡桃沢が導き出した解法を全て実現してみせた。

「す、すげぇ……」

頼もしすぎる新しい仲間に、橘が口をポカンと開けながらつぶやく。……しかし、

「ん？　どしたの、竜胆クン？」

スマホを見ながら考え込む僕を、山吹が不思議そうに振り返る。

「いや、なんでも……」

言葉を漏す僕に、ふと何かに思い至ったように橘がつぶやく。
「……もしかして、例の彼女か？」
「……え？」
前に簡単な経緯を説明してあった橘と違い、何のことか分からず首をかしげる二人に、僕はリアのことを説明する。
「失格」直前に僕がしたアドバイスの通り、例の「鍵」をリアが発見し、第一階層をクリアしたのなら、彼女は第二階層のどこかにいる可能性が高いせっかく第二階層までの道ができたのに、僕の都合で皆の足を止めさせるわけにもいかない　仲間になったばかりの山吹や朋桜沢には申し訳ないが、ここから僕だけ別行動をとろうかと提案しようとした、そのとき、
「おいおい、悟妻わらず水臭いぞ」
そんな僕の考えを読んでか、小さな溜息が二つ重なる。
「そーだよ。人を探すなら人数が多いほうがいいに決まってるじゃん」
「で、ですぅ」
僕は、どこかで予感していたのかもしれない　彼らがそう返してくれることを
「……いいのか？」
おそるおそる尋ね返す僕に、三人は揃って気持ちの良い笑顔で応えてくれたのだった。

X

「これで5フロア目、か」

第二階層のスタート地点へと戻り、四度目となるフロアシャッフルを行った僕は、傍らの胡桃沢を振り返る。

「――〈接続・スキャン〉」

スマホを水平に構えた胡桃沢が、ワンオフアプリを起動させる。スマホから伸びた光の蔓は目の前の壁に接続し、木の根が水を吸い上げるようにフロア情報を読み取っていく。

「――見つけましたです！」

胡桃沢の持つスマホのマップに、僕らとは別のマーカーがポイントされる。彼女によると、これはフロア内に僕ら以外のプレイヤーがいることを示しているらしい。

スマホとダンジョンとをリンクさせ、様々な情報を読み取る〈接続・スキャン〉。僕も〈脱獄・クラノク〉を使って、同様のことできないか試してみたのだが、ダンジョン自体を対象としてしまうと、解析しなければならない情報量があまりにも多すぎて、とても体力がもたないことが分かった。〈接続〉は〈脱獄〉と違いターゲットに直接干渉することはできないが、情報収集能力だけでいえば格段に使い勝手がいいようだ。

「あ、あちらです」

胡桃沢の案内で、動きを止めているというそのプレイヤーの元へと向かう。
「彼女サンだといいねぇ、竜胆クン」
「山吹さん、彼女じゃないってば。まあ、そう上手いことはいかないだろ」
このダンジョン内には他にも多くのプレイヤーがいる。その中で偶然同じフロアにリアがいる確率となると、相当低いと言わざるを得ない。まだ15フロアも残っているのだ。
「い、いえ、おそらくこのプレイヤーは竜胆くんの彼女さんで、間違いないはずです」
「だから彼女じゃないって……え？」
なぜか確信をもってそう答える胡桃沢に、思わず固まる。
「え、ええと、次は……」
なんでも、学園から配布されているスマホには、学園名簿に紐付けられた識別番号が有効しており、〈接続〉の機能とリンクさせることで、マップに表示されているのがどのスマホを持つプレイヤーなのか分かるということだ。
「いま竜胆くんがお持ちのスマホは情報になかったのですが……」
現在僕が使っているのは、カスタムOSアプリを入れるため別途用意したスマホだ。
「この先にあるスマホ反応は、竜胆くんの識別番号と一致していますので……」
リアに持たせているのが、まさにその学園配布スマホだ。その反応が同じフロアにあるということは……。

「っ」

逸る気持ちに合わせるように、知らず知らずのうちに早足になる　しまいには駆け足となった僕を、橘たちは文句も言わず付いてきてくれる。

「ここか……！」

一本道の行き止まり、曲がり角の向こうにある小さな部屋に僕は身体を飛び込ませる

「リア……っ！」

――そこで待っていたのは、巨大な炎の竜に壁際まで追い込まれ、まさに絶体絶命なリアの姿だった。

*

「――ハルトっ！？」

僕に気づいたリアが、喜びの笑みを浮かべる。しかし、その表情は目の前の脅威に一瞬で元に戻ってしまう。

「――〈炎球〉！」

彼女のロッドから飛び出した炎は、ドラゴンの全身を覆う炎に吸収され、かき消えてし

まう。炎系魔法を得意とするリアにとって、最も相性が悪い敵のようだ。
「くっ……（脱）」
「――だ、だめぇーーっ！」
すかさずワンオフアプリを起動しようとした僕に、失格時のことを思い出したのか、リアの悲痛な叫びが重なる。
「――〈走写・フォーカス〉！」
僕の背後から飛び出した橘が、ドラゴンに向かってシャッターを切る。
「チッ、失敗か！」
しかし、上手くフォーカスが合わないためか、光の矢は明後日の方向へ飛んでいってしまう。しかし、敵の注意をこちらに向けさせることには成功したようで、ターゲットを変えたドラゴンが口から吐いた炎が、真っ直ぐ僕らのほうへと向かってくる。
「――〈装飾・アップ〉！　――〈集中・水魔〉！」
山吹が〈装飾〉の力で威力をアップさせた魔法アプリを起動。ドラゴンの表皮を覆う炎と氷の礫が激しくぶつかり合い、たちまち周囲が霧のような靄で覆われる。
「――〈接〉！　はわわっ」
ドラゴンの情報を「スキャン」で読み取ろうとした胡桃沢だが、霧で視界が悪くなった影響でターゲットを捉えることができない。〈遠写〉で遠撃を狙おうとする橘も同様だ。

「こ、ごめんっ」

〈装飾〉の思わぬ余波に慌てる山吹。しかし、ドラゴン自体の足止めには成功しているため、彼女を責めることはできない。

「童胆！」

前線でドラゴンを牽制しながら、橘が叫ぶ。

「――指示役をやれ！　お前ならこのメンバーをまとめられるだろ！」

「っ！？」

突然のことに戸惑う僕を振り返り、橘がニカッと笑う。

「う、うんっ。童胆クンなら、良い作戦を考えてくれそうだしっ」

「わ、わたしもできるだけのフォローはしますです……！」

山吹と胡桃沢も、こちらを頼りにするように大きくうなずく。そして、

「――ハルトっ――」

霧の向こうから聞こえるリアの呼び声に覚悟を決める。――僕が、やるしかない。

「橘！　魔法アプリは残っているか！」

「〈炎魔法〉なら、一つ残ってるぜ！」

徐々に霧が晴れてくる中、ドラゴンの咆哮が辺りに響き渡る。

「数分でいいから、ヤツの動きを食い止めておいてくれ！　表面の炎を避けて直接敵の身

体を狙うんだ！」

「了解！　――〈炎拳！〉」

再び活動をはじめたドラゴンに対し、橘は軽い身のこなしを生かして死角へ移動しながら、ピンポイントで敵の本体へ拳をぶつける。その間に、僕は山吹と胡桃沢を集める。

「二人とも、魔法アプリは残っているか？」

「ごめんっ、さっきので全部僕っちゃったみたい」

「わ、わたしも残ってません……も、申し訳ないです」

「いや、謝る必要はないさ」

残っているのは僕のスマホにある〈風魔法〉一つ　それと各々のワンオフアプリだけ。

「……よし、この作戦でいくか」

即座で思いついた策を、二人に伝える。

「……って感じなんだが、できるか？」

「うんっ、頑張ってみるよ！」

「は、はい、絶対に成功させてみせるです！」

頼もしい返事を返してくれる二人にうなずき返す　再びドラゴンを振り返ると、〈炎拳〉の効果が切れたらしい橘が、なんとか体勢きのみで敵と対峙しているのが目に入る。

「早速いくぜっ、胡桃沢！」

「は、はいです！　――〈接続・リンク〉！」

朝桃沢のスマホから出現した光の蔓が、僕と山吹のスマホを繋ぐ。

「山吹！」

「おっけーっ！　――〈装備・アップ〉！」

光の化身が鳥を伝わって僕のスマホに降り注ぐ。すると、唯一残っていた〈風魔法〉のアプリアイコンが光り、表示が〈暴風魔法〉へと変化した。

「橘、下がれ！」

「おうよっ！　――〈連写・フォーカス〉っと！」

置き土産のごとく〈速写〉で相手の体力を削り取った橘が、こちらに戻ってくる。

「――〈暴風雨〉！」

スマホのカメラフレーム内がドラゴンだけになったのを確認した僕は、すかさずパワーアップした魔法アプリを起動。画面上のドラゴンを指でスクラッチする。たちまち巻き起こった激しい竜巻に呑み込まれ、ドラゴンが雄叫びを上げる。

「竜胆、あれって本体にダメージが通ってないんじゃないか？」

橘の言う通り、ドラゴンは再び足止めされたことに苦立っているようだが、ダメージを受けている様子もない。竜巻はドラゴンの表面を覆う炎を吹き飛ばしているだけだ。

「いや、あれでいいんだ」

あらかた炎が消えたところで、僕はドラゴンの向こうにいる少女と視線を合わせる。
「――リア！　いまだ！」
「ええ！」
言わずとも僕の意図を汲んでくれたらしいリアは、ロッドに意識を集中させ、叫ぶ。
「――　爆炎球（ボム）！」
いままでにない規模の炎球がロッドから飛び出し、ドラゴンに襲いかかる。暴風雨を巻き込み特大の炎柱へと姿を変えたそれに呑み込まれ、ドラゴンから苦悶の絶叫が上がる。
「くっ、」
ロッドを必死で構えるリアの表情が苦しげに歪む。
「！　橘！」
「おうよっ！　――（魂、写・アルバム）っと！」
先ほどドラゴンから簒奪したばかりの体力を使い、橘がリアの体力を回復させる。
「リアっ、頑張れ！」
「はあああああああああああああ――――――――っっっ！」
一段と勢いを増した炎はドラゴンの全身を包み込み、その全てを焼き尽くす。

「や、やった……！」

数倍にも長く感じた刹那の後、敵の姿は跡形もなく消滅――辺りは静寂を取り戻した。

――ハルト……っ！」

疲れを感じさせない勢いで駆け出したリアが、そのまま僕へと飛びついてくる

「本当に、本当にハルトなのよね？　そっくりさんとか幽霊じゃないわよね？」

「あ、ああ　正真正銘、竜胆遥人本人だけど……」

艶やかな髪が舞い、ほのかに甘い香りが鼻腔をくすぐる。柔らかな感触が全身を包み、全裸に気恥ずかしくなる僕だったが、

「ぐっ、ちょっ……」

そのまま僕の胸ぐらを掴み上げたリアは、端整な顔を接近させながら叫ぶ。

「馬鹿っ！　あんな風に急にいなくなって、残されたほうの身にもなりなさいよ！」

「ご、ゴメン……」

「ゴメンで済んだら騎士団はいらないわよ！」

「き、騎士団？」

激しい剣幕に僕がたじろいでいると、眼前にあるリアの瞳がじわりと潤み、胸ぐらを掴

んでいた手がふっと緩む。

「……本当に、心配したんだから」

そのまま、ぽすっと僕の胸に額を押しつけたリアが、ぽつりとつぶやく。再び彼女の香りに包まれ、体温が上昇するのを自覚する。

「え、えっと、リア……？」

「ぐすっ、何よぉ……」

潤んだ瞳を見せたくないのか、さらに強く寄り添ってくるリア。こういったことに不慣れな僕は、彼女の身体を抱きしめることもできず両手を宙に彷徨わせる。

「「ニヤニヤ」」

「は、はわわ……」

いつの間にか僕らから距離を置くように離れていた三人、橘と山吹は温かい笑みを浮かべ、胡桃沢は恥ずかしげに顔を赤らめながらチラチラとこちらを見やっている。

「ええと、リア？　ちょっと野次馬の目が……」

「う、うるさいっ……、ちょっとの間、黙って胸を貸しなさい！」

「……ハイ」

涙声でそう呟くリアに、観念した僕はおそるおそるその手を彼女の頭にやり、壊れ物を扱うように美しい髪をゆっくりと撫でたのだった。

XI

ドラゴンを倒し第二階層をクリアした僕らは、LaVいわく「ダンジョン唯一の充電スポット」という魔方陣が設置された第二階層スタート地点で、しばし身体を休めていた。

「――図書界から来た、リア・サルビアよ。みんなよろしくね」

改めて自己紹介するリア。聞き慣れない【図書界】という単語に、皆一様にひっかかりを覚えたようだが、このおかしな【LAVIRINTH】世界に大分慣れてきたのか、各々自分なりの理由を付けて納得してくれたらしい。

「ねえねえっ、さっきびあチャンの持ってるソレ、何かな？」

「ロッドのこと？　これはね……」

リボンが巻かれたロッドについて尋ねる山吹に、リアが自身の魔法について説明する。

「俺たちでいうスマホみたいなもんか。回数制限なしで使える魔法があるのは便利だな」

「で、でも、〈掲示板〉とか〈地図〉が使えないのは、少し不便な気が……」

「うん。だからハルトがこれを貸してくれたの。まだ〈撮影〉しか教わってないけどね」

リアは懐からスマホをゆっくり取り出し、大切そうにその表面を撫でる。

「大切な個人情報が詰まったスマホをぽんっと貸すなんて、竜胆クンもやるねー」

「え、えっ、やっぱり現世界でも珍しいことだったの……？」

「あー、まあ、気にしないでくれ」
俯かに頬を染めるリアに、僕は頬を掻きながらバツの悪い笑みを浮かべる。
「そ、それよりも、せっかくですから〈掲示板〉の使い方をお教えするですっ」
照れる僕に気をつかってか、湖桃沢が話題を変えてくれる。
「アタシも手伝ってあげるよっ！」
「あ、ありがと」
リアを両側から挟むようにして、山吹と湖桃沢があれこれとアドバイスを始める。女性二人の慌しい様子を眺めながら、「橘」がつぶやく。
「随分と気前が良いじゃないか。……惚れたか？」
ニヤニヤと含み笑いをこちらに向ける橘
「……いや、どうだろ？」
改めて、楽しげにスマホを弄るリアを見やる。見た目は文句なしの美少女だし、意見がぶつかり喧嘩にもなったが、僕にない発想力や意志の強さは、いまでは好ましく感じてもいる。しかし、これを「惚れる」と言うのかは、正直よく分からない。
「まあ、気まぐれだよ。彼女も喜んでるみたいだし、それでいいじゃないか」
「ま、俺がとやかく言うことでもないか」
そんな風に暢気し合っている間にも、二人のレクチャーは続いているようだ。

「とりあえず、いまのが〈掲示板〉の基本的な使い方かな。他はいいの？」
「魔法はこっちのロッドがあるし、地図もいまのところ必要には感じてないから」
「それならいいですけど……、じゃあ早速何か書いてみるです？」
「そうね……」
一瞬、こちらをチラリと見たリアが、何やら声を潜めて二人と相談し出す。何のことかと首をかしげていると、由吹がにやりと笑い、声を上げる。
「竜胆クーン、〈掲示板〉を見てみなよー」
「ちょ、ルミ！」
慌てた様子で由吹の口を塞ぐリア
「〈掲示板〉？」
言われた通りアプリを立ち上げてみる。すると……、

【ニシ、あのときたすけてくれてうれしかった。ありがと。はると】

いかにも不慣れな様子が伝わるぎこちないメッセージ。顔を上げると、そこにはあらぬ方を向いて顔を赤らめるリアの姿があった。
「こ、こっち見ないでよ……」

「あ、ああ」

こちらも少し顔が赤くなるのを感じつつ、言葉を続ける。

「えーと、リアの気持ちはありがたいんだけど……」

「な、何よ……」

僕は、彼女がしでかしてしまった重大なミスを指摘する。

「――こういったメッセージは、非公開のDMで送って欲しかったなー……と」

「……でぃーえむ？」

キョトンと首をかしげるリア。――公開・非公開の違いがよく分かっていない彼女は、このメッセージを今プレイヤーが閲覧できるタイムラインに投稿してしまったのだ

「……ああ」

案の定、タイムラインがにわかに沸き立つ。

【SHIN：ハルトって誰？】

【Mai：ハルトくーん、Shinさんがこう言ってますよー　何か表信したらどうですかー？】

【Hana：ひらがなのメッセージって、なんか可愛いね】

【Koo：ラブいオーラを感じて来ました】
【Kou：こっちは、人寂しく迷路を彷徨ってるってときに、一体どこのどいつだよ…】
【Ran：リア充爆発しろ】
【Kota：バカップルに天誅を】
【Jun：上手いこと言ったな。まさに「リア」充だ】

無言で〈掲示板〉を終了させ、天を仰き大きく溜息を吐く

「え、え？　どうかしたの？」

事情が分かっていないリアに、このやるせない気持ちは理解できないだろう。

「アハハっ、ぼっちさんからいきなりリア充デビューかー　豪胆クンやるねー」

「さすが俺の親友　やるときはやるヤツだと思ってたぜ」

「お、おめでとう…です？」

三者三様で好き勝手に言う仲間たち

「……はぁ」

気恥ずかしいようなむず痒いような、なんともいえない気分だが……不思議と不快ではない。そんな心境の変化に密かに驚く。

「……何よ、じっとこっちを見て」

「……はは」

わずかに染めた頬をぷくっと膨らませたリアに、思わずこちらも笑みがこぼれる　思えば、この変化のきっかけは、彼女との出会いだったのかもしれない。

「竜胆クンって、話してみると結構オモシロイよねー、正直ビックリしたよ」

「？　ハルトって、普段どんな感じなの？」

「誰かと話してるとこ一度も見たことなかったからねー、一部の女子からは『影があってカッコイイ』なんて言われてるけど、人狐の子は怖いヒトだと思ってるんじゃない？」

「む」

「わ、わたしも、もっと怖い方だと思ってたです……」

「でも、話してみてよかったよ、結構いいソッコミも持ってるみたいだしねー。アタシの見立てでは、あれはボケの才能もあるねっ」

「つっこみ。　ぼけ？」

「はわわっ、からかっちゃだめですよっ」

「アハハッ、冗談だってば」

二人寄ればなんとやら、初対面とは思えないほど、和気藹々と話に花を咲かせる女子。

同、……所々、気になる内容が混じっているが

「だってよ、怖いヒト」

「……そこまで怖がられていたとは、気づかなかったな」
「ま、周囲に壁を作って、何考えてるか分からないヤツの印象なんて、そんなもんだ。竜胆はもっと感情を表に出すことを覚えた方がいいぜ」
リアと同じことを指摘され、言葉に詰まった僕は、ふてくされたように言葉を返す。
「……橘と足して二で割ったら、ちょうどいいのかもな」
「なはは、そんな感じのツッコミでもいいんだぜ？」
わっはっはと豪快に笑いながら、僕の背中をバンバンと叩く橘。
「どうせなら、あの中に混ざってきたらどうだ？」
「……まだ、僕にはハードル高いかな」
良い感じに盛り上がっているところに水を差しても悪いと、僕が苦笑していると、
「うーん、まだ距離があるんだよなー。……よしっ、おーい！」
突然立ち上がり、二人をこちらに呼び寄せる橘。
「どしたの？　橘クン」
「お近づきの印に、みんなで記念撮影でもどうかと思ってな」
「きねんさつえいぃ」
「あー、さるびあチャンは分からないか！　でも、いいアイデアじゃん、橘クンっ」
「は、はい　思い出を残すのは、とても良いことですぅ」

「だろ？　ほら、童部もこっちこいよ」
あれよあれよという間に、なぜかリアとともに中央に座らされる。
「おっ、ちょうどいいカメラ置き場があるな。ここにセットして……と」
壁の窪みにスマホを置いた橘が、設定を終えこちらに戻ってくる。
「あと十秒くらいだ。みんな、ちゃんと顔作っておけよー」
「わわわっ、ど、どうしよう……」
「あんまり慌てると変顔になっちゃうよー、さるびあチャン」
「あ――、もうそろそろみたいですぅ」
シャッタータイミングを知らせる点滅が徐々に早くなり、皆がそわそわとし出す。
「はいっ、チーズ―」
橘の合図とともに、カシャッというシャッター音が響く。すると、
スマホから見覚えのある光の矢が飛び出し、橘を除く僕ら四人の胸に突き刺さった。
「「「「……え？」」」」
そして、僕とリア、山吹と胡桃沢の四人は――文字通り、固まった。
「ん？　みんなどうしたんだ？」

いつまでもピクリとも動かない僕らを訝しげに見た橘だったが、
「あ」
何かに気づいた様子で、慌ててスマホの元へと駆け寄る橘。……まさか、
「……スマン、〈連写〉になってたわ」
「「「……オイ」」」
唯一動く口から、鋭い突っ込みが同時に飛び出し、橘に突き刺さる。
「いやー、まさか味方にも使えるとは思わなかったな！　まいったまいった」
「……いいから、早く元通りにしろ」
橘によると、〈連写〉の力は「手振れゼロ」で撮影に成功した場合に限り、対象を強制スタン状態にすることができるらしい。今回は、少し離れたところから撮影していたおかげか、僕々の体力消費はそれほど大きくないそうだが……、
「なははっ、せっかくだから、このままで一枚どうだ？」
「「「……」」」
「……ホント、すいません」
注がれる無言の圧力に、橘は額を地につける勢いで土下座したのだった

*

「見て見て、さるぴあチャン。〈掲示板〉の冷やかしも、すっかり収まったみたいだよ！」
「そ、そうなの？　よかったぁ……」
「全プレイヤーのメッセージが同じタイムラインで流れていますから、なかなか一つの話題がずっと続くことはないと思うです」
気を取り直すようにスマホレクチャーを再開した三人。
「――――：反省してます」
現在、橘は階として壁際で正座中だ。
「…はは…」
このダンジョンに来てから得た仲間たちを改めて見やり、小さな笑い声が口から漏れる。
よく分からないうちに巻き込まれた、この奇想天外な「La'VRENTH」の世界。思わぬ形で良き出会いをもたらしてくれたこのゲームに、僕は感謝すら覚えていた。
そう、このときまでは。
――ピピッ
「「「？」」」
皆のスマホから一斉に通知音が鳴る。いまのは〈情報〉アプリの……だよな。

「何か、新しいメッセージか……？」
急いで〈情報〉アプリを開く。
【菊池裕也（KYY）　死亡】
「……死亡？」
聞き慣れない不穏な単語を訝しんでいると、
「！　ちょっとみんな、〈掲示板〉を見て！」
突然、山吹が皆をひそめ声を上げる。なんのことかと、僕は〈情報〉アプリを閉じ、〈掲示板〉に切り替える。
【naru：ね、ねえ、いまの通知見た？】
【Ban：菊池って、確か草田や百合原たちと一緒のグループじゃなかったか？】
【Assy：ああ、ちょうど第三階層で全員失格になったところでな。みんな揃ってから今後の方針について話し合おうと思ってたんだが……】
【naru：なぜか知らないけど、菊池君はスマホだけが戻ってきたのよ】
【Assy：スマホの画面には『PLAYER UNKNOWN』って表示されているな】

【kei：どういうことだ？　まさか、さっきの「死亡」って……】
【Aggy：……菊池は、今回の『失格』で残機がゼロになっていたはずだ】
【Bun：おいおい　まさか本当に『死亡』しちまったんじゃないだろうな……】
【nami：やめてよ！　そんな縁起でもないこと言うの】
【kei：でも、誰も菊池がどこに行っちまったのか知らないんだよな？】
【nami：も、元の図書館に戻ったんじゃないかな？】
【Aggy：俺たちじゃ、確かめようがないな】
【Bun：な、なあ、このダンジョンって一体どこにあるんだ？　まさか、あの図書館の地下とかじゃないよな？】
【Aggy：そんな施設があるなんて話は、聞いたことがないぞ】
【MIHO：でもよ、俺たちみんなあの図書館にいたじゃないか　いつの間にか眠らされかして、連れてこられたんじゃないか？】
【Aggy：仮にそうだとしても、魔法だのモンスターだの仕組みに説明が付かないじゃないか】
【MIHO：じゃあ、何がどうなってるっていうのよ！】
【Aggy：……知るかよ。俺ばかりに聞かずに、もっと自分の頭を使えよ】
【MIHO：！　そんな言い方しなくてもいいじゃない！】

【Ken：お、おい、葉田も少し落ち着けよ】

【ハヤシ：なんだよ、リーダー気取りだった葉田サマも、お手上げってか？　そんなことだから、グループ内の揉め事も解決できずに全滅しちまうんだよ】

【Nagi：林、お前――】

【Ruby：ね、ねえ、こんなところで喧嘩するのはやめようよ…】

僕らはタイムライン上でやり取りされるメッセージを無言で見つめる。これまであまり（掲示板）に書き込んでいなかった連中も、ここぞとばかりに書き込み出したようで、山吹の必死なフォローもむなしく、皆積もりに積もった不安を一気に吐き出し始めている。

――ピピッ

そのとき、皆のスマホにとてからのメッセージが届く。

【Luy：ゲームが開始してからしばらく経ちますが、攻略は遅々として進んでおりません。由貴、ガッカリです】

――勝手に失望されても困るんだが。

【Luy：アナタたちには、攻略に対する真剣さが足りないと判断シ、これまで明らかにさ

れていなかった、「死亡」のルールについて、説明させていただくことにしマス】

「！」

まるで〈掲示板〉がその話題で荒れ始めていることを見計らったように、Luxの解説が始まる。

【Lux：アンテナ表示で確認できるプレイヤー保有の残機は全部で四ツ。レアドロップアイテム〈復活〉で回復も可能ですが、原則【天格】によって、一つずつ減少する仕組みになっていマス】

それは既に知っている　問題は……その後だ。

【Lux：残機がゼロになりますと、プレイヤーは「死亡」となり、ゲームの参加資格を失いマス。……そして】

――続いて明らかになった事実に、おそらく全プレイヤーが愕然とした。

【Lux：「死亡」したプレイヤーハ、迷宮内を含む全ての世界カラ――存在を抹消されマス】

*

「なっ……!?」

淡々と告げられた、ここからのあり得ないメッセージ。何度読み返してみても、本能が理解を拒むようにその内容がまったく頭に入ってこない。

「お、おいっ、これって……」

「え、え、どういうこと……？」

「「……」」

橘やリアも混乱の最中にいるらしく、言葉にならない戸惑いを口から漏らすのみ。由吹と胡桃沢に至っては、言葉も発せず呆然とスマホを見つめている

【name：え？　存在を抹消って、どういう意味？】

【kei：「死」って、本当に死んだっていうのか……？】

【pan：冗談だよな？　そんなの、それこそゲームかマンガの設定じゃねえか……】

（掲示板）にも、同様の混乱を見せている　そんな中、今度はタイムライン上にここでの書き込みが表示され始め、説明が再開される。

【ここ：これハ、バーチャル・シミュレーションの類でハ、決してありませン　皆サンモ、

薄々ト、身をもって感じていたのではありませんカ？】

【Ban：そんなこと言ったって、モンスターとか魔法とか、現実じゃあり得ない非科学的なもんばかりじゃないか！】

【Luv：（←Ban　このダンジョンハ、あなた方の世界ともう一ツ、理を異にする別の世界の要素を繋ぐことで形成されていますのデ】

【Ken：別の世界って……、異世界ダンジョンとでも言うつもりかよ？】

【Luv：（←Ken　まったくの異世界ではなク、あくまで延長上にある『拡張世界』ガ、より正しい認識デス。アナタ方の住む世界の延長――にある世界――それがこのダンジョンデス。魔法やモンスターが存在するダンジョンデ、スマホが繋がル。そのことガ、何よりの証拠デス】

【Ayy：「存在を抹消」ってのは、具体的にどういう意味だ？】

【Luv：（←Ayy　ここは現実でも仮想でもなイ、もしくはそのどちらでもある融合世界アナタ方プレイヤーを構成しているのハ、この世に自身を定義すル、より純粋な『存在』そのものデス。ここでの体力消費ハ、そのまま『存在の希薄化』へと繋がると考えていただけれバ、結構デス】

【Ban：い、な、何を言ってるのか、さっぱり分からないわよ！】

次々と明らかにされていく『LEVYRINTH』の秘密。Levの言うことを、全て「はいそうですか」とそのまま納得できるわけじゃないが、ここに来てからずっと感じていた違和感のいくつかが、これで腑に落ちたのも事実だ。要素の融合、という表現は、このファンタジーとテクノロジーが複雑に絡み合う奇妙なダンジョンの有様を、的確に言い表している。

そして、Levの言う「理を異にする別の世界」とは、おそらく……、

「ここは、現世界と図書界を融合した世界ってことか……？」

「つー！」

顔を上げたリアと目が合う。ダンジョンに繋がった二つの世界から招かれたプレイヤーたち。図書界側のプレイヤーがリアだけなのも、何か意味があるのだろうか。

【Lev：以上を踏まえて、より真剣にゲームをプレイしていただくことをおすすめしマス。皆さんの鋼気溢れるプレイに期待しておりマス】

そんなひと言とともに、Levのメッセージは終わる。

「「「「……」」」」

呆然と、ただただ無言で自身のスマホを見つめ続ける僕たち。

「――……どうすりゃいいんだよ」

静寂に包まれた部屋の中央、小さく叫き出された橘のつぶやきは、全プレイヤーの気持ちを代弁しているかのようだった……。

XII

――Eveの書き込みが投下されてから、数日が経過した。

プレイヤーたちの動揺を表すように、〈掲示板〉は戸惑いの声や悲痛な叫び、助けを求める者や現実逃避を試みる者たちの書き込みによって混乱を極め、もはやコミュニケーションツールとしての体を成さなくなってしまっていた。一時は〈掲示板〉への書き込みが一斉集中したためか、アプリ自体の動作に不具合が生じる場面すらあったくらいだ。

動揺は、そのままダンジョン探索における振る舞いにも繋がり、怯えや自棄によるミスが多発。新たな「死亡者」が発生する事態となり、その知らせがさらにプレイヤーたちの動揺を誘うという悪循環を引き起こした。次々とスタート地点に転送される「PLAYER [ZXXXOCHE2]」と記されたスマホは、まるで墓標のようにプレイヤーたちの焦燥感をかき立て、さらなる混乱を生み出した。ダンジョン内では食事や睡眠を必要としないのだが、それが逆に、気を紛らわす手段すらプレイヤーから奪い、ただひたすらにこの現実と向き合う責め苦を課した。Eveからは、なおも執拗に探索を煽るメッセージが送られていたが、逆効果であることを悟ったのだろうか、しばらくするとそれもピタリと途絶えた。

それからさらに数日、現在の僕らは、……

「おーい、こっちこっち」
あらかじめ決めておいた集合場所で、僕とリアを迎える橘。
「収穫は攻撃系の魔導書が一冊と〈回復〉の魔導書が二冊だな。そっちはどうだった？」
「こっちは一冊だけだったけど、体力を全快させる〈全回復〉を見つけたよ」
「すげえじゃねえかっ！　どこにあったんだ？」
「あるフロアで、隠し部屋をリアが見つけてね　その奥にあったんだ」
「ふふん。私の魔法、攻撃以外にも役立つのがこれでわかったでしょ」
「ははは……」
得意顔を浮かべるリアに、思わず苦笑がこぼれる。……怪しい壺を見つけたからって、いきなり炎をぶっ放すのはどうかと思うが
「避難場所に体力がほとんど残ってないプレイヤーがいるんだが、ソイツに〈回復〉を、回復魔法を持っていってもいいか？　いま向こうで切らしてるらしいんだよ」
「構わないが……急で理由でもあるのか？」
「ソイツが出えるせいで避難所の雰囲気が大分悪くなってるらしくてな　変に暴走し出すプレイヤーが現れないよう、早めに回復してやったほうがいいだろ」
お調子者のように見えて、実はこういった気遣いに長けている橘　元来のリーダー気質というか兄貴肌な彼が、殺人前突如として発揮した行動力に、僕は改めて驚かされた。

――第一階層すらまともに突破できないほど混乱がピークに達したそのとき、彼をまとめるべく立ち上がったのが、いま目の前にいる橘だった

橘はまず、第一階層のスタート地点である大広間を緊急の避難所とし、恐怖心からまともに探索できなくなったプレイヤーたちを集め、自らは皆の先頭に立ちダンジョンの調査に乗り出した。調査結果は避難所にいる皆にも共有され、徐々にではあるが着実に進んでいく探索に勇気づけられた一部のプレイヤーが、後方支援として比較的安全なフロアでアイテム回収などを行ってくれるようにもなっていた。

僕は、そんな橘に請われるままに、彼のやりたいことを最も効率的に、かつ効果的に実現する策を考えていった。避難所の設置や、攻略に先んじて各フロアの調査を徹底する案なども、僕が提案したものだ。現在は、前線に立つ橘をフォローすべく、リアとともに調査組に参加している。

「それなら〈全回復〉も持っていてくれ。いっそのこと全快してやったほうがいいだろ」

僕は手に入れたばかりの魔導書を橘に差し出す

「そりゃあそうだが……いいのか？」

「ああ。出次に〈装飾〉で協力してもらって、他のプレイヤーもまとめて回復しておくとより効果的なはずだ」

「なるほどな。じゃあ、ちょっとひとっ走り行ってくるから、ここで待っててくれ」

「向こうには、橘が行くことを〈掲示板〉で伝えておくよ」

山吹と胡桃沢には各々の得意分野を生かして、避難所のまとめ役や情報伝達役、後方支援組のサポートなどを任せている。ダンジョン調査の結果、モンスターの強さや仕掛けの難易度が同時に挑むプレイヤーの人数に比例する事実が分かったことも、戦闘があまり得意でない彼女たちを前線から遠ざけた理由の一つだ

「ああ、頼む」

魔導書を受け取った橘が、上層階スタート地点に繋がる小さな扉に消えるのを見送る。

「さて、と。いまのうちにスマホを充電しておこう」

「えっと、ここに置くだけでいいの？」

僕がうなずくと、リアがおそるおそるといった感じでスマホを壁際の台の上に置く。ここを橘との合流場所にしたのも、以前見つけた貴重な充電スポットがあるからだった。本来ならこちらを避難所にすべきだが、一部プレイヤーは怯えてスタート地点からも動きたくないという状態なのだから仕方がない。

「……ふう、大分アイテムも集まってきたな」

スマホには、僕ら自身や後方支援組が集めてくれた魔導書が、大量にアプリ化されている。フロア調査も、橘力モンスターが出現しないフロアを探すことが目的なため、集めたアイテムはほとんど消費せずに済んでいる。

「でも、実際に攻略段階になったら、戦いは避けて通れないでしょ？　どうするの？」
「……おそらく、最下層までの道中なら、敵と戦わなくてもいけると思う」
「え？」
僕のつぶやきに、リアが驚きの声を上げる
これまでの調査で、各階層ごとに最低一つはモンスターとの戦闘を必要としない純粋な謎解きのみのフロアが存在することが分かった。これらフロアだけを選んで攻略を進めていけば、リスクを最小限に抑えることができるはず、というのが僕の仮説だった。
「……なんだか、ズルしてるみたい」
「別にルール違反してるわけじゃないさ。ルール違反だとしても、そんな抜け穴を作っておくほうが悪いのさ」
「むぅ」
不満顔のリアだが、危険を避けたいという心情は一緒らしく、少し頬を膨らませるだけで納得してくれたようだ。
「お待たせっ、と。しっかりブツは渡してきたぞ」
避難場所から橘も戻ってきたので、僕は立ち上がり充電済みのスマホを手に取る。
「――よし、これで準備は整ったな」
僕と橘、それと念のためにリアの持つスマホにも、これまで集めた魔導書が容量限界近

くまでアプリ化されている。

「やっと、攻略再開か……ようやく退屈な作業から解放されるぜ」

「できる限りモンスターと遭遇しないフロアを選んでいくけど、構わないよな？」

「ああ　元々、俺が言い出したことだしな」

元々この作戦は、調査を開始する際、橘が「これ以上、誰も『死亡者』を出さない」と皆の前で宣言したことがキッカケで考えたものだ。プレイヤーたちに希望を生み出したあのひと言のおかげで思いついた。まさに救我の功名ともいえる策だった。

【これからは【少しでも、多くのフロアを攻略したほうが、イイコトがありますヨ。】などといったメッセージも届いていたが、安全に勝るメリットなどないはずだ

「もちろん、私も連れて行ってくれるわよね？　ハルト」

「……ああ」

一抹の不安は残るが、戦力は多いほうがいいし、何よりリア自身が留守番を拒むだろう

何かあったときは彼女だけでも……と、僕は縁起でもないことをふと考えてしまう。

「――よっしゃ、行くぞ！」

僕とリアは橘にうなずき返し、いよいよ本格的に攻略を進めるべく歩き出した。

――数時間後　入念な準備と調査のおかげで、目立った危機にさらされることもなくフロア攻略を進めることができた僕ら二人は、スタート地点にあったものと勝るとも劣らないほど巨大な扉の前にいた。

「ここが、第六階層か……」

この扉の先に、ダンジョンの最奥部――ラストフロアが広がっているはずだ

「やっぱり、ラスボスとかが待ってるのかねえ」

「……おそらく、な」

作戦通り、ここまで一度も敵モンスターと接近遭遇せずに辿り着くことができた。……とはいえ、このまま最後まで戦闘ナシで終わるほど、このゲームは甘くないだろう。この第六階層だけランダムフロアが存在しないというのも、考えるだに怪しい。

「よっしゃっ、行くぞー！」

「ええー　燃えてきたわ！」

「……」

勢気を常びる二人とは対照的に、僕の思考は急速に冷えてくる。――この胸騒ぎは、まだ見ぬ強敵や「死亡」に対する恐怖心からか。それとも……。

「いざっ、オープン！」

勢いよく扉を開け放った瞬　その瞬間――扉から放たれた光が僕らを包み込む。一瞬の浮

遊感の後、視界を覆う光がゆっくりと晴れていく……。

「「「!?」」」

目の前に現れた光景に、僕たちは揃って息を呑む。より精緻さを増したつくりの空間。大広間の周囲には、どこか別の場所に繋がる通路がいくつか接続されている――そして、

「あ、あ、あ……」

初めてモンスターと遭遇したときも、これほどの戦慄は覚えなかった　自然に震え出す全身と、口から漏れ出る言葉にならない声。いままで感じたことのない、自身の「核」へと強烈に迫る危機

「コイツは……反則、だろ」

圧倒的な威圧感とともに眼前に迫るのは――　色に分かれた風変わりなゴーレムに無数のモンスターを無理矢理繋ぎ合わせた異様な姿と、顔を背けたくなるほど不気味な叫声を放つ……超巨大合成獣だった。

「一人とも、何ぼーっとしてる！　先手必勝だ！」

「っ！」

橘がこちらを振り返り叫びながら、敵に向かって駆け出す。金縛りから解けた僕とリアは、慌てて彼をフォローすべく構える。

「――〈炎魔法（フレア）〉！」

炎魔法を起動した僕は、リアがロッドを振るのに合わせて、画面上に指で円を描く。すると、スマホから飛び出した炎の蛇が、ロッドから飛び出した炎と絡み合うようにして重なり、モンスターの周囲を回りながら動きを封じ込める。

「リアー　魔の維持を頼む！」

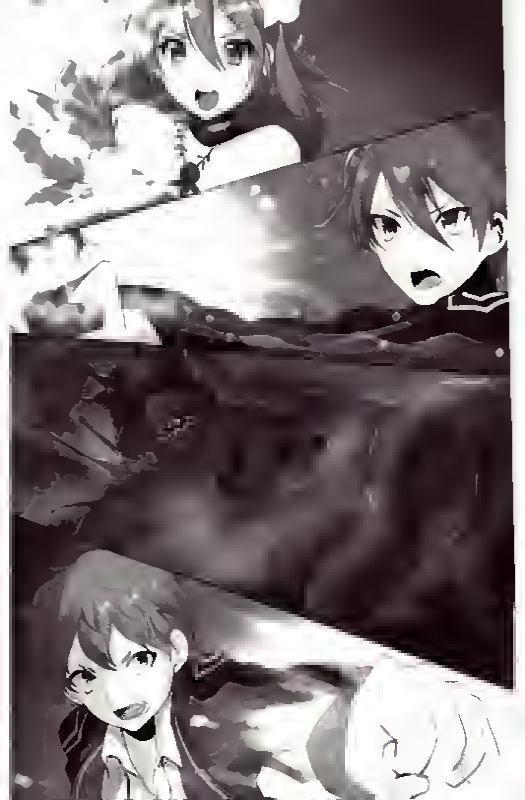
「分かったわ！」

僕は素早くスマホを操作し、氷魔法のアプリを起動　今度は画面に映るモンスターを塗りつぶすように指をスタッチさせる。

「――〈氷雨（ヒサメ）〉！」

モンスターを中心に氷の雨が降り注ぐ。無数の氷粒は炎の熱気によって瞬時に蒸発し、周囲に即席の濃霧を作り出す。

VIII



「橘っ、いまだ！」

「――〈炎拳〉！」

敵の死角から急接近した橘が、雄叫びとともに渾身の拳を振るう。予想外に素早い反応を見せたモンスターが、醜く変形した腕のいくつかで迎撃しようとするが、霧が視界を遮り、死角から襲いかかる橘の姿を捉えることができない。耳をつんざく轟音とともに、無防備となった敵の身体へ炎の拳がまともに突き刺さる――しかし、

「なっ……!?」

拳を当てた姿勢のまま、橘の瞳が驚愕で見開かれる。……まさか、まったく効いてないのか？

「!? マズッ……！」

空間全体がビリビリと震えるほどの雄叫びを上げたモンスターは、驚くほどのスピードで腕を横薙きにし、橘の身体にその全てがめり込む。

「がっ……!?」

「橘っ!?」

大きく横に吹き飛ばされる橘。したたかに地面へと叩きつけられた身体が一瞬光に包まれ、すぐに収まる ――いまのは、「実体」になったときと同じ光…？

「ぐっ……」

起きしがろうとする橘に、再度モンスターが迫る。
「っ！　リア！　援護を頼む！」
「ちょっ、ハルト！」
僕は急いで橘のもとへと駆けつける。
「おいっ、しっかりしろ！」
苦悶の表情のまま固まる橘を肩に抱え、この場からの離脱を試みる。――しかし、
「ぴ」
無数ある腕のひとつが振り下ろす無骨な棍棒が、いつの間にか眼前に迫っていた。
「くっ――！」
咄嗟に橘の身体を突き飛ばした僕の脳天に、鈍く重い衝撃が突き刺さる。
「か、はっ――」
頭の天辺からつま先まで、電気が突き抜けたような鋭い痺れとともに、激しい痙攣が襲いかかる。あまりの痛みに脳が一切の感覚を遮断し、全身の力が抜けていく。
「ハルトっ⁉」
リアの叫び声を遠くに聞きながら、徐々に視界が光の霧に包まれ……、

瞬の後、全身に感覚と力とが戻ってきた。

「……え？」

いま、確かにバッテリーメーターはゼロになり、僕は『失格』となったはず　それなのに、どうして……、

「――ふ、〈爆炎球〉！」

リアが放った特大の炎球がモンスターへと直撃し、辺り一帯が爆風と煙に包まれる

「撤退！　いまのうちに逃げるぞ！」

「あ、ああ……！」

いつの間にか立ち上がり、ダメージが嘘のように回復している悟とともに、その場を離脱する

「リアちゃんも、一緒に！」

「わ、分かったわ！」

途中でリアも合流し、最も近い通路口へと揃って飛び込む

「この広さじゃ追ってくるぞ！　とにかく走れ！」

「そ、そうだな……！」

「なんなのよっ、アレは！　私のとっておきの魔法でも、全然ダメージを与えられなかったわよ！」

先ほどの特大衆球でも、ヤソの視界を塞ぐ効果しかなかったらしい。あまりにも大きすぎる魔力差に暮れる暇すら、現状は与えてくれない。

「！　マズい、行き止まりだ……！」

急いで別の道に引き返そうした僕の目に、通路の先に存在する魔方陣が映る。

「もしかして……出口か！」

チュートリアルフロア・クリア時に出現したものと同じ、人が数名乗れるほど大きな魔方陣。僕らは無我夢中でその上に飛び込む。

「二っ！」

しかし、魔方陣はピクリとも反応しない。

ピピピッ

そのとき、僕のスマホから小さな通知音が鳴る。画面を見やると、自動的に起動した地図アプリがマッピング済みのフロアマップを表示している。二階に大部屋を配し、それらを規則性のない迷路が繋ぐ構造になっている全体図。その右上にある大部屋に、僕らの現在地を示しているらしい二つのマーカーが重なっている

【発動――〈縮地〉　移動ポイントをロングタップしてください】

「！　ワープ……だって」

ウダウダと考えている時間はない。背後からドスドスという地響きが迫る中、二人とうなずき合った僕は、マップ左下の大部屋をロングタップした。

「……？」

魔方陣から光が溢れ、あっという間に僕らを包み込む。一瞬の浮遊感の後、僕らは目的地である大部屋の中央へと移動していた。

「……助かった、のか」

現在地を確認した僕は、ひとまず危機を免れたことを確認し大きく息を吐く。

「はぁぁぁーーー……」

へなへなとその場に尻餅をつくリア。気づけば、恐怖と覚めやらぬ興奮とで膝がガタガクだ。

「さっきの魔方陣は、出口じゃなかったみたいだな」

橘のつぶやきに、僕は再度地図アプリを確認する。このフロア以外のマップが表示できないところから判断するに、あの魔方陣でフロア外へ脱出するのは不可能なようだ。

「これは……」

フロアを全体を取り囲むように赤い太枠が表示されているのが目に入る。いままでのフロアにはなかった真紅の壁。それはまるで、中にいる者を逃がさんとする檻に見えた。

「……え？」

ふと、アンテナ表示に目をやった僕は、驚きに固まる。

「残機が、減ってる……？」

先ほどまで三本あったアンテナが一本減って、残り二本になっている。

「俺のほうも。一機減って残り二機になってるな」

橋のつぶやきとともに思い出すのは、あのとき一瞬光に包まれた彼の姿。それに加え、あわや失格かというところで急に体力が回復したような、自身の不思議な感覚。そして、地図に表示されていた真紅の框。それらから導き出されるのは……。

「――このフロアは、『失格』になってもスタート地点に戻されない……いや、戻れないんだ」

「ｐ」

体力がゼロになっても、残機が減るだけでアイテムや攻略進度はそのまま復活する。見、プレイヤーに優しい仕様に思えるが……。

「マズいな」

この最終フロアに限っては、「脱出不可能」であることが完全に仇となっている。

「完全攻略か「死亡」、どちらかしかないってのか。流石に、それは理不尽だろ……」

「……ああ。何か道が残されているはずだ」

そう思わないことには、現状を打破する策を考えることができない。九ほどいた大部屋に、上の階層へ移動できる扉の類は見当たらなかったが、この迷路のどこかに脱出口が隠されている可能性はゼロじゃない。もしくは、この真紅の檻を取り除く仕掛けのようなものがあれば……。

「ねえっ、こんなところにアイテムがあったわよ！」

いつの間にか立ち上がり、周囲を調べていたリアが、一冊の魔導書を手にやってくる。

「〈復活〉……残機回復アイテムか！」

それは、上層階ではついぞ見かけなかった、レア中のレアアイテムだった。

「もしかして、他にもレアアイテムが隠されてるんじゃないか？」

ボスと戦うだけなら、大部屋一つあればいいはず。わざわざ周囲に迷路を張り巡らさせてあるのは、そこにサポートアイテムが用意されている可能性も考えられる。

「よしっ、ボスに見つからないように、なるべく多くのアイテムを集めよう」

「脱出口も、よね？」

「ああ」

リアのつぶやきに、大きなうなずきで応える。

「それなら、俺がヤツの様子を見る偵察役をやるよ。万が一敵と接触したときに一番まともに戦えるのは、俺だろうしな」

橘の言う通り、こう複雑に曲がりくねった道では、僕やリアの得意とする遠距離攻撃魔法は通用しづらい。どうやら味方プレイヤーのマーカーは〈地図〉上で確認できるようなので、誰か一人が偵察役を請け負ってくれれば敵の位置を把握することが可能だ。

「……すまん」

「気にするなって。もしかすると、勢い余って俺がヤツを倒しちまうかもしれないぞ？」

「……無理だけは、するなよ」

努めて明るく笑う橘に、僕は後ろめたいものを感じながらも、自身のできることをやり抜こうと気合を入れ直したのだった。

*

「!?　――ハルトっ、後ろ！」

「くっ……！」

リアが慌てて叫ぶが、一瞬遅い。アプリを使用する隙もなく、あっという間に眼前に現れたモンスターが繰り出す無数の腕が、体勢を崩した僕の身体を捕らえる。

「ぐ、あっ……!?」

気の遠くなる激痛とともに、宙を舞う僕の身体が光に包まれ、すぐに気力を取り戻す。

「ハルトっ！　大丈夫!?」
「あ、ああ……、とにかく逃げるぞ！」
「う、うんっ」
急いでリアとともに近くにあった魔方陣に飛び込む　さらに地図アプリで橘のマーカーが表示されている箇所をロングタップした瞬間、僕らの身体はフロアとの指定ポイントへと転送される。
「竜神ー　リアちゃん！」
僕らの姿を見つけた橘がすぐさま駆け寄ってくる
「……スマン、ヤツを魔方陣に逃がしちまった」
「仕方ないさ　橘にあまり深追いをさせるわけにもいかないしな」
任意の場所に転送できる魔方陣は、フロア内の数カ所に設置されていた　敵から離脱するのに便利な機能ではあるのだが、先ほどのようにモンスターが突然目の前に現れるなんて事態も起こりうるのが厄介だ。
「……残り一機、か」
スマホを確認した僕は、小さく舌打ちする　これまでの必死の探索で、攻撃系の魔導書や〈回復〉などはいくつか発見することができたが、肝心の残機回復アイテム〈復活〉や脱出口の類はどうしても見つけることができなかった。

「もう行ってないところはないよな？」

「ああ、少なくとも〈地図〉に表示された場所はあらかた回ったはずだ」

……ということは、脱出口はどこかに巧妙に隠されているのか。それとも――元より存在すらしないのか。

「どこかのフロアみたいに、鍵代わりのQRコードが隠されているんじゃないか？」

「一応、そのあたりも気をつけて探したんだけどな……なあ？　リア」

「え、ええ。QRコードって、隅に三つの四角があるやつでしょ？」

「ああ　ちょうどこんな風に……」

リアのつぶやきに対し、無意識に見本として見せたのは、地図アプリに表示されたこのフロアの全体図。

「――　なっ……！」

右上・左上・左下に大きめの四角（部屋）が配置された迷路図は、よく見るとこれまで見かけたQRコードに酷似していた。

「まさか――」

僕は微かに震える手で、橘がスマホに表示させたマップにカメラをかざす。

――ピッ、ピッ、ピーッ

電子音とともに、スマホの画面にあるメッセージが表示される。

【発動――〈拘束解除〉】

「！　これは……っ」

謎のアプリが起動されたと同時に、地図アプリ上でフロアを取り囲んでいた真紅の檻が、跡形もなく消え去る。

「お、おい、まさか、いまので……」

「おそらく、『天格』が有効になった……はずだ」

！　やったじゃないっ！」

「ああ。……でも、――残機が、足りない」

「ｈｐ」

僕のスマホに表示される、本だけのアンテナ。失格によってこのフロアから脱出するには、余分な残機が必要なのだ。

「一人は、残り何機だ？」

「俺も、一機だ」

「わ、私は、まだ四機残ってるわ。こ、これって、他の人にあげたりできない……わよね」

「……」

現状を正確に把握した僕たちは、一様に口をつぐむ。残機回復アイテムは手元の〈復活〉一つきり、つまり僕か楠のどちらかは脱出できない計算だ。

「ま、まだどこかに〈復活〉の魔導書が隠してあるかもしれないじゃない！　それを探しましょう！」

「……そう、だな」

力なくリアに応えながら、攻略を再開する面にした決意を胸に秘めた僕は、スマホをギュッと握りしめる。――そのとき、

――カンヤッ

「「？」」

突然、体中の力が抜けたように、その場で固まる僕とリア。この感覚は……。

「――おっ、初めてスマホを固定しないで強制スタンに成功したぜ。俺のカメラの腕も、ちっとは上達してたってことか」

振り返ると、そこにはスマホのカメラをこちらに構える楠の姿が。

「ど、どういう、こと……？」

「リアちゃん」

僕と同様に、身体がほとんど動かせない状態のリア。そんな彼女の元に、橘はゆっくりと近づく。

「短い間だったけど楽しかったぜ。俺は皆から妹に構ってやれなかったから、少しでも妹孝行の代わりができてたら嬉しいよ」

「な、何を、言ってる……の？」

「竜胆は色々と面倒なヤツだけど、きっといつか、みんなを支えるデカい男になってくれると俺は信じてる。これからは、俺の分もリアちゃんがしっかり支えてやってくれよな」

「え……？」

「じゃあな」

シャッター音とともに、リアの身体が光に包まれる。〈連写〉によって体力を奪われ『失格』となった彼女の姿が、ゆっくりと消えていく。

「よし、なんとか檻から脱出できたみたいだな。いやー、よかったよかった」

「お、お前、なんで……」

悪き物が落ちたような笑みを浮かべた橘が、こちらへと近づいてくる。

「なんで、は、こっちの台詞だぜ」

やれやれと肩をすくめ、橘が告げる。

「――もし〈復活〉がもう一種見つからなかったら、お前、俺にソレを使って自分だけ残るつもりだっただろ？」

「っ！」

橘が僕の手にあるスマホを指さす。そこには、先ほどリアが発見した〈復活〉がアプリ化されていた。

「自分では感情を隠せているつもりだろうけど、結構バレバレだぜ。前にも言ったと思うが、これからは無理して気持ちを押し殺したりせずに、もっと自由に振る舞いな。……俺からの、最後のアドバイスってとこだ」

僕の腕ごとスマホを取った橘は、動かない僕の指を操作して〈復活〉を実行してしまう。

「……よし。これで竜胆の残機は二機になったな」

「ふざ、けるな……っ」

「いいか、よく聞け」

憤りを言葉と現実でぶつける僕を無視するように、橘は真剣な表情で続ける

「この『LABYRINTH』ってゲームは、プレイヤーレベルの概念がないんじゃない――敵のレベルが、こちらの実績に応じて変動しているんだ」

「なっ……！？」

「ずっとLiLyからのメッセージが引っかかっていたんだ　おそらく、最終フロアのボスが桁違いの強さだったのは、最小限のフロア攻略でここまでやってきたからだろう」

そう聞いて思い出すのは、以前LiLyから届いたメッセージ

【LiLy：少しでも、多くのフロアを攻略したほうが、イイコトがありますヨ♪】

あのメッセージは、このことを指していたのか……？

「……すまなかったな　俺が安全を最優先しようなんてばったばかりに」

「でも、それは――」

きっかけは橘だが、僕もその考えに同意した上で作戦を提案したのだから同罪だ。

「ま、その責任ってわけでもないけど、ここは俺が残ることにするよ。なあに、いまの（連　写）でリアちゃんとお前から貰った体力を使って、一人でもなんとか〈復活〉の魔導書を見つけてみせるさ」

「……嘘、つけ」

勝算があるなら、『最後のアドバイス』なんて言い方、しない。

「……」

屈託のない笑顔を浮かべた橘が、ゆっくりとスマホを構える。

「それじゃあな」

「たちば……っ！」

僕が何か叫ぶより早く、カシャッというシャッター音とともに視界が一瞬にして暗転した。

お前は悔いの残らないように生きてくれよ。

――遥人（はると）

「――ハルトっ、ハルト！」

ゆっくりと目を開けると、間近にリアの心配そうな表情が飛び込んでくる。

「ここ、は」

無言で周囲を見渡すと、少し離れたところに山吹や胡桃沢をはじめとした他プレイヤーたちの姿が見える

「――そうだ……！」

瞬時にこれまでの経緯を思い出す。『失格』によりスタート地点に戻されてしまったらしい僕は、反射的に身体を起こす。

「ね、ねえっ、なにがどうなってるの！」

リアの問いかけに、僕は、もしものときに自分が残ろうと密かに決めていたこと、そして、それを見抜いた橘によって強制的にここに戻されたことを告げる

「そんな――！」

「一週も早く、橘を助けに行かないと……！」

「わ、私も行くわ！」

もう一度、最終フロアに辿り着いたとしても、ヤツに勝てる保証はまったくない。せっ

かく助けてもらった命を無駄にしてしまう可能性だってある。――それでも、このまま僕が《復活》の魔導書を見つけ出すことができるのを祈って待つだけなんて、とても耐えられそうにない。少しでも早く、少しでも多くのアイテムを回収して助けに駆けつけることができれば、あるいは……、

……しかし、その望みはあえなく打ち砕かれる。

――ピピッ

「「「「「「「「」」」」」」」」

この場にいる全プレイヤーのスマホに、一斉に《情報》通知が届く　何度も耳にした通知音に、僕は指を震わせながらディスプレイを覗き込む。

【儀祭十一（三〇）　死亡】

XII

「……ハルト、こんなところにいたのね」
橘が「死亡」となった知らせを受け、大広間にいるプレイヤーたちの動揺が収まらぬ中、皆と離れた場所で一人天を仰いでいた僕の元に、リアがやって来た。
「リア……」
「隣、いい？」
返事をする前に、スッと腰を下ろしたリアは、僕の手に持つものを見て目を丸くする。
「それって、もしかして……」
「……いまさっき転送されてきた、橘のスマホさ」
「PLAYER UNKNOWN」と表示されたそれは、持ち主が不在にもかかわらずアラート音の一つも鳴りはしない。アンテナバーに「圏外」の代わりに表示されている「死亡」の二文字が、どうしようもなく僕の焦燥感をかき立てる
「……ははは、形見代わりとでも言うつもりかっての」
「ハルト……」
憂いの色を強めたリアの視線に気づかぬように、僕は話題を変える。
「みんなは……どうしてる？」

「ルミやネネがフォローして回ってくれてるけど、泣き出している子たちもいるみたい。……ここしばらくは『死亡』になるプレイヤーが出てなかったから、相当ショックだったのね」

それだけではないだろう。これまで率先して先頭に立ち、皆をまとめ、率いてきた橘。無意識のうちに皆の精神的支柱となっていた俺を失ったのだ。その衝撃は計り知れない。

「一人にフォローを任せてばかりじゃ、申し訳ないな……」

そう言って立ち上がろうとする僕を、やんわりと制止するリア。

「ハルト、……無理、しないで」

「……？　何がだ。別に、僕は無理なんて――」

訳が分からず首をかしげると、

「ん」

ふわりという甘い香りとともに、視界が真っ暗になる　どうやら僕の頭はリアに抱きかかえられているらしい。

「ここなら私以外、誰も見ていないわ。無理しないでいいの」

「な、何を……」

困惑する僕の耳元で、リアがそっと囁く。

「――自分の心を蓋で閉じるのは……もうやめて」

「っ！」

優しく紡がれるその言葉が、別れ際、橘に言われたアドバイスを思い起こさせる。

「あ、あ、あ……」

突然、ダムが決壊するように、様々な想いが次から次へとこぼれ出していく。

「あのときも……、あのときも、僕が不甲斐なかったから、橘が……」

――もっと橘のアドバイスを真摯に受け止めて近接戦の修練を積んでおけば、アイツの残魂を滅らさずに済んだかもしれない。もっと僕が積極的に前線での調査に参加していれば、橘の言うダンジョンのカラクリに気づけたかもしれない。もっと、もっと……、

目を背けていた後悔が、怒濤の如く押し寄せてきて押しつぶされそうになる。

「ハルトだけのせいじゃない。橘君を助けられなかった私にだって責任があるわ」

「そんなこと、は……」

「お願い。私にも、ハルトの想いを少しでいいから背負わせて」

「り、ア……」

そっと耳元で囁かれた言葉に、僕の口は知らず知らずのうちに動いていた

「僕は……、ずっと一死」ってものが……、分かって、いなかったんだ」

――物心つく前に交通事故で亡くなったと聞かされた、僕の本当の両親。写真すら残っていないという彼らと過ごした記憶をまったく持たない僕は、その事実を聞かされても、

何の感情も抱くことができなかった。

人と深い繋がりを作らなければ、大切な思い出を作らなければ――失うこともない　心乱されることなく、安心して自分の「居場所」を保ち続けることができる。

しかし、僕は知ってしまった。人と繋がることがどれだけ心地よいものか　どれだけの新たな気付きを得られるものか。そして――それを失うのがどれほど悲しいことなのか。

「……もっと聞かせて、あなたの想いを」

リアが僕を抱きしめる力がギュッと強くなる。優しい彼女の香りに包まれながら、次々と口からこぼれていく言葉とともに、ゆっくりと暗く重い心が軽くなっていく。

「あ、あ、あぁぁぁぁぁ……っ」

いつしか激しい嗚咽へと変わった感情の波が、長年心に溜め込んできた様々な澱を、ゆっくりと洗い流していく。

「……ハルト」

暴発する想いのままに、不器用に、力の限り慟哭する僕を、リアはただ静かにじっと抱きしめてくれた。

*

「――もう、大丈夫だ」

「ん」

しばらくの後。全ての想いを吐き出した僕は、リアに礼を言いながら立ち上がる。これほどまでに自らの感情を晒したのは、一体いつ以来だろう。慣れぬ行動に制御が利かなくなってしまった己を顧み、気恥ずかしくなった僕は、頬を掻きながらぼつりとつぶやく。

「リアは……、強いな」

「や、やめてよ……、そんな大したものじゃないわよ」

彼女の心の強さを目の当たりにし、深い尊敬の念に包まれる。恥ずかしげに視線を逸らすリアに微笑みかけた僕は、ゆっくりと瞳を閉じ、己のこれまでを顧みる。

「……」

これから「死亡」のルールについて聞かされても、その後、死亡者が次々と現れだしても、僕はこの非現実的な出来事を、どこかゲームめいた架空の世界として捉え続けていたのだろう。意識の甘さと、どうしようもない弱さ。それらが、この事態を引き起こしたといっていい。

僕は、これから釘を刺されていた現実を、いま一度、心に深く刻み込む。

「ここは、仮想現実じゃない――拡張現実なんだ」

もっと早く気づいていれば、もっと早く覚悟を決めていれば……。次から次へと湧き上がる後悔はキリがないが――それらは全て、後回しだ。

「ハルト……」

心配そうにこちらを見つめる視線を感じる。……自身もショックだったはずなのに、不平変ない僕を優しく受け止めてくれたリア。押しつぶされそうな心の重荷を分かち合ってくれた彼女のためにも……。

「――僕は、もっと強くならなきゃいけない」

もう二度と、誰も悲しい思いをさせはしない――

胸に秘めた固い決意とともに、僕はこの全てを背負ってこのダンジョンを攻略することを、一人心に誓った。

XV

「――〈炎拳〉！」

こちらへと向かってくる敵――いつかも対峙した骸骨剣士へと駆け出しながら、魔法アプリを立ち上げた僕は、炎を拳へ纏わせる。

「はあぁぁっっ!!」

ブゥンという低い音とともに振りおろされる大剣を紙一重でかわしながら、剣の腹に全力で拳を打ち込む。拳が真芯を捉えると同時に、剣を持つ本体にまでヒビのような光の線が走り、やがて全身を跡形もなく分解、光の粒へとなり消えていった。

「……ふぅ」

ドロップアイテムを回収した僕は、乱れた呼吸を整えるように短く息を吐く。

――あれから、どれくらいの時が経っただろうか。

全精力をダンジョン攻略へ注ぐことを決意した僕は、まず橘が遺したヒントを元に、フロアクリアとダンジョン全体の仕様変化との関係について調査を始めた。その結果、彼の推測通り、クリアしたフロアが多ければ多いほど迷宮内で出現する敵モンスターは弱体化し、逆に仕掛けの難易度は上がっていくことが分かった。

そこで、完全攻略における最大障害であろう、あのラスボスの撃破を最優先とした僕は、ランダムに変化するフロアに何度も出入りを繰り返し、一つでも多くのフロアをクリアすべく階層ごとにしらみつぶしに攻略を進めていった。

当然、モンスター弱体化の代償として仕掛けの難度が上がったことで、バトル以外でフロアクリアに失敗するケースも出てきた。直接ダメージを受けるわけではないので残機は減らなかったが、クリアに失敗すれば即座にスタート地点に戻され、これまで積み上げてきた実績がゼロに戻されてしまうため、その度に一から攻略をやり直さなければなかった。

それでも、何かに取り憑かれたように淡々とやり直しを続けていった僕。――【失格】になった回数は、百を超えた辺りから数えるのを辞めてしまっていた。

「まだだ……まだ、足りない」

未だ炎の残滓が揺れる拳を見つめながら、先ほどの戦闘でイメージ通りいかなかった部分を思い起こし、頭の中で修正点を洗い出していく。

――攻略を進めていくと同時に、僕は橘から教わっていたトレーニング法を用い、実戦を交えながら地道に体捌きの基本を身に付けていった。日の前に立ち塞がる敵の全てで、彼から学んだ術を実践していく作業は、まるで橘自身と組み手をしているようにも錯覚し、その結果、彼が得意としていた技も、見よう見まねではあるがそれなりに使いこなせるようになっていた。

「いよいよ、か」

スマホにストックされたクリア済みフロアの一覧を確認する。途方もない数のリセットを繰り返した結果、――ようやく、ようやく100フロア全てのマップを一度も「失格」することなくクリアすることができた。

これで、橘の仇が討てる。

「……」

ふと、しばらく会っていないリアの顔を思い出す。彼女は山吹や胡桃沢らとともに避難場所にいる。自分を遠れて行かないことに随分と納得のいっていない様子だったが、もう、誰も死なせたくないからな」

橘が口にしていた言葉が無意識にこぼれ出る。あんな思いをするのは、もう沢山だ。

「――行くか」

目の前には、いつかも目にした巨大な扉。ゆっくりと手を伸ばした僕は、大きく息を吸い込み、勢いよく扉を開け放つ。

「!?」

たちまち周囲が光に包まれる中、僕は妙に落ち着いた思考で準備に怠りがないか つ一つ再確認する。やがて、視面に脚が付く感覚とともに、徐々に視界が晴れていく

「――これが、最後の戦いだ」

弱体化の産物か、二種のゴーレムが融合しただけのシンプルなその姿。――眼前には、憎んでも憎み足りない、あの巨人合成獣の姿があった。

＊

「っ――！」

その目に敵の姿を捉えた瞬間、全身の血が沸騰したような感覚に身体中が震える。

「――〈炎拳（フレイム・ナックル）〉！」

一目散に敵へと向かって駆け出した僕は、魔法アプリのストックを使い切る勢いで、力を拳へと注ぎ込む。

「はあああぁぁぁぁああああぁぁぁぁ

「いける、いけるぞっ……！」

身体を打つ衝撃は、以前ほど耐えきれないレベルじゃない。全階層のフロアをコンプリートしたことで、ヤツの弱体化が最大限行われたおかげだ。

「――〈脱獄（ブレイク）・クラック〉！」

魔法アプリを使い続けたまま、同時にワンオフアプリを起動。たちまち脳内にこれまでの雑魚モンスターとは比べものにならないほどの情報量が流れ込んでくる。頭の中で敵の全体像が徐々に詳らかになる中、僕は必死に対象の〈弱点（ウィークポイント）〉を解析する。

ダンジョン内に出現するモンスター全ての要素を内包する超巨大合成獣。フロアをコンプリートしたことで異形の衣が剥がれたその本体は、「攻撃性」と「防御性」を司る一種のゴーレムの融合体。最強の矛と盾とをつなぎ合わせた、まさに〈矛盾（パラドックス）〉そのものといえる存在の弱点は……。

――ピーッ！　ピーッ！　ピーッ！

「！」

思考の海に深く沈んだ意識が、ふいに現実へと引き戻される　手元のスマホに目をやると、体力ゲージが残り僅かであるアラートメッセージが表示されているのに気づく。

「しまった……っ!?」

複数の魔法アプリ起動に加え、〈脱殻〉の使用　さらに、防御無視の代償で喰らい続けた敵の攻撃　そこから導き出される結果は、明らかだ。

「くそっ……！」

慌てて全てのアプリをオフにするが、もう遅い　僅かな体力を残し半身一つに戻った僕に、反撃の手が襲いかかる

「……っ」

ふっと全身の力が抜けた僕は、妙に穏やかな心持ちになる。……頭の中を占めるのは、無念を晴らせなかった憐に対する謝意と、後に残したリアたちを案ずる気持ちだった。

「……ごめん」

結局、最後まで凛ってばかりだったな、と、自嘲気味に微笑んだ、そのとき、

「――〈爆炎球〉！」

甲高い声とともに、眼前が爆炎で包まれ、モンスターの身体が大きく後方へ吹っ飛ぶ。

「だ、大丈夫ですか……？」

「間一髪だったねー」

体勢を崩す僕の身体を支えてくれたのは……、
「胡桃沢と、山吹……？」
呆然とつぶやいた僕は、彼女たちの助けを得てなんとか立ち上がる。そして、
「――リア」
〈炎、陣〉で敵モンスターの動きを封じた彼女が、こちらへと駆け寄ってくる。さらに、
「っ！」
大きく振りかぶったリアは、僕の頬を強かに平手打ちする。あまりの唐突さと衝撃で目を白黒させる僕をよそに、彼女はそのまま勢いよく僕の胸に飛び込んでくる。
「よかった……、間に合って、ホントによかった……っ！」
困惑する僕の眼前いっぱいに、瞳を潤ませたリアの表情が飛び込んでくる。
「馬鹿っ……！　なんでアンタは、自分一人で抱え込もうとするのよっ！」
僕の胸ぐらをギュッと摑み上げたリアが、高ぶった感情をあるがままにぶつけてくる。
「アンタはそれで満足かもしれないけど、残されたほうの身にもなりなさいよっ……！　もしハルトがいなくなったら、私は、私は……」
込み上げてきた感情を表すかのごとく、瞳一杯に涙を溢れさせたリアは、その姿を見せまいとするように、僕の胸へ顔を埋めながら言葉を紡ぎ続ける。
「ばか、ばかばか、ばかばかばかばか……っ！」

「……ごめん」

強く胸へと押しつけられる彼女の身体と想いに、結局、いままでの行動が自己満足でしかなかったことを悟った僕は、能のない謝罪の言葉を口にすることしかできない。

「ぐすっ……、ゴメンで済んだら、騎士団はいらないのよぉ……」

「……はは、本当にその通りだ」

橘が死んでからずっと張り詰めていた僕の心が、ゆっくりと解きほぐされ、場にそぐわないほど柔らかな笑みが自然と浮かぶ。

「あのー、お二人さん。イチャイチャするのは、後にしてもらえないかな？」

「も、もうすぐ〈炎陣〉の効果が切れてしまうですっ」

呆れ顔と焦り顔とを浮かべる二人を振り返る

二人まで、どうして……」

「橘クンのことがあって、アタシたちも攻略を任せきりの状況はよくないんじゃないかって気づいたんだよ」

「だ、だから、協力してくれるプレイヤーの方々にアイテムを集めてもらいながら、急いで後を追いかけることにしたんです……。竜胆くんに言うと止められると思って、いままで黙ってましたですけど……」

「……そう、か」

どうやら本格的に僕の独り相撲だったらしい。申し訳ないやら情けないやらで複雑な心持ちだが、彼女たちのおかげで重すぎる荷物を降ろすことできた僕は、いままでにないほど心と頭とが澄み渡る自身に気づく。

「　　詫びも礼も、後でいくらでも言わせてくれ。いまは目の前の敵を倒すために、みんなの力を貸してほしいんだ」

僕の言葉に、三人の仲間は一様に頼もしげな笑みを浮かべて大きくうなずいた。

＊

手近にあった魔力陣でひとまずその場を離れた僕らは、別の大部屋へと移動し、作戦を実行すべく通路に繋がる出入り口をにっと見つめる。

「竜胆くん、あと一分ほどで、敵が現れるです」

胡桃沢の《接続》により敵の動きを把握しながら、僕は山吹のほうを見やる。

「山吹、頼む」

「オッケー！　――〈装飾（デコレーション）・アップ〉！」

残る唯一の回復アイテム〈全回復〉を、山吹が〈蘇生〉の力でさらに強化する。

「――〈極回復〉！」

我りわずかだった僕の体力が、みるみるうちに回復していく。強化された回復の力はそれだけに留まらず、振り切ったメーター表示がバグったようにおかしくなる。

「？」

そのとき、ダンジョン全体に大きな歪みが生じ、スマホの挙動が極端に重くなる。

「……収まった、か」

おそらく〈極回復〉により通常ではあり得ないデータ書き換えが生じたため、一時的にラグが生じたのだろう。まさかダンジョン全体に影響が出るとは思わなかったが、同じシステムによって生み出されているのなら無関係ではないのかもしれない。

「……来たっ。リア、行くぞ！」

「ええっ！」

タイミング良く、モンスターが姿を現す。リアたちの合流に連動して、いくつかの魔物を融合しパワーアップを果たした合成獣。……でも、チームワークならこちらが上だ

「――〈炎陣〉！」

「――〈氷雨〉！」

いつかと同じ、リアの魔法と僕のアプリを同時起動させることで、周囲に霧を作り出す。

「いまだっ！」

敵の両側に回り込んだ僕とリアは、一方向から魔法攻撃を試みる。

「！　攻撃が三方向から来ますです――！」

混乱する視界の中で僕等に攻撃を振るい出すモンスター。剣を持った無数の腕はリアへ。人のように巨大な二本の腕は僕へ　そして、牙をむき出しにした頭が、正面に対峙した山吹の元へその身体ごと襲いかかってくる。しかし、〈接続〉の力で寸前に行動を察知した胡桃沢のおかげで、僕らは難なく対処ができる。

「胡桃沢っ、頼む！」

「は、はいです！　――〈接続・リンク〉！」

胡桃沢と僕のスマホが接続された瞬間、僕の脳内に膨大な情報が流れ込んでくる。

――本体であるゴーレムの高い戦闘力に、灰色狼の牙と爪、そして無数の腕を備えた不死騎士の武器が付加。これらが一つの個体として合わさることで、高い戦闘力を実現する合成獣　しかし、個性の強い魔物を合成したことによる弊害か、それぞれの長所を生かすだけでなく、個々の持つ短所が、本体が抱えている矛盾をさらに強める結果にもなっている。つまり……。

リアたちが駆けつける直前、《読獄》で得た情報に、胡桃沢が《接続・スキャン》で集めた情報を補う形で、敵の弱点を導き出す。

《脱獄・クラック》が莫大な体力消費を必要とするのは、解析・侵入・破壊という二つの力をまとめて行使するからだ。こうしてその一部をフォローしてもらうことで、体力消費を多少なりとも減らすことができるはず。

膨大な構成要素の中から、僕はついに敵の弱点を導き出す。

――合成獣ゆえの欠点か、それぞれ個性の異なる力を一つの意志系統で同時に動かそうとすると、そこには大きな「歪み」が生まれる。それこそが……。

「……ここだっ！」

光の鎖が、身体中の「継ぎ目」を見つけ出し、絡みついていく。破壊の力――超負荷術が敵の弱点に集中し、合成獣の巨体が瞬時に三体の異なるモンスターに分割される。

「――《爆炎球》！」

「――《爆氷球》！」

今力の魔法攻撃でフェンリルを粉砕するリアに合わせ、あらかじめ出吹の《装飾》で強化しておいた氷魔法でアンデッドナイトを撃破する。

「ぐっ……！」

「ハルト!?」

残り一体となったゴーレムの攻撃をかわしきれず、まともに攻撃を喰らってしまう。一瞬、意識が遠のきかけたが、〈極回復〉で強化した体力のおかげでなんとか持ちこたえる。

「――〈脱・獄・カスタム〉！」

残る炎系の魔法アプリ全てを〈脱獄〉の力で一つに合成した僕は、それを両拳に向けて行使する。――狙うは〈脱獄〉でこじ開けた、ヤツの核。

「――〈爆炎拳〉！」

全ての力を注ぎ込む勢いで、親友が遺したとっておきの技を、ゴーレムの頭へと叩き込む

「はあああああああああああああああああああああ――――――――――――っっっ!!!!」

激しい衝撃が拳を伝わって脳を揺さぶる中、小さなヒビがたちまちゴーレムの全身へと広がり、――やがて弾け、跡形もなく消滅した。

「やっ……た」

ぽつりとつぶやいた、そのとき、スマホからファンファーレが鳴り響いた。

【第六階層クリア　アイテム〈転移門〉取得】

「――やった……！　やったよっ、竜胆クン！」
「クリアです……！　とうとう最終フロアをクリアしましたです……！」
何度もスマホに表示されたメッセージを確認しながら、声を震わせた二人が叫ぶ。そして、
「ハルト……っ、ハルトーーーーーーーーーーーーーーっっっ！」
感極まったリアが、僕の胸に飛び込んでくる
「……ありがとう。リアたちのおかげだ」
ようやく少し慣れたのか、その身体を上手く抱き留めることに成功した僕は、沸き上がる達成感とともに満足げにそうつぶやいたのだった。

*

「――これが、〈転移門（ゲート）〉、か」
ボス撃破と同時にスマホにダウンロードされたアイコンを確認する。
「転移門ってことは、これで元の世界に戻れるんだよねっ」
「最終フロアをクリアして、もうこの先はないのですから、当然そのはずです……よね」

興奮冷めやらぬ様子の山吹と胡桃沢が、僕のスマホを覗き込みながらそうつぶやく。しかし、

「どうだろう……、もう少しよく調べてみないと」

一抹の疑念が拭えない僕がそうつぶやき、アプリ起動を逡巡していると、

「なーに悩けないこと言ってるのよー　男ならやるときはどーんっとやりなさいー」

「あ、おいっ」

攻略達成の余韻が残ったままのリアが、勢いに任せて僕の手を取り、アプリアイコンをタッチしてしまう。

【発動――〈転移門〉】

――ブゥンッ

「「「「!?」」」」

その瞬間、スマホから溢れ出た光がたちまち僕らを包み込む。何度も体験した、自身の身体がどこかへと転送される感覚。やはりこのアイテムは、元の世界へ戻ることができるアイテムだったのだろうか――。

浮遊感が消失する感覚とともに、周囲を覆う光がゆっくりと晴れていく

「え――？」

まず感じたのは、肉体的な解放感。ダンジョン内では決して味わえない広大なスケール感に、僕は自らが囚われていた軛から抜け出せたことを実感した。

――しかし、視界に飛び込んできたのは、予想とは異なる光景だった。

「ここは……どこだ？」

広大な空間を覆うのは、天まで届くような巨大な書棚の数々。まるでダンジョン内の意匠をそのままスケールアップしたかのような世界。その有り様に、どうしようもない違和感と疎外感を覚える

「まさか……」

呆然と周囲を見つめていたリアが、ぽつりとつぶやく。

「リア、ここがどこだか知っているのか？」

そう尋ねながら、僕の中に確信めいた予感が込み上げてくる

ダンジョンを構成していたのは、僕たちの「現世界」ともう一つ　決して交わることのない、交わってはならない、異なる理に生きる世界。そう、ここは……、

「――図書界（ビブリア）」

僕たちの冒険は、まだ、終わっていなかった。

VI

「ここが、図書界……」

もう一度、ゆっくりと周囲を見回す。

――書物によって街が構成された、一つの超巨大な図書館のようにも見える空間。人々が「本」とともに生きていることを想像させる、まさに「図書界」と呼ぶに相応しい、その世界。目をこらすと、遥か向こうには周囲を見下ろすように高台にそびえ立つ、豪華な屋敷が見える。

「！　山吹と胡桃沢は？」

「わ、わからないわ……」

〈転移門〉が作用したのは、起動した僕と手を触れていたリアだけのようだ。

「スマホは繋がらないのか……」

ディスプレイを確認してみると、アンテナバーには久しく見ていなかった「圏外」の二文字が。どうしたものかと、ぼんやり辺りを見回していると、

「……おかしいわ」

同じように周囲に視線を向けていたリアが、ぽつりとつぶやいた。

「どうかしたのか？」

「街を歩く人の姿が少なすぎるのよ。私がダンジョンに迷い込む直前は、通りいっぱいに商店が並んで、もっと楽しそうな雰囲気だったのに……」

僕は元の姿を知らないのでよくわからないが、言われてみれば幸団の広さのわりに周囲にほとんど人通りがないことに気づく。

「魔導書の数が減っているのも不自然だわ……、あれはこの世界を支えている力そのもので、持ち出したりはできないはずなのに……」

確かに、そこかしこにある書棚は随分と「抜け」が目立つ。リアによると、これらの書籍に収められている魔導書は、一つ一つが図書界の様々な生活インフラを担っており、ダンジョン内の壁と同様、物理的に取り出せない仕様になっているらしい。

「私がいない間に、いったい何があったの……」

呆然とリアがそうつぶやくと同時に、正面の通りから物々しい甲冑で全身を包んだ集団がこちらへとやってくるのが目に入る。

「あっ……！」

彼らを目にしたリアが慌てて逃げだそうと踵を返す、しかし、

「っ！」

いつの間にか周囲は同じような格好をした集団に囲まれていた。突然の出来事に野次馬も出ない僕らをよそに、集団の先頭に立つ一際体格のいい男が一歩前へ進み出て叫ぶ。

「姫様ー　ご無事でしたか……！」

「……姫、様？」

彼の瞳はまっすぐリアへと向けられている。まさか……、

「え、えーと……騎士団長？　そんなに慌ててどうしたの？」

「どうしたのではありませんー　この大変なときに姫様までいなくなられて……、我々はずっと捜索を続けていたのですよー」

「……大変なときって、どういうこと？」

「詳しいことは城へ戻ってご説明させていただきます。……おい」

「はっ」

リアに騎士団長と呼ばれた男が合図すると、

「ぐっ……ゃ」

突然、僕の身体が地面に引き倒される。

「ア　ちょっと！　何をしてるのー」

「団長ー　発見しました！」

慌てて駆け寄ろうとするリアを制して、僕から取り上げたスマホを確認した男は、静かにつぶやく。

「この者は、姫様を攫った誘拐容疑で捕らえさせていただきます。現在図書界で起きてい

る「異変」の、重要参考人でもありますので」
「異変ってなんのことよ！　ハルトは何も関係ないでしょ！」
「……連行しろ」
「はっ」
強引に引き起こされ、どこかへと連れて行かれる。
「ハルト……！　ハルトーーーーーーーーーーーっっっ！」
事態が飲み込めず混乱する中、リアの悲痛な叫び声だけがいつまでも頭に響いていた。

＊

「……はぁ、なんだってんだまったく」
城の地下牢へと連行された僕は、暗く狭い部屋で大きく息を吐く。先ほどまで騎士団の詰め所らしきところで延々と詰問され通しだったため、すっかり疲労困憊だ。
「異変……ねぇ」
僕への詰問を行った騎士団長の言葉を断片的に繋ぎ合わせて分かったこと。それは、現在この図書界で起きているという「異変」の容疑者として僕が捕らえられたというショッキングな事実だった。

――重が昔から人々の生活を支えるインフラとしての役割を担っていた魔導書が次々と消滅するという、謎の現象が発生している図書界。

発生当初は緩やかなもので、人々に大きな影響を及ぼすものではなかった異変は、時の沈静化を経た後、爆発的にその勢いを増していったらしい。中には書棚ごと魔導書が一瞬にして消え去る現象も発生しているそうで、当然のように人々はパニックを起こし、一部で発生した暴動が騎士団によって鎮圧された現在では、ほとんどの国民が家に引きこもって、死んだように細々と生活を続けている状態なのだとか。

「スマホを持ってるだけで犯人扱いってのも、酷い話だよな……」

消失した書棚があった場所で発見された、図書界には存在しないはずのアイテム――スマホ。最先端の研究者の手により、魔導書が「封印」されていることが判明した謎のアイテムと同じものを、王女を攫った悪わしき僕が所持していたことで、有無を言わせず異変の犯人と決めつけられ、事情聴取とは名ばかりの詰問攻めにあっていたというわけだ。

「しかし、リアがこの国のお姫様だったとは……」

図書界を統べるウィステリア王国の正統後継者である、サイネリア＝ウィステリア王女――それがリアの正体だった。意外に思うと同時に、彼女の持つ並の強さの理由を垣間見た気がした僕は、妙に納得しながら苦笑する。……そのとき、

「――おい、早くここから出ろ」

数名の団員を連れた騎士団長が、突然牢の外に現れる

「？　一体、なんだ？」

訳も分からず促されるまま牢の外に出た僕に、苦虫を噛みつぶしたような表情の騎士団長が吐き捨てるように告げる。

「……我が上が、お前の話をお聞きになりたいそうだ」

*

「――リアが随分と世話になったそうだな」

謁見の間に通された僕の前で、威風堂々とした佇まいをもって玉座に腰掛けているのは、リアの父親にしてウィステリア王国の現国王であるガラム十だった。

「……いえ、僕らのほうこそ、彼女には助けられてばかりでした」

威厳に満ちた視線と声にひるみながらも、なんとか返事を絞り出す

「そんなことないわよ！　私のほうがハルトには助けられっぱなしだったんだからっ」

玉座の両脇に居並ぶ貴族めいた年寄りの中に、ただ一人、華やかな雰囲気を纏うリアの姿があった。ダンジョンで身に着けていた服とは異なる、気品を感じさせるドレスに身を包んだ彼女は、まるでアンティークの化粧瓶が無数に並ぶ中で咲く一輪の花のようだった。

「リアから話は聞かせてもらった。君を誘拐犯として捕らえたのは、こちらの早とちりであったようだ」

「じゃ、じゃあ……！」

表情を明るくするリアをよそに、ガラムトの瞳が途端に鋭く険しいものに変化する。

――ただし、この世界で起こっている「異変」にかかわる疑いは、まだ晴れていない」

上の厳しい言葉に、お歴々の集まりたちが満足げにうんうんとうなずく。

「魔導書の消失現場から発見された、未知のマジックアイテム……リアによると『スマホ』と言うのだったか。これは現世界の技術で作られたもので、間違いないな？」

「――確証は持てませんが、おそらくは」

発見されたスマホを見せてもらったところ、現在、僕らの世界で最も普及しているモデルの一つだった。

「現在起こっている『異変』――元老院と研究所では、これを『現世界による図書界への侵食』と結論づけている。決して交わってはならない両者に何らかの繋がりが生まれたことで、数百年来変わることのなかった図書界の『理』が侵され、変容し始めている、とね」

王の瞳が、僕とリアへと交互に行き交う。あのダンジョンで僕と彼女が出会ったことが、そのキッカケだとでも言うように。

「そんな……私とハルトは出会うべきではなかったと、お父様はおっしゃりたいの……？」

「……少なくとも『異変』と無関係ではない、ということだ」
「異変、異変って……。現世界の新しい技術が図書界に取り入れられるのは、悪いことではないでしょう！　スマホがあれば暮らしがもっと便利になるかもしれないじゃない！」
感情のままに叫ぶリアを諫めるように、王は彼女を鋭い目で射貫き、告げる。
「――その変化を、必ずしも図書界の人々が望んでいるとは限らないとしてもか？」
「っ……」
「リアも現在の図書界の姿を見ただろう。多くの人々は、急に訪れた『変化』に怯え、ひたすら殻に閉じこもっている。お前が望むのは、彼らのそんな姿なのか？」
「そ、そんなわけ……」
いつの間にか、周囲の視線がリアに集まり、彼女一人が責められる構図になってしまっている。
「ハルト……」
「っ！」
そのとき、リアの縋るような視線が、確かに僕へと向けられたのを感じ、僕は衝動的にその場で立ち上がった。
「――要するに、この『異変』を解決しさえすればいいのでしょう？」

「「「「「」」」」」

そう告げた僕に、リアに向けられていた視線が一斉に注がれる。

「……解決とは、具体的にどうするつもりだ？」

一層鋭くなった王の視線に、僕は精一杯の強がりをもって真正面から応える。

「異変の原因は、おそらく僕とリアが出会ったこと自体にあるのではありません。――僕らが出会った、あのダンジョン。あそこにこそ、その謎が隠されているはずです」

確証があるわけじゃない。しかし、[redacted]が言うにはあのダンジョンは現世界と図書界の要素を融合して作られているのだという。少なくともまったくの無関係というわけではないはずだ。

「第六階層まで達し、ボスも倒した。しかし、あのダンジョンはまだ完全にクリアされていないのかもしれません。僕はもう一度あそこへ行き、全ての謎を解き明かしてきます」

「――わ、私も行くわっ！」

慌てたように叫ぶリアに、王の険しい表情が幾分か弱まる。

「ふむ……、では監視の意味も含めて騎士団にも同行させるとしよう。――騎士団長」

「はっ」

王の言に応え、団長が部下たちに指示を飛ばしながら足早に退室する。
「……リンドウ・ハルト君と言ったか。君は少し残っていてくれないか」
「？」
謁見が終了し、居並ぶ歴々が一人また一人と退室する中、後に続こうとする僕にガラム王が声を掛けてくる。
「ハルト……？」
「……大丈夫だ。リアは先に出ていてくれないか」
「う、うん」
不安そうな視線を残しながらリアがその場を去り、広い室内は僕と王の二人きりになる。
「――ふう。やれやれ。ようやくうるさい連中がいなくなったよ」
すると、十座に座ったまま大きく息を吐いた王が、先ほどとは打って変わって柔和な笑みを浮かべる。
「改めて礼を言わせてもらおう。娘を助けてくれてありがとう」
「い、いえ。先ほども言いましたけれど、僕のほうこそ、彼女に支えてもらえなかったら、いまごろどうなっていたか分からないくらいです」

謙遜しなくていい、と軽く笑いながら、王は小さく溜息を叶く。
「あれはこの国の者としては珍しく、昔から好奇心旺盛な子でね。たびたび城を飛び出しては皆を困らせていたのだよ。まったく、誰に似たのだか」
「はは……、何となく分かる気がします」
「しかし、まさか未知の迷宮などに迷い込んでいたとは思いもしなかった。あの子にはささやかし新鮮な経験となっただろうが、親としてはいつもヒヤヒヤさせられるばかりだ」
「……お察しします」
困ったような笑みを浮かべた王は、ゆっくり宙を見上げ、ぽつりとつぶやく。
「……あの子にとって、この世界は狭すぎるのかもしれない。こちらの都合で閉じこめていては、何も変わらないということか」
「？」
「ハルト君　これからも、あの子のことをよろしく頼むよ」
「は、はあ……」
これから、という意味がよく分からず首をかしげる僕に、満足げな表情の王が続ける。
「先ほどは、元老院の手前厳しいことを言ってしまったが、変化を頑なに拒み続けているばかりでは、この国はゆっくりと確実に衰退の一途を辿ることは目に見えている。人は皆、本当の危機に直面しない限り、自ら変われないものなのだよ」

「……はい」

王の言葉が、まるで自身にも向けられているように突き刺さる。

「ただし、あの子に言ったことも、あながち嘘ではない　相手のことを考えず、自らの価値観を押しつけるだけでは、誰からも受け入れられることはない。特に、結果に対して責任を負う覚悟がないなら、なおさらのことだ」

「そう、ですね」

「あの子は早くに亡くなった母親譲りの行動力で、これまで挫折というものを知らずに育ってきた　それは、あの子の強さであり、逆に脆さでもあるのだ」

斧の強い視線に囲まれ、弱々しげな表情を浮かべていたリアの姿を思い出す

「高い壁にぶつかったときに、弱いあの子が折れないよう、傍で支えてくれる存在が必要だ。それが……」

「……僕、ですか？」

ふっと優しい表情を見せた王が、リアと同じ意志の強さを感じさせる瞳で、こちらをじっと見つめる。

「先ほどのやりとりで、リアが君のことを信頼しているのがよくわかったよ。……ふふっ、出会ってそれほど経っていないにもかかわらず、あの子にあんな瞳を向けさせるなんて、父親としては漢ましさすら感じるよ」

「なっ……！」

「はっはっは」

思わず顔が熱くなる僕を、ひとしきりからかった後、王は何かを思い出したように眉を上げる。

「――ところで話は変わるが、あの『スマホ』というのは実に面白そうなアイテムだね」

「は、はあ……」

突然、悪戯っ子のような笑みを浮かべた王は、懐から何かを取り出す。

「実は、研究所からこっそり持ち出してあるのだが、少し扱い方を教えてはもらえないだろうか？　リアの話を聞いてから、どうしても自分で触ってみたくてね」

「……」

彼女の好奇心旺盛な性格は、間違いなく遺伝によるものだと、僕は確信した。

＊

騎士団を引き連れた僕らは、〈転移門〉によって転送された場所に立っていた。

「……」

「リア？　どうした？」

「……ううん、なんでもないわ」

閑散とした街をじっと眺めていたリアは、気を取り直すように周囲の書棚を探し始める。

この場所は、リアが初めてダンジョンへ転送された地点でもあるらしい。

「ええと、確かこの辺りに……、あっ、あった！」

注意深く見ないと分からないほど淡い光を放つ一冊の本をリアが取り出す。

「……何も起こらないな」

彼女によると、この本に触れた途端にロッドが発した光に包まれ、気が付くとあのダンジョンにいたというのだが……。

「……ん？」

ふと手元のスマホに目を向けると、いつの間にかスマホのアンテナバーが「圏外」からダンジョン内と同じ残機表示に戻っていることに気づく。

「まさか……」

もしやと思い書棚を見やると、光に包まれた本に見慣れた小さなＱＲコードが

「え？　前はこんなコードなかったはずなのに……」

リアが不思議そうに目を丸くする。

――突然鳴り出したスマホと、書籍に現れたQRコード。上の言っていた「現世界による図書界への侵食」というのも、あながち的外れではないのかもしれない

「……」

僕はスマホのカメラをQRコードに向ける。

――ピッ

小さな電子音とともに、書棚にあった〈転移門〉の魔導書がアプリ化される。

「……いいか？」

「……うん」

リアがうなずくのを確認した僕は、ゆっくりとアプリアイコンへ指を伸ばす。

【発動――〈転移門〉】

――ブゥンッ

「来たっ……」

自身の存在全てを分解され、再構築されるような、なんともいえない不快と快楽とが入り交じった感覚が駆け抜けた後、――僕らの身体は目的地へと降り立つ

「な……っ!?」

この迷宮は、何度僕らを驚かせれば気が済むのだろうか。予想をことごとく裏切り、想像を遥かに上回り続ける光景の連続に、もはや溜息すら出ない

「ここ、は」

何度目か分からないつぶやきが、思わず口からこぼれ出る。

「ここは……、どこ、だ？」

――再び舞い戻ったダンジョン内は、以前のファンタジックな様相とは打って変わって、まるでSF世界のような近未来的な空所で埋め尽くされていたのだった

VII

「あっ、竜胆クン！　さるびあチャン！」
数名で何やら話し合っていた集団の中から、僕たちにいち早く気づいた山吹が駆け寄ってくる。
「いきなりいなくなっちゃったから、ビックリしたよ」
「い、いままで、どちらにいらしていたんですか……？」
胡桃沢もやって来て、心配そうに尋ねてくる。
「あ、ああ、実は……」
図書界でのやりとりを説明する。
「あれ？　その騎士団の人たちってのは？」
「……いない、な」
ダンジョンに転送されたのは、僕とリアの二人だけだったようだ。いまごろ向こうはまたパニックになってるんだろうな……。
「リアさん、どうかしたですか？」
「えっ!?　な、なんでもないわよ」
ずっと黙ったままだったリアに、胡桃沢は心配そうな瞳を向ける。……少し気になるが、

いまは現状把握が先か。

「それで、いまはどんな状態なんだ？　このダンジョンは、一体……」

僕は周囲を見回しながら尋ねる。ほんの数時間前まで目にしていた意匠は見る影もなく、装いを新たにしたダンジョン。そんな中、背後に閉ざされたままの巨大な扉だけが、以前と変わらぬ精緻な意匠で鎮座し続けている。

「あのね……」

戸惑う僕らに、二人が話してくれたのは、驚くべき内容だった。

――僕らだけが図書界へ転送されたのと時を同じくして、大規模なシステムアップデートが行われたというダンジョン。その後、残されたプレイヤーたちの元へ届いたGMからのメッセージによると、新しくなったダンジョンはモンスターがまったく出ない代わりに、トラップや謎解きの類がより複雑に変化しているのだそうだ。

「……宝探し？」

「そう。竜胆タンたちのスマホにも専用フォルダが追加されてると思うよ」

言われて確認してみると、確かにいままで見たことがないフォルダアイコンがホーム画面に追加されている。

「ダンジョン内にある宝箱から回収したアイテムをアプリ化すると、自動的にこのフォルダに追加されていくみたい」

「階層ごとの区切りやランダムフロアの仕組みもなくなっているので、立体迷路を使った宝探し……みたいな感じなのです」

二人のスマホには、調査の際に手に入れたと思われるアイテムがいくつかアプリ化されていた。〈回復〉などの従来もあったアプリに加えて、〈八咫烏の羽〉や〈意思の紋章〉といった、使い方がまったく分からないコレクションアイテムのようなものまである。

「〈死亡〉のシステムはなくなったみたいだから、みんなも積極的に探索を再開するようになったのはいいんだけどねぇ……」

「ダンジョン内の仕掛けの難易度が上がっているせいで、なかなかアイテム回収が進まないのです……」

トラップにかかるなどして謎解きに失敗すれば、手に入れたアイテムがリセットされてしまうらしく、プレイヤーたちは相当難儀しているらしい。さらに……。

「〈地図〉が使えないだって？」

攻略を困難にしているのが、いままで使用できていた〈地図〉の機能が使えなくなっている点だ。モンスターも出現しないため〈回復〉や攻撃魔法を行使する必要もほとんどなく、事実上スマホは〈掲示板〉と個々のワンオフアプリのみが有効という状態になっていた。そのせいで探索が思うように進まず、途方に暮れていたところ、僕たちが現れたというわけだ。

「いまは協力してくれる仲間を募って、みんなでアイテムを集めよう、って話になってるんだけど……」

　掲示板の（接続）を使えば、他のプレイヤーが集めたアイテムを一つのスマホにまとめることができる。例の『完全クリア報酬』とやらに、まだ期待を残している連中も多いため、なかなか思うように仲間集めが進んでいないようだが……。

「分かった。とりあえず、僕らも攻略を進めながら声を掛けてみるよ。山吹たちはここを拠点にして、〈掲示板〉でみんなの行動を把握しておいてくれ」

「了解！」

「お、お気を付けて、です」

「ああ　行こう、リア」

「……う、うん」

　心ここにあらずといった様子のリアが気になりつつも、僕は再びダンジョン探索に向けて歩き出した。

*

「……まいったな」

数十分後。僕はダンジョン内を迷めながら大きな溜息を吐く。地図アプリが使えないという状況は、思った以上に厳しいものだった。

「ただの迷路がこれほど難しいとは……」

言い訳するわけではないが、これは僕のような方向音痴でなくても同様だ。スマホのナビゲーションを頼りに行動することに慣れていた人間にとって、記憶と勘を頼りに進む迷路は脅威そのものだった。

「……ハルト、そっちは前にも行った道よ」

元より〈地図〉をほとんど使っていなかったリアだけは、比較的正確に現在地を把握できているようだ。しかし、終始何事か考えている様子の彼女は、僕の方向音痴をフォローしきれずにいる。

「リア、少し休憩しよう」

「う、うん」

疲石に腰かけておけないと判断した僕は足を止め、リアとともにその場に腰を下ろす。

「十分を出たあたりから、ずっと元気がないよな。本当にどうしたんだ？」

「……な、なんでもないってばっ」

慌てた様子で首を振るリアに、僕は苦笑気味に溜息を漏らす。

「あのなぁ……、『なんでもない』は僕の専売特許だっただろう？　むしろリアはそれを

諫める役割だったじゃないか」

「う……」

バッが悪そうに口をつぐむリア。僕がそれ以上言葉を吐かずにじっと彼女を見つめていると、観念したようにリアはゆっくりと口を開いた

「……お父様に言われたことを、ずっと考えていたのよ」

リアの言葉に、王宮でのやり取りを思い出す

『――その変化を、必ずしも図書界の人々が望んでいるとは限らないとしてもか？』

「私がみんなのために良かれと思ってやっていたことも、結局はただの独りよがりだったのかしら……そうそう考えたら、いままでの私ってなんだったんだろう、って」

「リア……」

「ハルトにも、後先考えずに行動しすぎだ、なんて言われたこともあったわね　結局、アナタの言う通りだったわ」

そう言って力なく微笑むリアに、僕は衝動的に口を開く

「違う」

「ハルト？」

「違うんだ、リア。あのときは僕が間違っていた。リアは、決して考えなしなんかじゃない。君はいつだって仲間や皆のためを思って行動していたじゃないか」

「……それも、相手にとって大きなお世話だったら意味がないわ」

「そんなことない　行動の結果がどうであれ、心から相手のことを考えたその『想い』は堂々と誇っていいんだ」

「で、でも……」

「いまの僕なら分かる　リアが僕のためを思って言ってくれた言葉の全てが、現在の僕を支えてくれているんだ」

彼女がいなかったら、悠一を失った時点で僕は職員になっていただろうし、その後再び同じ間違いを起こしていたことにも気づかなかっただろう。

「ハルト……」

潤んだ瞳を縋るようにこちらに向けるリアに、僕は大きくうなずき返す。

「――今度は、僕が君を支える番だ。あの『異変』を解決しさえすれば、図書界の皆もいつかはリアの想いを分かってくれるだろうさ」

少なくとも、父親であるガラム上だけは、いまでも彼女の良き理解者でいてくれている。

「で、でも、ダンジョンを攻略しても、異変が元に戻らなかったら……」

「……」

不安げなリアの言葉ももっともだと思い、僕はしばし考えを巡らせる。

――ダンジョンとあの「異変」とに、何らかの関係がある可能性は高いが、そもそも誰が、何の目的であの「異変」を引き起こしたのか定かでない以上、ダンジョンを完全攻略すれば全てが元通りになるという保証も決してない。

「……ん？」

ふと周囲を見回し、僕はあることに気づく。アップデートされたことで、ファンタジー風な意匠から近未来的な様相へと姿を変えたダンジョン　それは、「現世界による図書界への侵食」と捉えられたあの異変と、どこか似ている。以前のダンジョンを第八階層までクリアしたことで、このアップデートが実施されたというのなら……。

「！　もしかして……」

――僕は、完全な思い違いをしていたのかもしれない。

「異変とダンジョン攻略が関連あるのだとしたら、むしろ……」

図書界で起こっていた異変は、はじめは緩やかなものだったと聞いている。その後、一時は収まったかに見えた変化が、あるときを境に再発し、急激に勢いを増したとも。

「……まさか」

ダンジョンを完全攻略すれば異変が収まるのではなく、迷宮攻略に向けた僕らのいままでの行動こそが、異変を引き起こす原因だったとしたら？

「ハルト、どうしたの……？」

リアが心配そうにこちらを覗き込む中、僕は必死にいままで得た情報を整理し直す。

「ダンジョン攻略を通して異変を発生させることが、このゲームの裏に隠された真の目的なのだとしたら……」

――一連の出来事が、全て『誰か』の意図によって引き起こされたものだとすると、思いつく該当者はただ一人。このダンジョンに迷い込んだときから常に傍で僕たちを導き、攻略を助け続けていた……、

「……Lv、か」

ゆっくりと口を開けた僕がそう口にした、そのとき、

【――ケケケ、正解ダ　もう遅すぎたがナ】

――突然、スマホから耳障りな合成音声が流れる。画面に目を向けると、そこには口を歪ませ笑うLvの姿が。

【やっぱり、最初に気づいたのはNAIクンだったか。ケケケ、流石ボクの助けをほとんど必要としなかった最有力プレイヤーの一人なだけあるナ】

「え、え……っ、何これ」

いままで淡々とメッセージを投げかけるばかりだったナビゲーターの突如とした変貌にリアが狼狽する中、僕は両面ーで笑うニヤを睨み付けながらゆっくりと口を開く。

「……なぜ、こんなゲームに僕たちが巻き込まれたのか、ずっと疑問だったんだ」

当初は、あまりにも不可思議な出来事ばかりで冷静な判断ができなくなっていたのか、この体感ゲームじみたイベントを流されるままに楽しんでいた僕たち「死亡」のルールが明らかにされ、過酷な状況に自身が置かれていることを強く実感した後は、ただただ生き残るのに必死で、この現不尽なゲーム自体の目的にまで考えが及ぶことはなかった。

「これだけ大がかりな舞台を作りしげ、本当かどうかはわからないが『なんでも願いが叶う』なんて馬鹿げた賞品まで掲げるくらいだ　その裏には、それに見合うだけの意図が隠されているはずだ」

【ケケケ、どうやらNAIクンには全てお見通しのようだナ。せっかくダ。ここまで辿り着いた褒美ニ、このゲームの真実を明かそうじゃないカ】

――[ニヤ]により語られたゲームの真実　それは、『世界の改変』にあった。

【前ニ、このダンジョンは現世界と図書界を繋ぐ融合世界だと説明したガ、あれは正確じゃなイ。ここハ、本来交わることのなかった二つの世界を接続したことで生じタ、バグの塊なのだヨ】

「バグ……？」

二つの世界を接続＝＝、　仆、何の目的で？

【図書界で一部表面化した異変ハ、まだ限定的なものに過ぎないガ、ダンジョンが完全攻略されれバ、晴れて二つの世界は完全融合シ――新しい一つの世界とシテ、生まれ変わるのだヨ】

「なっ……!?」

悪い出すのは、消えた魔導書と入れ替わるようにスマホが発見された図書界。

「＝＝僕たちは、ずっとお前の掌の上で踊らされていたってことか」

ダンジョン自体が[ニヤ]の言う『バグの塊』なら、各フロアの『攻略』とは、そのバグを

取り除く作業――デバッグに他ならない。僕らプレイヤーは、知らず知らずのうちにデバッガーとして働かされていたことになる。

【デバッグは既に九割方終了シ、残る最適化はシステムの自浄作用でも実現できル。アップデート後の宝探しハ、余興のようなモノだからネ】

もう誰にもこの大きな流れを止めることはできない、とこいつは言う。だからこそ、ここまで自身の目的を明らかにしたのだろう。

「願いを叶えるなんて安易な餌で釣られて、延々と、働き蟻のごとく動かされていたとはな……」

自嘲するように発したつぶやきに、思わぬ応えが返ってくる

【オイオイ、勘違いしてもらっては困るゾ。あくまで世界の改変ハ、キミたちプレイヤーの願いに基づいて行われるのだからサ】

「え――」

圧倒的な理不尽さを突きつけられ愕然とする中、思わぬ事実が告げられる。

【ボクが行ったのハ、二つの世界を繋ぐこのダンジョンを作り上げたことだけダ。世界のシステムアップデート――変革ハ、あくまでキミたちプレイヤーの望むイメージト、願いを叶えるべくとった行動によって、引き起こされたものなのだヨ】

改変された世界は、僕たちプレイヤーが望んだ姿であり、ゲームシステムによって誘導されたとはいえ、変わることを望んだのは僕たち自身だとでも言うのか……。

【プレイヤーに選ばれているのハ、いまの世界の有り様に不満を抱えた者たちダ。自覚しているかは分からないガ、皆、各々の世界における異端――バグのような存在だったはずだヨ。……まア、現世界側のプレイヤーがこれほどの数になるとハ、予想してなかったけどネ】

ここでの言う「不満」とやらがどの程度のものか分からないが、僕らの年齢で世界に満足しきっているなんて悟りきったヤツ、そうそういないだろう。バグ呼ばわりは心外だ。

【ケケケ、中には自分の理想が実現すれバ、みんな幸せになれるなんテ、権力者の騙りに

満ちた者もいたようだガゥ】

「つ……ぃぃ……」

LvMでのひと言に、リアが衝動的に顔を手で覆う。

「違う――、私は、あんな風に世界が変わって欲しかったわけじゃ……」

「古い風習や考え方に固執し、一向に新しい技術や発想を取り入れようとしなかった図書界に憤りを感じていたリア。しかし、あんな風に人々が怯えながら日々を過ごす世界を、彼女が望んでいたはずがない

【キミたちが望んだ結果ガ、この改変を引き起こしタ　世界を変革した英雄として、堂々と元の世界に凱旋するといいサ】

ケケケ、と笑うLvMに、後ろめたい気持ちが拭えないプレイヤーたちは、返す言葉もなく口をつぐむ――そんなわけが、ない。

「……ふざ、けるな」

僕は商ぶる感情にまかせるまま、思いの丈を吐き出す。

「お前のやっていることは、結局は僕たちの弱さにつけいって責任を押しつけ、自分の望む結果を得ようとしているだけだろ？」

【だが、この変革をキミたちが心のどこかで望んでいたのモ、また事実のはずダ】

「そりゃあ、誰だって『こうなればいいのに』と願うことくらいあるさ　それでも思い通りに行かない現状となんとか折り合いを付けながら、皆必死に生きてるんだ。：誰も、実際に全ての願望を強引に実行しようなんて、本気で思っちゃいない」

自己の考え方を全て押しつけようとすれば、意見の相違から必ずといっていいほど衝突が生じる。――周囲の人々を大切に思うからこそ、どうしようもない部分は意見をぶつけ合い、時に妥協しながら、互いが幸せになれる道を探っていくのだ。

「お前のやっていることは、善意の押し売りですらない、ただの自己満足だ。ましてや、その責任を他者に放り投げるのは――卑怯だ」

【……ケケケ。だったラ、その考えが正しいことを証明してみせるといいサ。何度も

言うようだが、もう手遅れダ。せいぜい無駄に足掻いてみるとイイ。――ボクの予想を超えるプレイヲ、期待しているヨ】

合成音声による不快な笑い声が響き、【Sister】との通信が終わる。

――ピピッ

同時に、〈掲示板〉に誰かからDMが届いたらしい通知音が、スマホから聞こえる。

【Ruby：急いで第五階層まで来て！　巻田クンたちがピンチなの！】

「！　……リア！」

「う、うんっ！」

即座にうなずき返したリアとともに、下層へと駆け出す。

「？　なんだ……これは」

すると、ダンジョンの奥深くに進むにつれ、周囲の様子がおかしいことに気づく。突然目の前に壁が出現したかと思えば、すぐさま消えるなど、フロア全体の構造が目まぐるしく変化しているのだ。

「っ！　システムアップデート、か……！」

思い当たるのは、先ほどのLv.との会話。聞いてもいない手の内をペラペラとしゃべり出したのは、既に最後の最適化とやらが進行中だったからなのだろう。

「山吹ー　胡桃沢！」

「！　竜胆タンー！」

「リアさんも、こっちです！」

第九階層入り口で僕たちを待っていた山吹らとともに、最奥部へと向かう。

「なっ……!?」

そこには、壁際に追い詰められた草田たち複数のプレイヤーと、いまにも彼らにおそいかからんとする見覚えのあるモンスターの姿があった。

「巨大合成獣か……！」

僕らが四人がかりでやっとの思いで撃破した強敵が、システムアップデートの余波で再び出現したようだ。

「！」

しかし、その姿は周囲のダンジョンと同様に不安定なものとなっている。

「もしかして……」

ある可能性に思い至った僕は、即座に仲間へ声を掛ける

「胡桃沢！　このフロアの情報を読み取って、僕に伝えてくれ！」

「は、はいっ。――〈接続・スキャン〉！」
「山吹は胡桃沢のフォローを頼む！」
「任せといて！　――〈装飾・アップ〉！」
胡桃沢のスマホから伸びた光の蔦がダンジョンへと接続　そのまま僕のスマホにまで伸び、情報を送り込んでくれる。
「っ……！」
頭の中に規則性のない情報の泥流が流れ込む。一貫性のない抜け穴だらけの構造体……。
これなら、崩点を見つけるまでもない。
「――〈脱、獄、クラック〉」
眼前の壁に触れた手から、光の線が伸びていく。すると、目まぐるしく構造を変えていくフロア全体が、そのスピードを加速させる――やがて、巨大合成獣までもがその変化の波に呑み込まれ、一瞬にして姿を消す。
「ハルト、いまのって……」
戸惑うリアに説明は後だと返した僕は、幸田たちの元へと歩み寄る。
「大丈夫か？」

「あ、ああ……、助かった」

戸惑いながらもうなずく茶田。他の皆も無事なようだ。

「急いで第一階層まで戻ろう。まだ十の階層にまで被害は及んでいないはずだ」

どうやらアップデートは下の階層から順を追って行われているらしい。

「由吹！　胡桃沢！　体力が少ない連中を回復してやってくれ！」

手持ちの〈回復〉の数を確認しながら、僕がそう叫ぶと、茶田が呆然とした様子でつぶやく。

「お前……、あの童胆、だよな？」

学園ではろくに会話さえなかった僕の変わりように驚いたのだろう。内心自分でも驚きを隠せない僕は、思わず苦笑する。

「童胆クン。きっきのメッセージ聞いてたよね？」

「H.Eさんって、童胆くんのことですよね……」

慌てた様子でこちらにやってきた由吹と胡桃沢がそう尋ねてくる。どうやらH.Eからのメッセージは、他のプレイヤーにも届いていたようだ。

「「異変」って、童胆クンから教えてもらった図書界の話に出てきたヤツだよね」

「あ、あれって、わたしたちのダンジョン攻略が原因だったのですか……？」

「う」

リアの身体が怯えたように小さく震える。
「……大丈夫だ」
「ハル、ト……？」
彼女の肩にポンと手を置いた僕は、不安げな瞳を点すリアに大きくうなずき、山吹らに振り返る。
「山吹、他のプレイヤーたちに攻略を直ちに中止して、スタート地点の大広間に集まるよう頼めないか？」
「う、うん　いいけど、どうするの？」
首をかしげる皆に、僕は力強く答える。
「――僕に、考えがある」

VIII

「[redacted]・バッファオーバーフロー？[redacted]」

第一階層スタート地点の人仏間に集まった全プレイヤーを前に、僕は起死回生の一手となる策を告げる。

「これまでも、〈掲示板〉にアクセスが集中したときなんかに、軽いラグが発生することがあっただろう？　あれは、システムが確保していた領域以上のデータが一度に送り込まれたことで、一時的なエラーが引き起こされていたんだ」

「それを全プレイヤーで意図的に起こそうってわけ？」

「アップデート作業によってシステムが不安定な状況で、これだけのプレイヤーが一斉に同じアクションを起こせば、いままでにない規模のオーバーフローが起こせるはずだ」

「で、でも、オーバーフローを起こして、その後はどうするつもりなのですか？」

胡桃沢の疑問はもっともだ。大きなラグや一時的なエラーを発生させたからといって、おそらくシステムアップデート自体に大した影響はないだろう。……しかし、

「バッファオーバーフローは、システムの弱点でもある　そこで、コイツの出番ってわけだ」

僕は自身のスマホを掲げ、告げる

「――発生したセキュリティホールに僕の〈脱獄〉を組み合わせて、システムの根幹部分へ物理的に侵入する」

「！　システムに侵入――。そんなことができるのですか？」

「おそらく、な」

《脱獄》の力がダンジョン自体にも及ぼせることは確認済み。セキュリティホールを作り出す作業を音に肩代わりしてもらえれば、僕は「侵入」だけに集中することができる。

「……無謀の作戦は分かった。けど、さ」

そのとき、一同の中心に立つ薬田が、言いにくそうに声を上げた。

「ヒエラの目的ってのは、いまの世界を作り替えることなんだろ？　それってそんなに悪いことなのか？」

「それは……」

痛いところを突かれ、思わず口をつぐんでしまう。

「ここに集まったヤツらってのは、いまの世界に不満を持っていた連中なんだろ？　その望みを叶えてくれるってんなら、頼ったり叶ったりじゃないか。無理して逆らう必要もないと思うんだが」

「□□□□□□□□□□」

茶田の意見に同意するように、皆、無言でじっとこちらを見つめてくる。

「っ」

これまでずっと人と向き合うことを避けてきた僕は、その圧力に思わず怯みかけるが、

「だめ……、それじゃあ、だめ……なの」

誰にも聞こえないほどか細い声が、すぐ傍に立つリアの口から漏れる。「異変」に見舞われた図書界の現状を目の当たりにし、その原因が自身にあるとにべに断じられた彼女は、いまどんな心境なのだろう。

「……」

僕は無意識で自身の胸ポケットをギュッと握りしめる。――そこには、いつも率先して前に立ち、僕らを導いてくれていた親友の形見が入れてある。

「……確かに、茶田の言うことも一理ある。僕たちブレイヤーの願いとにべの目的は、最初から一致していたわけだからな」

なけなしの勇気を振り絞り、再び口を開いた僕に、皆の視線が一層の強さを増す。

「だろ？　それなら……」

「――ダメだ」

声を強めそう断言した僕は、

「自分たちの世界を都合良く変えることができれば、僕らは幸せかもしれない。でも、それは、他の世界を……関係ない人々を犠牲にしてまですべきことじゃない」

「ハルト……」

傍のリアがぐっと身体を強張らせるのを感じる。しかし、僕はあえて言葉を続ける。

「それに、誰かにとっての理想世界が、実際にその世界で暮らす人々にとって必ずしも望まれているとは限らない。Levのやろうとしていることは、自分の価値観を一方的に押しつけるだけの自己満足だ」

「っ……」

シンッと静まりかえる人広間。各々が気まずそうに顔を伏せ、リアの身体の震えが徐々に強くなっていく中、僕は改めて皆から注がれる視線と一人一人真正面から向き直り、告げる。

「――ただし、世界をより良くしようとする想いや、それに向けた努力は、決して悪いことじゃない。それは、誰も否定したりすべきことじゃないはずだ」

「っ！」

リアの震えがピタリと止まり、僕の上着を摑む手がギュッと強くなるのを感じる。

「これだけのことをしておきながら、【ロア】は起こったことの責任全てを僕たちプレイヤーに押しつけようとしている。そんな卑怯な真似、許せるものじゃない。そうだろ？」

皆が伏せていた顔を上げ、真っ直ぐにこちらを見つめ返してくる中、僕は声を上げる。

「信じる道があるなら、目指す夢があるなら、手に余る大きな力に頼ろうとせず、自らの手で一つずつ実現するべきだ。それによって起こること全てに責任と覚悟をもって、な」

口をつぐむ一同を前に、僕は勢いよく頭を下げる。

「このお願いも、僕の独善的なものでしかないかもしれない　それでもよければ皆の力を貸して欲しい。――頼む」

「ハルト……」

大きく頭を下げた僕と無言のままの一同とを、不安そうに見つめるリア　そして、

「……まったく、一人で格好つけすぎだって竜胆クン。ねえ、みんな？」

呆れたように山吹がつぶやく。顔を上げると、皆と繋がりの深い彼女がはじめに声を上げたことで緊張の糸が切れたのか、他のプレイヤーたちも苦笑しながら口を開き始める。

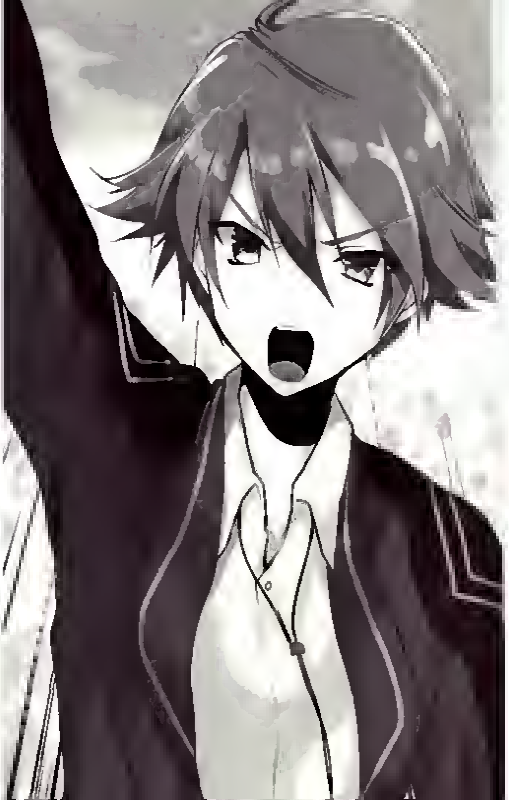
「確かに、このままいいように操られっぱなしってのは癪だよな」
「そうそう。世の中そう甘くはいかないことを、身をもって分からせてやろうぜ」
「何を偉そうなこと言ってるのよ。みんなに付いていくだけじゃなくて、たまには自分の意志で行動しなさいよね」
「ぐっ……。これは俺の意志で賛成してるんだって！」
「ゲームマスターに反抗するプレイヤー、か。これこそゲームって感じだな！」
「うん、なんだかいままでで一番燃えてきたかも……！」

ほっりぽっりと上がり出す声が、やがて大きなうねりとなり、皆の熱気を高めていく。
「は、ハルト……？」
徐々に盛り上がる一同に、事態の展開についていけていない様子のリアが、おろおろと慌てだす。
「り、竜胆くん、すっかりリーダーの貫禄が板に付いてきましたです……！」
「アハハっ。こりゃあ本格的にぼっちは卒業かな！？」
胡桃沢と山吹が目をキラキラさせながら、こちらへやってくる。
「リーダーなんて柄じゃないって。こういう役割はむしろ――」

思い起こすのは、いまはもういない友の後ろ姿。常に皆の先頭に立ち、仲間を支え続けてくれた彼の数十分の一でも、僕は役割を果たせているだろうか……。

「――僕たちの手で、このくだらないゲームを終わらせよう！」

「「「おぉ――――――



「幸田クンからも連絡来たよ！　準備オッケーだってー」

「こ、こちらも……、準備整った、そうです……！」

スタート地点で待つ僕とリアの元に、伝達係を買って出てくれた山吹と胡桃沢の二人が合流する。現在、他のプレイヤーたちは、第二層層の各所に散らばってもらい、来る作戦実行のタイミングをいまかいまかと待ちわびている状況だ。

「ふう、なんとか間に合ったか……」

徐々にアップデートによる侵食が進む状況の中、先ほどまでプレイヤーたちは一丸となって、作戦を実行に移すべく必要な「あるアイテム」の収拾を全力で進めていた。

「〈全回復〉の魔導書、ね。どうしてコレを選んだの？」

リアの質問に、僕はスマホを操作しながら答える。

「前に、山吹の〈装　飾（アクセサリー）〉で強化したとき、ダンジョンに大きなラグが発生したのを思い出してな。おそらく回復魔法は攻撃魔法よりも大量のデータ移動が起こるんだろう」

「？　攻撃魔法で与えるダメージよりも、体力を全快させるほうが、大きなエネルギーが発生するってこと？」

「ああ。念のため胡桃沢にも確認してもらったから、問題ないはずだ」

僕のアイデアを成功させるため、これまで〈接続〉で集めたダンジョンの情報を駆使して最も効率的かつ効果的な手法を算出してくれた胡桃沢には、感謝してもし足りない。大

勢のプレイヤーが連携して行動できるよう、〈掲示板〉を使って八面六臂の活躍を見せてくれた山吹も同様だ。

「……ありがと」

「？」

突然礼を言われ首をかしげる僕に、頬を薄く染めたリアがぎこちなく言葉を続ける。

「『世界をより良くしようとする想いや、それに向けた努力は、決して悪いことじゃない』って言ってくれたじゃない。あれ、すごく嬉しかった」

「何事もやりすぎは禁物だけど、な　何もしないでいるよりはよっぽどいいさ」

いつの間にか、自然とそんな考え方ができるようになっていたことに、改めて驚く。

「……私、いままでの自分を全部否定されたような気がしてたの。自分がずっと願い、信じてきたものは、誰も幸せにしないんじゃないかって」

「そんなことないさ。現に、ここに一人、リアのおかげで救われた人間がいるんだ」

絶望の淵にあった心を支えてくれたリア。山吹や胡桃沢といった仲間とともに、自分一人の世界から僕を引っ張り出してくれたのも、同じ過ちを繰り返そうとしていた愚かな行動を正してくれたのも、全て目の前にいる少女だった。

「いままでちゃんと言う機会がなかったけど、本当に感謝してる――リア、ありがとう」

「ハルト……」

照れながら礼を返すと、瞳の端を微かに光らせながらリアが優しげな笑みを浮かべる。
「あのー、お二人さん。イチャコラは全部終わってからにしませんかー？」
「ちょ、ちょっと、瑠美さん……」
「「ぴゃ」」
すっかりその存在を忘れていた二人の言葉に、一瞬にして我に返る僕たち。いつの間にかキスでもしそうなほど接近していた身体が、バネ仕掛けのようにパッと離れる。
「……そろそろ、知らせが来るころだな」
「そ、そうね、いつでも対応できるようにしておかないと、ね！」
ニヨニヨと生暖かい視線と笑みを注ぐ二人はあえて無視して、僕らが気を取り直した、そのとき、

――ピピッ

「！　来た！！っ」
待ちに待っていた通知音が、スマホから発せられる。第一階層出口にいるプレイヤーが、侵食がこの階まで及んだことを知らせるメッセージが届いたのだ
「胡桃沢！　山吹！」

「は、はいです！　――〈接続・リンク〉！」
「オッケー！　――〈装飾・ロング〉！」
まずは胡桃沢が自身のスマホを山吹のスマホと接続し、〈装飾〉を起動させる。
「……よしっ」
たちまち〈接続〉の効果範囲が広がり、リアや僕のスマホ、そしてその隣のプレイヤーへと次々に接続　やがて、全プレイヤーのスマホが同一ネットワークで繋がれる。
「山吹っ、頼む！」
「はいはいっと！　――〈装飾・アップ〉！」
さらに山吹が〈装飾〉を重ねがけし、ネットワークLのスマホにある〈全回復〉を全て〈極回復〉へと変化させる。
「「「「いまだっ……！」」」」
このダンジョンに来て初めて、全プレイヤーの気持ちが一つになる　次々と起動した〈極回復〉が、まるで迷路をなぞるように光の帯を生み出し、やがて渾然一体となる
――ブゥゥゥ

いままでにない強烈なラグが発生し、大きなうねりがダンジョン中に響き渡る

「――〈脱獄（クラッタ）〉――」

ただ一人、〈神回復〉を実行していなかった僕が、すかさず〈脱獄〉を起動する。ターゲットは、これまでただ一つその姿を変えることがなかった――そして、ゲーム開始時からいままで一度も開かれることがなかった、スタート地点に鎮座する巨大な扉

「っ」

途端に、急激な情報量が脳内に流れ込んでくる。

――ダンジョンと現世界を繋ぐ門でもある扉。迷宮が完全攻略されるまで決して開かれることのないそれは、同時にシステム領域との境界線の役割も果たしており、アップデート時には上書きデータを運ぶべく――目に見えない、隠された扉が開く。

「――ここだっ――」

仲間たちの強力なサポートを得、思考の激流から求めていた糸口を見つけ出した僕は、光の鎖を纏った腕を扉へとかざす――すると、

「――」

扉の中心に小さな亀裂が生まれ、徐々に広がり、直径二メートルほどの穴へと変化する。その向こうは、まるでブラックホールのような禍々しい暗黒世界が広がっていた

「――それじゃあ、行ってくる」
背後には、望みを僕に託すべくありったけの期待を込めた――無数の輝く瞳があった。
「ハルト……」
「必ず戻ってくるから、そんな顔するなって」
「う、うん……」
今生の別れのような表情を浮かべるリアに苦笑する。
「……こくり」
彼女の傍で何やらうなずき合った二人が、同時にリアの身体に手を置く。
「心配なら、さるぴあチャンも行ってくればいいじゃんっ」
「こ、こちらのことは、わたしたちにお任せ、です……」
「え？　で、でも……」
「つべこべ言わない！　はい、どーんっ！」
二人に突き飛ばされたリアの身体がこちらへ飛び込んでくる。
「うおっ！」
「わわっ！」
まさに穴へと入らんとしていた僕は彼女の身体を受け止めることができず、二人して穴の向こうへと身体を滑らせてしまう。

「竜胆クンのことは任せたよー」
「こ、ご武運をお祈りしてますです……！」
暢気に手を振る二人に何かを言い返す間もなく、僕たちの身体は深い闇へと沈み、そして……。
「……！」
まるでエレベーターに乗ったときのように、急激に身体が浮かび上がる感覚に包まれた。

*

「――ここ、は」
数秒の後、僕らはいままでに見たことがない意匠のフロアに立っていた。周囲は金属ともガラスともつかない奇妙な質感の素材でできており、まるで大きなディスプレイパネルのように淡い光を放っている。目を凝らすと壁や床、天井のいたるところで血管のような光の線が右に左にと、せわしなく何かを運んでいる様子が見て取れる。
「……システム領域、か？」
確信はないが、まるで複雑なプログラムをそのままイメージ化したような不思議な空間に、これまで辿り着いたことのない領域に足を踏み入れていることだけは実感できる。

「！　ハルト、あっち見て……」

リアが指さす方向に目を向けると、細長い回廊の先から注がれる光が、手招きするように微かに明滅している。

「■■■行くぞ」

「……うん」

ごくりと息を呑み、僕らはゆっくりと歩き出す。そのとき、

――ピピッ

突然、スマホがメッセージ受信の通知音を奏でる。

【Lv：よくここまで辿り着いたナ　最奥部で待ってるゾ】

「当然、一部始終は監視されてる……か」

自身の計画を阻止しようと動く僕らを止めなかったのは、いまさらどう足掻いても無駄だと高を括っているのか。それとも……、

「この先に、Lvがいるってこと？」

「どうやらそうらしいな」

先ほどの身体が浮かび上がる感覚。もしやここは、最上部だと思っていたスタート地点の、さらに上方に存在する空間なのだろうか。つまり、Lv.1ではこれまでずっと、プレイヤーたちの行動を文字通り上から――まるで神であるかのような立場で、見続けていたということか。

「この可愛らしい見た目のモンスターが待ってるのかしら……？」

リアがスマホの画面を指さし、おそるおそるつぶやく。

「いや、前も言ったけど、それはアバターだからな。……中身は髪面のオッサンだったりってこともありえるぞ」

「や、やめてよ……」

硬い表情をほぐそうと軽口を叩くが、僕も同じく緊張しているためか不発に終わる。

「……論より証拠　これからその顔を拝ませてもらえばいい。ほら、そろそろ着くぞ」

「そ、そうね……！」

目的地に近づくにつれて、徐々に光が強くなっていく。

「っ！」

狭い回廊から抜け出ると、籠もっていた空気が広がっていく感覚とともに、目がくらむほどの光が弾け、周囲に霧散していく。――そして、

「「えっ……？」」

ドーム状の大空間の中央に立つ姿を目にした僕らは、言葉を失う。

「どう、して……」

呻くような声が、知らず知らずのうちに口から漏れ出る。目にした光景を頭が理解することを拒むように、全ての思考が停止する。

「――よくぞ来タ、私が魔王ダ……なんてな」

おどけたように笑みを浮かべるその姿は、ここにいるはずのない人物――橋本上のものだった

XIX

「ど、どういうこと……？　なんで、橘君が……」

驚愕に目を見開いたリアは、呆然とつぶやく。

「驚くのも無理はないか。つまり……」

橘が宙に手をかざし、指を動かすと、その場に浮いスクリーンが表示される。

――ピピッ

【ヒント、こういうことサ】

「『P』」

スマホにヒントからのメッセージが表示される。

「橘君が『P』……だったの？」

『ま、そういうことだ』

「だ、だって、橘君はあのとき『死亡』になったんじゃ……」

『ははは、俺が「死亡」した瞬間は誰も見てない……だろ？』

「ア、で、でも、どうして……」
「プレイヤーの生の声を聞いたりするには、自分もプレイヤーとして参加するのが一番ってことさ。さりげなくプレイヤーをサポートしたり、逆に邪魔したりもできるしな」
「じゃあ、いままでずっと私たちを騙していたっていうの……！」
「結果的にはそういうことになるかな。いやぁ、すまなかったな」
「そんな……っ！」
あまりにも手酷い裏切りに、思わず両手で顔を覆うリア。
「……」
「どうした？　竜胆。さっきからひと言もしゃべってないぞ。驚きのあまり声も出ないってか？」
ジッとその様子を見つめていた俺に、橘――[ニヤ]が肩をすくめながら声を掛けてくる。
……しかし、
「――そろそろ小芝居はやめたらどうだ？」
「なんのことだ？」
「は、ハルト……？」

大きく溜息を吐きながらつぶやいた僕に、[Liv]とリアから困惑の視線が投げかけられる。

「リアにはさっきも話したばかりだろ。ゲームの世界じゃ、プレイヤーの見た目を好きなように変更できるって」

「！　アバター……！」

「ましてや、ゲームマスターである[Liv]なら、アバター変更なんて自由自在だろうさ。――この橘は、偽物だよ」

「……どうして偽物だと言い切れる？　アバター変更が可能ってだけじゃ、お前の仲間だった橘悠斗とこの俺が別人だとは断言できない！――そうだろう？」

確かに[Liv]の言う通りだ。ゲーム開始当初から、[Liv]がこの姿でずっと自分たちの傍にいた可能性だってゼロじゃない。しかし、

「証拠は……これだ」

「！　それはっ……！」

僕は胸ポケットからあるものを取り出す。それは、ディスプレイに「PLAYER DISPLOW」と表示されたままの――橘が遺したスマホだった。

「このスマホが何の反応も示さなかったことがその証拠だ。……コイツはお前のことをご主人様とは認めてないってよ」

「っ――……スマホが反応を示さなかったからって、俺が偽物である決定的な証拠にはな

らないだろう？』

「その通り。僕だってそんなことは百も承知だ」

僕の予備スマホがリアを所有者として登録できたように、現在このスマホが未登録状態に戻っているだけという可能性もある。

『？　だったらどうして……』

僕が、目の前の橘を偽物だと断じる根拠は、ただ一つ。

「……勘だ」

『え？』

「ダンジョン内で共に過ごしたアイツがこんな裏切りをするヤツだなんて、どうしても思えなくて、な」

『……はは、「思いたくない」の間違いじゃないのかっ』

「ああ、そうかもな」

目の前の男を指さし、僕は告げる。

――僕は、僕が信じるものに従って行動する。くだらない真実なんて、美食らえだ」

ましてやここはLMEの作り出した世界、目に見えるものが全て真実とは限らない。

「……くっくっく」

すると、心底可笑しそうに笑うこの声が、徐々に人工的な合成音声へと変化していく。

「――まさか、そんな強引な論法で見破ってくるとは思わなかったゾ。まったク、人間とは心底不条理な生き物だナ」

「ヲ！」

橋の見た目をしていたそれは、ゆらりと像が崩れると、続いて僕、リア、山吹、胡桃沢、幕田といった姿へと変化していく。

「ご察しの通り、ボクは姿を自在に変えることができル。彼の姿をしたのハ、ほんのジョークみたいなものサ」

「ヲ！随分と、悪趣味だな。どうやら冗談のセンスはないらしい」

「ケケケ、今後精進するヨ」

「いい加減に、本当の姿を見せたらどうだ？　自由にアバター変更できるなら可能だろ」

「悪いガ、それはできなイ」

「ヲ！ふん、こそこそと卑怯なのは変わらずか」

「勘違いしてもらっては困ル、それにはちゃんとした理由があるのサ　――そもそモ、ボ

クには「本来の姿」というものがないのだからネ』
『…プログラムや人工知能の類とでも言うつもりか？』
『当たらずとも遠からズ、というところだナ。もっとモ、ボクは別ニ、誰かが作ったプログラムというわけじゃあないけどネ』
『どういうことだ？』
『キミは図書館の存在を知ったとキ、こうは思わなかったカ？　――他にもこんな異世界ガ、無数に存在するんじゃないカ、とネ』
『っ！　まさか……！』
　単旧の姿を模したまま、[illegible]は天を仰ぎ、遥か遠くを見つめながらつぶやく。
『――情報化の極限まで辿り着いたとある世界でハ、人類は全てボクのようにデータ上の存在となっていル。時間や空間といった概念から解き放たレ、永遠に老いることもなク、幾多の世界を股に掛け観測・移動できル。それがボクたちサ』
『人類が全てデータに……？』
『要するニ、現実がゲームみたいになっちまったってことだナ　まさニ、理想の世界ってやつダ』

「ね、ねえ、二人とも何を訳の分からない話してるのよっ！」

Luvの話す内容が理解できないリアが困惑する中、僕はふとある疑問に至る。

「……そんな理想世界の住人であるお前が、なぜ現世界と図書界を融合しようとするんだ？」

当然通り着く疑問に、Luvは「ケケケ……」と笑い続ける。

「理想の世界なんテ、そんなのは嘘っぱちだからサ　――あんな世界、悲劇以外の何物でもなイ」

「悲劇？」

「何度でもリセットでキ、終わりの存在しない人生なんテ、クソゲーもいいところダ。……だからボクハ、自分が理想とする世界を造ろうとしたのサ」

「それが、現世界と図書界の融合だと……？」

「元を辿れば一つの大きな幹から枝分かれした「可能性の欠片」である両世界を繋ギ、それぞれの要素を混ぜ合わせることによっテ、本来の道とは異なる方向へ、可能性を修正することができるのサ」

「本来の道？」

「例えバ、キミたちが暮らす現世界ハ、このままテクノロジーの進化や情報化が進めバ、遠くない将来、ボクらのような「悲劇」に見舞われル。その前二、世界の有り様ヲ、抜本

的に変革する必要があったのサ」

「それが、お前の言う「理想の世界」とやらか」

「病的とも言える速度で技術革新――破滅へと進む現世界ト、一切の変革を拒絶しゆっくりと衰退していく運命しか残されていない図書界。両者の要素を融合すれバ、ちょうどいいバランスがとれると思わないカ？」

「この話す内容が事実だとしたら、両者にとってはいいことずくめにも見える、このダンジョンに来る前の俺なら、諸手を挙げて歓迎していたかもしれない。

「……そのために、橘や他のプレイヤーたちは犠牲になったっていうのか？」

変化には痛みがつきもの、なんて綺麗事を聞くつもりはさらさらない。真実も知らされぬまま消えていった彼らの立場はどうなるのだ。

「ン？　……あア、言い忘れてたけド、「死亡」したプレイヤーは存在が消されるってアレハ――嘘ダ」

「はぁ？」

思わず間抜けな声が飛び出る。

「アアはえバ、本気でデバッグ作業を行ってくれると思ってネ。ケケケ、あまりにショックが過ぎテ、ほとんどのプレイヤーが攻略を断念しかけたときハ、流石に焦ったヨ」

「なっ……！」

「人一人の存在を「なかったことにする」ってのハ、取り返しの付かない大きな「歪み」を世界に作り出ス　そう気軽にやっていいモノじゃないのサ」

「じゃあ、「死亡」したプレイヤーたちは、　休……」

「いまハ、調ゲームとして、とある空間に隔離させてもらっていル　ダンジョンが完全攻略された暁にハ、まとめて元の世界に戻してやるつもりだったのサ」

「ってことは……」

ある希望がわき始めた僕に、またも信じられない事実が告げられる。

「ただシ、「橘悠一」だけは別ダ　なぜなラ――彼は、既に死んでいた人間だからネ」

「!?」

橘が「死んでいた」人間。　休どういうことだ？

「本来の「橘悠一」ハ、一年前に現世界で既に死亡していル。ダンジョン内に存在した彼ハ、プレイヤーの攻略をサポートしてもらうベク、データを元にボクが忠実再現したNPCだったのサ」

「なっ……」

「彼が登場したのハ、「LEVELNINTH」が起動されタ、まさにその瞬間ダ　キミたちには

ダンジョン内限定で、認識操作……都合のイイ記憶のすり替えを行っていたのだヨ』

『!?』

ふいに、図書館のあの部屋に、橘が現れたときのことを思い出す。

『お―っす。こんなところにいたのか』

『……誰だ？』

そうか、あの瞬間、僕には橘に関する記憶が一切なかったんだ。記憶力に自信があるという山吹が、橘のことだけは記憶が曖昧というのも妙だと思っていた。それに……、

『……随分と古いモデルのスマホだな』

『え？　そうか？』

何世代も前の型のわりに、妙に綺麗だった橘のスマホ……そして、

『……必要になってからじゃあ、遅いかもしれないぜ』

『やらずに後悔するよりよっぽどいいからな』

「お前は悔いの残らないように生きてくれよ、――達人」

「っ……！」

自分が既に故人である自覚が、あのときの橋にあったのかどうかは分からないが、アイツの言葉に、こんなにも重い意味が込められていたなんて……。

「思った以上に早く退場してしまったが、彼ハなかなか良く働いてくれタ。こうしてボクのルまでキミたちがたどり着くまでに成長したのモ、彼のおかげだナ。こういったイレギュラーが発生するから、彼のような要素ハ、ゲームに不可欠なんだヨ」

「ふざっ……けるな！」

人一人の生をこうも軽々しく扱うLaVの物言いに、思わず激昂する

「――（脱獄・クラック）――」

ワンオフアプリを起動させた僕は、LaVに向かって駆け出す

「ふム、最後の最後デ、世界の行く末を運命に委ねるのモ、また一興カ」

小さくつぶやいたLaVの姿が大きく変形し、まばゆいばかりの光に包まれる。

「はあああああああ

感情の高ぶるまま、光の中心を目指し拳を突き出す。
「ハルト……？」
「！」
背後からリアの声が聞こえると同時に、ガキンッと硬質な音が生じ、拳が何かに阻まれる。
「……特別ニ、いいことを教えてやろウ」
目の前に現れたのは、スマホに表示されていたマスコット然としたキャラクターとは似ても似つかぬ、凶悪な牙をむき出しにした光り輝く猛獣。
「この身ハ、ダンジョンを構成する要素そのもノ。ボクを倒せバ、世界の変革は全てリセットされル。――さア、エクストラバトルの始まりダ！」
激しい咆哮とともにそう叫んだEnemyによって、最後の戦いの幕が切って落とされた。

XX

「――〈脱、獄、クラノク〉――リアっ、頼む！」
「分かってるわっ！――〈回復〉！」
後方からリアによる体力回復のサポートを受け、再び〈脱獄〉を起動する。
「ケケケ、果たしてこのボクを解析できるかナ」
急激に冷めていく頭の中で、膨大なデータが高速回転を始める。
――元は全て一つの大きな世界であった数多の並行世界。無数に枝分かれし決して二度と交わることのなかった一つの世界を繋ぐべく生み出されたダンジョン。異なる要素が衝突することで発生したバグが、モンスターや数々のトラップとして実体化した迷宮。それらバグが取り除かれ、ボトルネックが解消されることで両世界はやがて完全融合を果たす。
「――〈回復〉！」
「――〈回復〉！」
「――〈全回復〉！」
いままでにない情報量にあっという間に体力が尽き、そのたびにリアが回復魔法でフォローするということを繰り返していく。

「まだまだっ……、っ!?」

そのとき、脳内に注ぎ込まれていたデータが逆流するように思考を著しく乱していく。

『いまはシステムアップデートの真っ最中だ。当然、発生したセキュリティホールは修復されていく。その速度を上回るには、少し速さが足りないんじゃないか？』

「くっ……！」

解析を一から再開すべく、もう一度〈脱獄〉を起動しようと試みる。しかし、

「ハルトー〈回復〉も〈全回復〉も、もう残ってないわ……」

ストックしておいた回復魔法が、早くも尽きてしまう。

「くそおおおおーーーーーっっ!!　――〈氷拳〉！」

仕方なく、自身のスマホに残されていた攻撃魔法の一つを拳に込め、そのままヒマへと殴りかかる。

『ケケケ、今度は肉弾戦か？』

氷の刃を纏った拳が、ヒマの胴体を激しく切り裂く。しかし、自己修復プログラムの一種か、損傷した箇所はみるみるうちに治り、有効なダメージを与えることができない。

「――〈炎球〉！」

ロッドに標準搭載された魔法を使って、リアが攻撃をサポートしてくれる。

「クッ……！」

炎球が直撃した箇所に続けざまに拳を叩き込むと、修復速度が遅いことに気づく。
「行けるぞっ、リア！」
「うんっ！」
同じ要領で、リアと息を合わせながらタイミング良く攻撃を繰り出していく。
「グゥィ、ガァッ！」
一瞬たりとも気の抜けない攻防が永遠と続く中、徐々にLvの身体が削り取られていく。
このままいけば、なんとか押し切れるのでは……と、僕が期待を持った、そのとき、
――ピ……ピー！　ピー！
スマホが非情な通知音を奏でる。体力ゲージが尽きかけていることを知らせる、アラートメッセージだ
『ケケケ、運命の女神ハ、ボクに微笑んだようだナ』
その意味するところを当然承知しているLvが、獣の双眸をニヤリと歪ませる。
「くそっ……！　あと少しなのに……！」
もう後戻りはできない。僕は最後の最後まで希望を捨てず、全力で拳を振るい続ける。
「ああああああ

やれやれ。悔いの残らないようにとは言ったが、命を粗末にしろとは言ってないぞ？

突然どこからか響いたのは、懐かしい友の声。見ると、懐に忍ばせていた橘（たちばな）のスマホが淡い光を放っている。

――次の瞬間、光は爆発的に膨れ上がり、僕の視界が一面の白に包まれた。

「――よう、久しぶり」

「P　橘――！」「俺、何が……」

「俺もよく分からんが、スマホの中にデータの断片が残ってたみたいだな。ははは、流石俺。伊達に二回死んでないってな」

突如目の前に現れた橘「とその接触が何かのきっかけになったのか、スマホの中で眠ったようになっていた彼の意識が、ここにきて覚醒したのだという。

橘は、知ってたのか？　自分が、その……、既にいない人間だったって」

「いいや、気づいたのはついさっきだ。言われてみれば、俺ってお前たちと学園生活を過ごした記憶ってまったくないんだよな。どうしていままで気づかなかったんだろ？」

「……ははは。うっかりもいいところだな」

あまり細かいことを考えなさそうなこの性格が、案外ゲストプレイヤーに選ばれた一番の理由なのかもしれない。

「なんにせよ、もう一度お前と話す機会があってよかったぜ。どうしてもひと言、礼を言っておきたくてな」

何のことかと首をかしげる僕に、ふっと優しげな笑みを浮かべた橘がつぶやく。

「――最後まで、俺を信じてくれてありがとな。ホント、嬉しかったぜ」

「あ……」

「お前が理屈抜きで俺を信じてくれたから、こうしてもう一度会うことができた……ってのは、ちと出来過ぎか」

「ははは……、そうだったら、いいな」

小さく笑い合う、二人。――しかし、命運もそう長くは続かない

「おっと、そろそろ行かなきゃな」

「……もう、会えないのか？」

「まあな。言ってみれば、これは人生のボーナスゲームみたいなもんだったんだよ」

分かっていたことだが、やはりどうしようもない寂しさが胸を締め付ける。

「お前は怒ってくれたけどな、俺、こっちには感謝してたりもするんだぜ。アイツのおかげで、お前やリアちゃんたちに出会えたんだからな」

「……そう、だな」

「だからといって、間違いはちゃんと正さないとな。そのあたりは、任せたぜ」

橘の激励は嬉しいが、正直打つ手がない状況だったことを思い出す。
「実はお前にとっておきのプレゼントがあるんだ。後でスマホのアルバムを見てみな」
何か企んだような笑みを浮かべた橘は、ふと目を細め、小さく息を吐く。
「……そろそろ、本当にお別れの時間だ」
スマホから溢れる光が、徐々に橘の姿を包んでいく。
「世話に……なったな。橘のおかげで、僕はここまで来ることができた」
「俺がしたことは、ただの「大きなお世話」さ。お前に沢山の仲間ができたのは、あくまでお前自身がこのダンジョンでいい方向に「変化」したからだと思うぞ」
「……だとしても、橘がいてくれたからこそ、できたことだ。本当に感謝してる」
「ははは、よせやい。照れるじゃねぇか」
もうほとんど確認できない橘の顔。だが、彼はもう一度、あの人懐っこい笑みを浮かべた。そんな気がした。
「じゃあな。俺の分まで、日一杯人生を楽しんでくれ――遥人」
「ああ。向こうでゆっくりと土産話を待っていてくれ――悠士」
精一杯の笑みとともに、親友を送り出す。やがて、光が再び世界を覆っていく。

「アルバム、だったな……」
ホーム画面が表示されたままのスマホからアルバムを起動する。
「！　！！！

――〈脱・獄・クラック〉

スマホから再びワンオフアプリを起動させる。

『ケケケ、馬鹿の一つ覚えみたいに何度も同じ手が通用すると思ったラ、大間違いだゾ』

余裕の笑みを取り戻す[ニヤ]。しかし、次の瞬間　その笑みが凍りつく。

『――〈脱獄・改式〉！』

『ナッ……！？』

僕は、〈脱獄〉の力を自分自身に行使する。

――導き出した〈弱点〉に高負荷を掛けることで対象の有り様を改変、破壊まで至らしめる僕のワンオフアプリ。その力を僕自身に使えば――！

「世界を変えるには、まず自分自身が変わる必要がある　……こんな基本的なことに、いままで気づかなかったなんてな」

自分の殻に閉じこもり、ひたすら周囲が自分の都合のいいように変わってくれるのを待っていた以前の僕　それは、一切の責任をプレイヤーに押しつけ、思い通りの世界が出来上がるのを高みの見物しようとした[ニヤ]と、本質的に同じだ。

――周囲を変えるんじゃない。自分から『変化』することで、世界が変わるんだ。

僕の全身を包んだ光の鎖が、高密度のエネルギーとなり吸収されていく。

「はあああぁぁぁあああああああぁぁぁ

とができない〈脱獄〉の二重使用も相俟って、体力ゲージもみるみるうちに減少していく。

「くっ……！」

あと少し、あと少しが届かない。結局僕は、何も変われていなかったのか……、

――ピピッ

そのとき、スマホが聞き馴染んだ通知音を奏でる。

【Ruby：@HAL　童貞クンっ、ガンバ！】

【Neko：@HAL　援〈援〉は届きませんが、わたしたちが付いてますです！】

「……そうか、そうだったな」

また、大切なことを見失うところだった――僕は決して一人で戦ってるわけじゃない。

「――〈脱獄・カスタム〉！」

何かに導かれるように、僕はスマホの画面を即座に切り替え、〈脱獄〉のアイコンをロングタップ――〈掲示板〉へと合成させる。

「――〈拡張世界〉！」

殻に閉じこもっていた自身から「脱却」した、その変化の象徴。仲間たちの元へと開かれた僕の「世界」が、〈呪縛〉が持つ破壊の力に彼らの想いを乗せる。

【Isuna：@HAL　応援してるのは、ルミちゃんだけじゃないよ！】
【Ban：@HAL　おうよっ、いっちょデカい一発喰らわせてやれ！】
【Ryo：@HAL　いままで散々いいようにこき使われてきたんだ　一発だけじゃ足りないくらいだぜ】
【Kota：@HAL　そうだそうだ！　できるもんなら俺が代わりたいくらいだ！】
【MIHO：@Kota　ばーか、アンタじゃ力不足だっての】
【Met：@HAL　私はあまり役に立てなかったけど、絶対に勝って帰ってきてね！】
【Kei：@HAL　無事帰ったら、みんなでパーッと騒ごうぜ！】
【Arisy：@HAL　――竜胆　俺たちの気持ち、お前に託したぞ】

一人で全てを背負おうとする必要はない。僕には、苦しいときは支え合い、間違ったときは遠慮せずその間違いを正してくれる、そんな頼もしい仲間がいる。
「仲間に助けを求めることができるようになった――それが、ダンジョンでの冒険を経て生まれた、僕にとって最大の『変化』だ……！」

スマホから伝々と溢れ出てくる、仲間たちの熱い想い　その全てが膨大な光の奔流となり、世界を一つに繋ぐ強固な絆へと変化する。

「ナ……ッゼ！」

僕の両腕を伝いLaseへと襲いかかる光の連鎖が、ついに門をこじ開け、怪しい輝きを放つ核を露出させる

「グググッ……、まダ、核のある深奥までハ、届いてないゾ……！」

Laseは、苦悶に歪む口元に微かな笑みを浮かべる。その言葉通り、〈拡張世界〉の力は開門状態を維持するのに精一杯だ。……だが、

「これで……いいんだっ！」

「何ィッ！」

振り返らずとも分かる。ここにも一人、僕にとってかけがえのない仲間がいることを。

「リアっ、いまだ……っ！」

「ぇ？」

「ええ！　任せておきなさい！」

僕のすぐ後ろまで移動していたリアが、絶妙のタイミングでロノドを掲げ叫ぶ。

「――〈極炎球〉！」

門をさらにこじ開けるようにして、猫人の炎球がLEVへと襲いかかる。
「ガァァ……！　マ、まだまダァァァァッッッ！」
激しい咆哮とともに、LEVの身体が大きく膨れあがり、炎球を受け止める。
「ハルト！」
「ああ！」
声でリアの考えを察した僕は、スマホに残された最後の魔法アプリを起動する。
「――〈爆氷球（ばくひょうきゅう）〉！」
〈脱獄〉の力と混じり合い生み出された特大の氷塊が、リアの攻撃を後押しするように炎球へと衝突――そのまま二つの球は一つに融合し、その有り様を変化させる。
「ア、ナ、何だトッッッ？」
現世界と図書界、二つの異なる理によって生み出された魔法の融合、LEVが追い求めてやまなかった新たな「可能性」が、まったく違った姿でLEV自身に襲いかかる。
「〈爆新星（ばくしんせい）〉！」

超圧縮された高エネルギー体が、門を通り抜け、核へと到達する。

「いけえええええええええええ――――――――――――――――――――――――っっっっっっっ!!!!」

ありったけの想いを込めて、リアと二人、力の限り叫ぶ。

『ガァッ、アッ、アアアア

＊＊＊

——微睡む意識の中、視界に何かの映像が映し出される。

「（……これは、夢、か？）」

遥か空から世界を見下ろす感覚に、霧をたゆたっていた意識がぼんやりと覚醒する。

「（あれは……）」

見慣れた学園の教室では、僕の座る机を囲むようにして、山吹や胡桃沢、葦田や百合原といった仲間たちが、取るに足らない話で楽しげに花を咲かせている。そして……、

「（！　あ、あぁ、……）」

——皆の輪の中には、制服に身を包むリアや悠士の姿まである。

「（幸せ、だな……）」

理想の世界は何かと尋ねられたら、これ以外に答えようがないというほど、そこは暖かな空気に包まれていた。

「（……でも、）」

願いを叶えるためには、まず夢から覚めなければいけない。僕の望む世界を手にするた

め、僕は理想の世界に別れを告げる。

「さよなら」

ゆっくりと瞳を閉じた僕の目蓋には、柔らかな光に包まれ輝く無数の笑顔が、いつまでも、いつまでも残り続けていた……。

XXI

「――朝、か」

郷愁すら覚える、見慣れた天井。微睡む意識の中、僕はベッドから身体を起こす。

「……」

ふと、自身の手をジッと見つめる。あれから数日が経っていたが、未だ目が覚める度、この世界が現実のものなのか分からなくなるときがある。

「なんて、いつまでも感傷に浸ってる場合じゃないな」

枕元の時計を見れば、それほど時間に余裕があるわけじゃない　僕は勢いよくカーテンを開け、差し込む朝日を全身に浴びながら強引に頭を覚醒させた。

*

「おはよう」

教室の入り口付近で談笑していた藤田と百合原に声を掛ける。

「おー、おはようさん」

「おはよっ、今日はちょっとゆっくりだね？」

……ちょっと、朝食を食べ過ぎてね」

二人としばし言葉を交わし、自分の机に移動する。

「……」

八割ほどのクラスメイトが揃った教室内をゆっくりと見回す。まだ、頻繁に話すのは九ほどの二人くらいだが、焦る必要はない。こちらが妙な壁を作らずにいれば、自然と親しくなる機会が巡ってくるだろう。

「よっ、なーに黄昏ちゃってんの？」

ポンと肩を叩かれ振り返ると、そこには別のクラスにいるはずの山吹の姿があった。

「どうした？　そろそろホームルームがはじま……」

「おはよっ」

「？」

「だーかーら、お・は・よっ！」

「あ、ああ　おはよう」

「うん。よろしい。あっ、白倉原チャン、コレあんがとねー」

満足げにうんうんとうなずく山吹。どうやら白倉原に借りていた漫画のデータを返しに来ていたらしい。

「胡桃沢とは、あれからどうしてる？」

「すっかりマブダチだよー、昨日も遅くまでメールに付き合わせちゃったから、まだ寝てるかも？」

「……ほどほどにしてやれよ」

元より、夜間で遅刻の常習犯らしい彼女。成績優秀なため大目に見てもらっているが、既に出席日数がマズい状況なんだとか……。

「ダンジョンにいた期間がそのままだったら、アタシたち全員御年だったかもねー」

「考えるだに、ぞっとするな……」

――ダンジョンから現世界へと戻り、図書館で各々目が覚めた僕たち。ところが、あれだけ長期間ダンジョン内にいたにもかかわらず、こちらの時間ではほんの数分しか経過していなかったらしい。浦島太郎になることが避けられたのは喜ばしい限りだが、ここ数日の間は皆、強い時差ボケのような状態に延々悩まされていたようだ。

「結局、あのダンジョンってなんだったんだろーね？」

「……さぁな」

この言葉通り、悠斗を除く「死亡」扱いとなっていたプレイヤーたちは、僕らと同時に現世界への帰還を果たしていた。僕や山吹も含め、プレイヤーとなっていた生徒たちは、あの不思議な体験の記憶を持っているが、例の時差問題もあり、誰に言っても「白昼夢でも見ていたのだろう」と信じてもらえなかったらしい

ともすれば僕でさえ、全て夢の中の出来事だったのではないかと錯覚してしまうほど、すっかり変わらぬ日常を取り戻した現在。

――しかし、あの冒険の日々が確かに存在したことを示す証拠が、二つほどあった。

「ま、ま、間に合った――――――――っっっ!!!」

チャイムと同時に教室に飛び込んできたのは――。

「……毎度毎度、ギリギリで遅刻を免れてるのは凄いが、もう少し早く登校すればいいだけの話じゃないか？　――リア」

「だ、だってっ、あの電車ってのがまだよく分からないのよ！　何よっ、あのダンジョンみたいな複雑さは！」

真新しい制服に身を包み、顔を赤くしながら叫ぶリア。……まあ、こっちに来てまだ数日じゃあ、慣れないのも無理はないか。

――ダンジョンから帰還した翌日。突如、ウチのクラスに転入生としてやってきたリア。なぜか図書室でなく現世界で目が覚めたのだという彼女は、大した事情を説明する間もなく、あれよあれよと神奈本学園長のところで世話になることが決定していたのだとか。

「僕が図書室へ行けたんだから、リアがこっちに来られない理由はない……けど」

聞くところによると、リアもダンジョンタリア直後に溢れた光の中、僕と同じように見知らぬ教室内で制服を来て談笑する自分の姿を夢で見たらしい。

「トップでダンジョンをクリアしたプレイヤーには、望む願いを一つだけ叶える……か」

最後、ヒースにトドメを刺したリアと僕の融合魔法。あれによって願いが叶えられたのだとしたら、それは僕の願いだったのだろうか、それとも……。

「……本当に、図書界に戻らなくてよかったのか？」

「まあ、王位は弟が継ぐから問題ないでしょ。正直言うと、私なんかよりあの子のほうがよっぽど王にふさわしいと思ってたし」

ウィステリア王国は女王制のため、自身が王位を継がなければならないことがずっと重荷だったというリア。しかし、いまの彼女なら立派に女王が務まると思うのだが……。

「何よ、ハルトは私がいないほうが良かったって言うの……？」

不安げな瞳でこちらをうかがうリア。

「……そんなことないさ。こっちにいることを選んでくれたなら、素直に嬉しいよ」

「べ、別に、ハルトのためだけで現世界に来ることを望んだわけじゃないんだからっ！」

「ツンデレいただきました！　しかも微妙に隠せてないし……。ニクいねっ、竜胆クン」

「何言ってるんだか……、ん？」

山吹に脇を小突かれながら、ふと気づき、妙に静まりかえった教室内を見回す。

「「「……」」」

いつの間にか教壇に立っている担任教師も含め、クラス内の全てが、悟りでも開けるんじゃないかと思えるほど、一切の感情が抜け落ちた表情でこちらを見やっている。

「わわっ！……」

顔を真っ赤にしながら、慌てて自分の席に戻るリア。徐々に生暖かい視線へと変わってく皆の瞳は、未だ僕に向けられたままだ。

「これで名実ともにぼっち卒業だね！　ついでにアタシとも噂になってみる？」

「……勘弁してくれ。それよりも山吹、いいのか？」

気づいていない様子で首を傾げる山吹に、僕は教室内の時計を指さす。

「もうホームルームが始まってしばらく経つ時間だが、いい加減、自分の教室に戻らないとマズいんじゃないか？」

「……あ」

言葉を失う山吹に追い打ちをかけるように、ホームルームの終了を告げるチャイムが無情にも響き渡ったのだった。

「――ここは来週の中間テストで出るから、ちゃんとチェックしておけよー」

チョークのカツカツという音と、皆がノートを取る鉛筆のカリカリという音、そして一部生徒から聞こえてくる小さないびきをBGMに、僕はゆっくりとスマホを取り出す

「……」

LaVeは、あのダンジョンを僕らが住むこの世界の延長上に在るものだと言った。まったく別の世界ではなく、されどわずかに理を異にする拡張世界　そんな不確かな世界が、確かに存在したもう一つの証拠　――それは、このスマホの中にあった。

「まだ、終わってない……のか」

いまもスマホのホーム画面に鎮座する『LABYRINTH』のアプリ　現在は起動ができない状態だが、削除もできない　奇妙な存在感をもって静かに佇むアプリアイコンは、僕たちの冒険がまだ道半ばであることを小暁するかのようだった。

「――来るなら来い　何度でも、お前の間違った考えに抗ってやる」

いつか再び、LaVeと相まみえるその日まで、僕は精一杯前を向き、行動し続ける。時には壁にぶつかり、挫けるときもあるだろう。どうしようもない理不尽な出来事に、誤った判断を下してしまうこともあるかもしれない。でも、僕の傍には、互いに支え合い間違いを正し合える仲間がいる。

「ふむふむ――、んー……？」

隣の席では、リアが教師の話を聞きながら、熱心にノートを取る様子が窺える

「はは……」

現世界のことを真剣に学ぼうとする彼女に、喜びのあまり笑みがこぼれる。ダンジョン内で常に僕を支え続けてくれたリア。今度は僕が、現世界での生活を選んでくれた彼女の事業をサポートする番だ。

迷宮攻略で得たかけがえのないものは、いまこの時も息づき、確かな礎となっている。沢山の仲間たちと力を合わせ、世界をとことん満喫していこう。

「人生だって、ダンジョンだ。……なんて、な」

僕は、これからも歩き続ける。――狂おしくも、愛おしい、この現実を

あとがき

初めまして！《陽のあたる作家道（ライティング・サンライン）》の二つ名を自ら名乗るさすらいの物書き、逢上央（あいかみひさし）です。……って、これは別シリーズだった。

デビュー作「オレを二つ名で呼ばないでー」は、あとがきを登場人物の座談会風に書いており、こういった形で書くのは初めてだったり。な、何を書けばいいんだろう？……ともかくあえず、突然始まったこの新シリーズ「なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか　竜胆（りんどう）流人の迷宮攻略（ダンジョンアタック）」（な、長い……）が生まれるまでのお話でも少し。

実はこの作品、「二つ名」五巻を書き上げた後に、急遽思いついた企画が元だったりします。以前ワタクシの母校で校舎の改築工事の際に敷地を掘り返したら遺跡が出てきた、という話があったのをふと思い出し、「学園校舎の下からダンジョンが出現して、それが異世界に繋がってたら面白いんじゃねっ」と思い至ったのがキッカケとなっています。

その後、現代世界と異世界を繋ぐダンジョン、というところから「拡張世界」というキーワードが生まれ、それを象徴するガジェットとして「スマホ」を組み合わせることを思いつき、ワンオフアプリ等のアイデアが生まれた結果、今作が誕生したというわけです。

スマホでゲームを楽しむものは当たり前のようになっていますが、スマホを使ってリアル

ダンジョンを冒険する……となると、そこにはどんな世界が広がっているのか、そんなワクワク感を目一杯詰め込んでみました。スマホ片手に楽しんでいただければ幸いです。

さてさて、謝辞でございます。

イラストを担当して下さった魔太郎様。最後の最後まで色々と設定やら文章やらを弄ってしまい、大変申し訳ありませんでした！　はじめてキャラデザをいただいたときから現在まで、魔太郎様の描かれる達人たちが厨病を青くワタクシの大きなモチベーションでした。本当に、言葉に尽くせぬほど感謝しております……！

新担当のO様。夜遅くまで何度もスカイプ会議にお付き合いいただきありがとうございました。今後はもう少し面倒を掛けないよう精進しますので、どうかご容赦を……。

宝島社編集部、営業部の皆さま、デザインを担当して下さったAMBERGLOW様、他、この本に関わっていただいた（関わっていただく）全ての方に、最上級の感謝を。

そして、本作をお手にとっていただいたアナタ様。アナタ様がいてくださるおかげで、ワタクシはこうして新しい作品を世に出すことができました。どうかこの物語を存分に満喫していただければ、至上の喜びでございます。

願わくは、皆さま方とのお付き合いが末永きものになるよう、心底祈っております。

（実はガラケー使いな）逢上央！

本書に対するご意見、
ご感想をお待ちしております。

〒102-8388　東京都千代田区一番町25番地
株式会社 宝島社　編集局 第8編集部
このライトノベルがすごい！文庫 編集部
「遠上央士先生」係
「魔太郎先生」係

このライトノベルがすごい！文庫 Website
[PC] http://konorano.jp/bunko/
編集部ブログ
[PC&携帯] http://blog.konorano.jp/

この物語はフィクションです　実在する人物　団体等とは一切関係ありません。
QRコード　株式会社デンソーウェーブの登録商標です

このライトノベルがすごい!文庫

なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか
竜胆達人の迷宮攻略

2014年7月24日　初1刷発行

著者　遠上央士（おうえ ひろし）

発行人　瀬見清一
発行所　株式会社 宝島社
〒102-8388　東京都千代田区一番町25番地
電話｜営業 03(3234)4621 / 編集 03(3239)0599
http://tkj.jp
郵便｜00170-1-170829 (株)宝島社

印刷・製本　株式会社廣済堂

乱丁・落丁本はお取り替えいたします
本書からの無断転載・複製・放送することを禁じます

©Ouji Aue 2014　Printed in Japan
ISBN978-4-8002-2621-2

第1回
「このライトノベルがすごい！」大賞
優秀賞
受賞作家
スクールライブ・オンライン！1〜3
木野裕喜 イラスト hatsuko
起立、礼、ログイン！
新機軸のオンラインゲーム小説！
〔1巻あらすじ〕「楽しみながら学ぶ」を目標に授業にオンラインゲームを取り入れ、大きな成果を上げた私立栄嶺学園。だがその結果、今日では生徒たちの間に「レベルこそがすべて」という風潮が広がっていた。蒼葉雪央はそんな現状に辟易を覚え、ひとり孤独なプレイを続けていたが、ある日の大型アップデートを境に、彼の学園生活は大きく変わり始め――。リアルとゲームが交錯する、学園×オンラインゲーム小説！
本体600円〜648円＋税

このラノ大賞 検索

第3回
「このライトノベルがすごい！」大賞
優秀賞

そのオレを二つ名で呼ばないで！

逢上央士（あいうえおうじ） ①～⑤

イラスト：COMTA（こまた）

俺の二つ名、マジ残念すぎ
学園異能力バトルスタート

〈1巻あらすじ〉俺、御手洗新（みたらいあらた）は
んでいた。今日、学園のシステムに登録すれば
れの〈二つ名〉が手に入る。ギリギリまでカッコ
名前を考えて申請に向かった俺だったが、新
〈二つ名〉は登録されていた!? 屈辱的な二つ名
いてしまった俺は、風聞者の扱いをなんでもひ
叶えるという〈依全符〉で復讐を目指すことに

定価 本体5B2

このライトノベルがすごい!文庫
最新情報は公式サイトをチェック!
……http://konorano.jp/bunko/
新刊情報、書き下ろし新作短編など、随時更新中!
このライトノベルがすごい!文庫"スペシャルブログ"には書き下ろし外伝、新刊試し読みなどコンテンツ盛り沢山!
http://blog.award2010.konorano.jp/
編集部からの最新情報は、"編集部ブログ""公式twitter"にて!
http://blog.konorano.jp/
@konorano_jp
このライトノベルがすごい!文庫は毎月10日ごろ発売!

9784800229212

1920193005806

ISBN978-4-8002-2921-2
C0193 ¥580E

定価：本体580円＋税

宝島社

なぜ異世界ダンジョンでスマホがつながるのか
電脳迷人の迷宮攻略

突如ダンジョン探索ゲーム「LUVYRINTH」に入り込んだ高校生　単野迷人　このダンジョンでは自らのスマホを頼りに攻略を進めなければならない。スマホのバッテリーが自分の体力となっており、メーターがゼロになると即「矢切」！　モンスターや仕掛けは、アプリを駆使して突破せよ！　自分専用の「ワンオフアプリ」が攻略の鍵となる！　スマホが異世界をつなぐ　新たなるダンジョン探索ファンタジー開幕！